

萩市郷土博物館研究報告

第 12 号

萩市郷土博物館
2002



萩市郷土博物館研究報告

第 12 号

萩市郷土博物館

2002



5712

慈市博物館

目 次

登録文化財鹿背隧道について

..... 樋口 尚樹 1

萩市越ヶ浜 客死者墓誌

..... 清水 満幸 8

萩市の民俗芸能 — 神楽について・その1 —

..... 清水 満幸 12

長井雅楽旧宅について

..... 柏本 秋生 34

萩における磁器生産について — 小畠焼・その1 —

..... 柏本 朝子 45

大野毛利家上屋敷跡遺跡（旧市立病院跡地）発掘調査について

..... 岡村 良和 73

阿武町長沢大堤の改修工事とフネドブガイ *Anemina arcaeformis* の生息

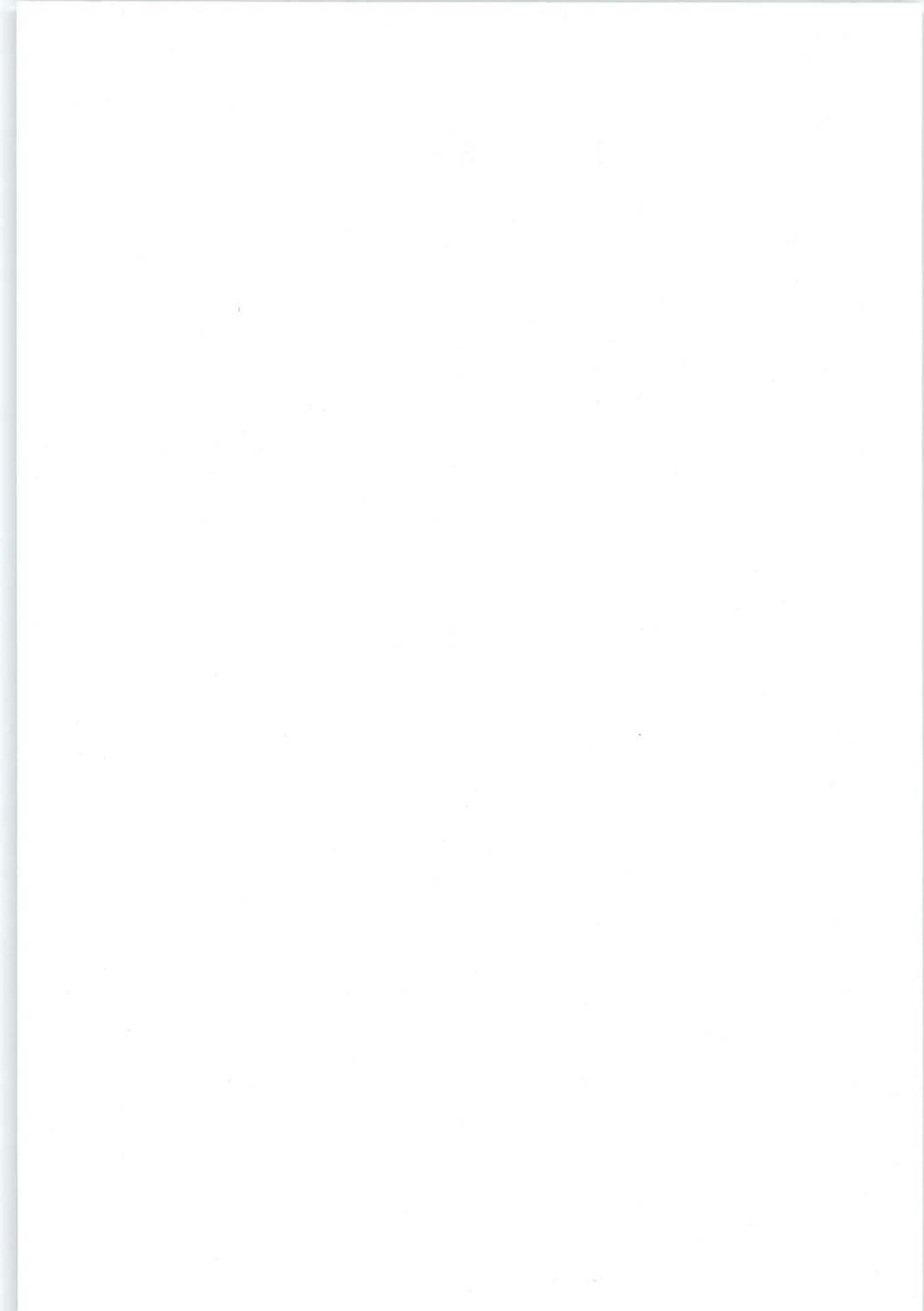
..... 増野 和幸 83

萩市笠山における開花していた植物の季節変移

..... 伊藤 靖子・弘長 純忠 86

山田顯義の奥平謙輔宛書簡について

..... 道迫 真吾 (1)



登録文化財鹿背隧道について

*樋 口 尚 樹

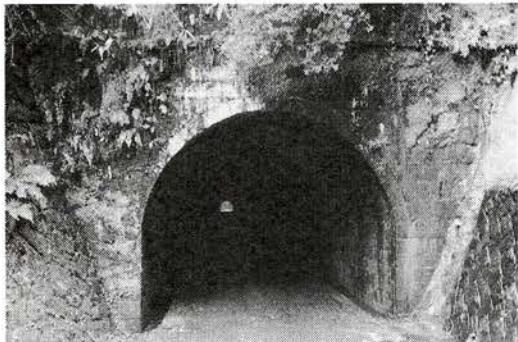
1. はじめに

鹿背隧道は、萩市南郊の椿と阿武郡旭村明木を結び、市道椿ヶ坂線と村道椿ヶ坂線上にある石造のトンネルである。この隧道は明治17年（1884）に開通し、山口県下最初の石造洋風隧道として再現することが容易でないという基準で、平成11年（1999）国の登録有形文化財に指定された。

筆者は、平成10年に山口県教育委員会が刊行した『山口県の近代化遺産』に鹿背隧道についての簡単な報文を寄せたが、今回この文章に少し肉付けする形で、隧道工事に至る経緯や工事の状況などについてまとめてみたい。

2. 工事に至る経緯

日本海側の萩と瀬戸内海側の小郡（現、吉敷郡小郡町）を結ぶ陰陽連絡道は、明治9年（1876）に仮定県道17号線となった。しかし、いまだ狭隘、曲折、険阻な道路のため、人力車や荷車などの通行に支障を来す状態で、道路の改修に迫られていた。⁽¹⁾時あたかも、明治11年に地方税規則が公布されて、従来の府県税・民費を改め地方税とすることになった。⁽²⁾この時、山口県の県税・民費の支出残額は、7万8,000円余あった。これをそのまま地方税に引き継ぐではなく、別途に積み立てることとなり、明治13年の県会において7万8,000円余のうち、3万3,000円を地方税の準備金、2万円を山口中学校の資本金、2万5,000円を萩・小郡間の仮定県道の改修費に充てることが決議された。⁽³⁾



鹿背隧道の現況

その決議書には、当時の萩の現状を次のように記している。⁽⁴⁾

阿武郡萩ノ如キハ、高山四囲昔時旧藩要害ノ地ニシテ人烟稠密繁盛ノ城市タリシニ、廢藩以来形勢隨テ変シ、士民方向ヲ失シテ窮途ニ脳ムモノ年一年ヨリ甚シ、此時ニ方テ益々興産ノ方法ヲ講セスンハアルヘカラスト雖トモ、今猶職工物産ノ出入之ヲ他ノ北部村落ニ比スレハ、其幾百倍ナルヲ知ラス、此出入アリテ又此不便アリ

旧城下町萩は、廢藩後も県内北部地方の経済流通の中心地であるが、交通が不便なために經濟的な地盤沈下に陥りつつあるという。

決議書はさらに続けて、県道改修の必要性を次のように訴えている。⁽⁵⁾

将来物産ノ興隆ヲ欲セハ、先ツ見聞ヲ四方ニ馳セ、来住ノ便ヲ得セシムルニ如カス、来住ノ便ヲ得セシメント欲セハ、必ス平坦ノ道路ヲ開カサルヲ得ス、故ニ北部ヨリ南部ニ達スルノ路線ヲ測ルモノ数回、略ホ得ル所アルカ如シ

萩の経済発展のためには、交通の便を図ることが必須の条件であるとして、萩と小郡を結ぶ県道の改修が決議されたことが分かる。

県道の改修工事は、まず明治15年に小郡と大田（現、美祢郡美東町）間から着工、翌年1月に完工した。ついで明治16年3月、大田・萩間の改修工事に着手、翌17年7月に完了した。これによって、道幅が13尺（約3.9m）⁽⁶⁾に広がり、車馬の通行が円滑化された。

県道改修工事に併せて、椿西分（現、萩市）と明木（現、阿武郡旭村）との境をなす倅坂塙を貫通する、鹿背隧道が完成したのである。明治16年6月4日に隧道工事に着工し、翌17年7月17日に開通式が挙行された。⁽⁷⁾ 隧道の長さ100間（約180m）、幅14尺（約4.2m）、高さ13尺（約3.9m）⁽⁸⁾ で、県下で最初の石造隧道であった。鹿背隧道の完成によって、小郡・萩間の県道改修のすべてが完了したのであった。

この改修工事に要した費用の概算は、小郡・大田間9,481間（約17km）が1万2,473円余、大田・萩間1万3,478間（約24km）が2万6,518円余、鹿背隧道100間（約180m）が1万3,200円であった。⁽⁹⁾ 総工事費5万2,191円のうち、2万5,000円は県税・民費の支出残額を充て、残りの2万7,000円余は県道が通過する、吉敷・美祢・阿武各郡の住民の寄付金によるものであった。⁽¹⁰⁾

これら改修工事のうち、鹿背隧道の開削工事はとりわけ難工事であるとともに、萩の経済復興の鍵を握る重要な工事として認識され、多額の工事費を必要とした。そのことは、明治17年7月17日の鹿背隧道開通式における、山口県令原保太郎の次のような祝文がいみじくも言い得ている。⁽¹¹⁾

鹿背阪ハ萩城ノ南許ニ在リ、県下南部ニ達スル咽喉ノ地ニシテ、其險峻崎嶇昔日ノ□□以テ固メトスル所ナリ、萩ハ毛利氏ノ旧城ニシテ人煙稠密頗ル繁盛殷富ノ地ナリシモ、廢藩以来士民究置漸ク悴困ヲ極ム、往々殖産興業ヲ謀ルモノアルモ、險ヲ平ニシ道ヲ開クニ非サレバ、貿易ノ利交通ノ益ヲ見ル事ヲ得ス、向ニ県会ノ議ヲ採り路線ノ改修ヲ計画シ、爾來前後ノ道路畚失事ニ従ヒ既ニ其績ヲ底ス、独鹿背ノ浚阪ノ如キハ刻削シテ坦途トナスモ、両崖壞崩ノ恐レナキ事能ス、唯隧道ノ之レヲ通スル有ルノミ、然レトモ其費額ノ巨大ナル支給ノ方ニ苦シム、置テ為サレハ九仞一簣ノ歎ナキ能ハス、是ニ於テ阿武郡長及ヒ地方篤志ノ諸士奔走協議郡民ヲ勧奨シ、巨多ノ金員ヲ醵集シテ此挙ヲ翼賛ス、旧藩主モ亦若干金ヲ寄贈セリ、以テ洞門甃石ノ費ニ充テ其功ヲ竣フ

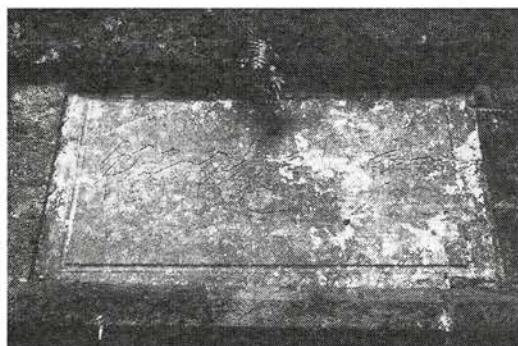
鹿背隧道の工事費を捻出するために、口羽良介阿武郡長以下篤志家たちが奔走してその資金を調達したのである。また、「旧藩主」すなわち毛利元徳も寄付をしている。寄付金募集の事務

所は、萩の西田町に置かれ、「鹿背阪墜道補助費醸集会所」と呼ばれた。⁽¹²⁾その趣意書によれば、「藩庁南遷以降疲弊日ヲ逐テ相迫」と、文久3年（1863）の山口移鎮以後、萩の経済は日に日に疲弊してきたと、その窮状を訴え、「吉敷郡小郡以北美祢郡ヲ經テ、以テ萩地ニ達スルノ車道ヲ開キ、間接之ヲ救援サル、ノ幸福ヲ得タリ」と、萩・小郡間の県道改修が萩の経済発展の一助になるという。しかし、「其費途終ニ鹿背ケ阪ノ嶮ヲ凹堀スルニ充タス」と、隧道開削の工事費が不足し、そのため「生等數輩一身ヲ牲シ義金ヲ闇郷ニ釀シ、以テ本資一円ヲ補助シ該阪腹ニ墜道ヲ穿チ」と、隧道工事費のうち、1万円を住民の募金によって補おうという。鹿背隧道開通に萩の命運を賭ける、住民たちの並々ならぬ期待のほどがうかがえるのである。

このように、鹿背隧道は藩庁が山口に移って以降、衰退する萩の経済を復興する、言い換えれば旧城下町萩の面目を回復するための交通機能を担わされていたといえるのである。

3. 鹿背隧道の工事

鹿背隧道の開削工事は明治16年（1883）6月4日に着工し、翌17年5月25日に隧道内部に石を張る甃石工事が完了したが、この間延べ1万8,000余人の人力を要したという。⁽¹³⁾隧道本体の掘削工事に伴う発破作業は、明治16年9月6日から同年12月23日にかけて実施され、その間の発破穴数は総計3,094箇所に及んだ。⁽¹⁴⁾また、堀割り・溝割り工事など隧道の外回りの工事にお



「鹿背隧道」と陰刻された題額

いては、明治16年6月5日から翌17年6月10日までに、延べ6,423人の人夫を要している。⁽¹⁵⁾

さて、隧道工事を請け負った人物として、増山宗史・加来儀平・金刺政右衛門・福田亀吉ら4人の名前が見え、これら4人には、ダイナマイト・雷管・焰硝など隧道掘削のための発破作業用道具が配布されている。⁽¹⁶⁾増山宗史は、萩橋本町で酒造業を営むかたわら町会議員や県会議員を務め、また株式会社萩銀行や株式会社防長銀行の設立にかかわるとともに、防長度量衡株式会社や萩電燈株式会社を興すなど、実業家として活躍した。⁽¹⁷⁾加来儀平は大分県宇佐郡南毛村（現、宇佐郡安心院町）の住人である。⁽¹⁸⁾金刺政右衛門の経歴は不明である。

なかでも、福田亀吉は山口県大島郡久賀村（現、大島郡久賀町）の出身で、石組職と記されている。⁽¹⁹⁾久賀の石工は江戸中期以降、瀬戸内海・北九州沿岸部及び内陸部にかけて、塩田の潮止め、堤防工事、石波止の築造、河川の浚渫、隧道工事などに携わってきたという。⁽²⁰⁾亀吉は、山口町（現、山口市）と佐波郡右田村（現、防府市）を結ぶ勝坂隧道（佐波山洞道）の開削工事も請け負っているが、本格的な隧道工事を請け負ったのは、鹿背隧道が最初であり、本工事にかける意気込みが、明治16年12月3日に亀吉自身が県に提出した次の願書からうかがえる。⁽²¹⁾

私儀兼て石組職營業罷在候処、本年六月阿武郡明木村字鹿背ヶ坂隧道御開鑿ニ付、則チ該工場へ罷越當節迄引続働業仕候、就中高官ノ御説諭タル則該業ヲ専ラ勉強伝習シ、以テ後來其業ニ從事セシムヘキトノ御趣意奉得其旨、為ニ御管下各郡數十ヶ處御開修道路其他多分工事有之候ヲモ不顧、一層尽力仕居候

亀吉は、後に琵琶湖と京都市内を結ぶ水路、表1. 福田亀吉（頭領）組職人編成

琵琶湖疏水の掘削工事にも携わっている。おそらく、鹿背隧道と勝坂隧道における彼の工事経験と掘削技術が高く評価されたのであろう。

亀吉は石工集団を率いて各地の隧道工事等を請け負っていたが、勝坂隧道工事の際の職人編成は表1のとおりであった。⁽²⁴⁾鹿背隧道の工事も、⁽²⁵⁾勝坂隧道と同時期であるので、ほぼ同メンバーで担当したと思われる。頭領は、もちろん亀吉である。主作業を行う先山と、補助的な作業を行う後山の人数はほぼ同数である。鍛冶は、工事用道具の製作や修理に携わったのであろう。

これを職人の出身地別に見ると、圧倒的に大分県出身者が多い。とりわけ同県出身者は、国東地域と宇佐地域とで占められている。⁽²⁶⁾この地域も亀吉の出身地久賀と同じように、古くから石工集団が形成されていた。亀吉組の先山たちは、いずれも大島郡か大分県出身者であることから、これら地域の石工集団がいかに高い技術を持っていたかが分かろう。ちなみに、大島郡出身者8人のうち、7人は久賀村、1人は屋代村（現、大島郡大島町）である。また、大島郡以外の山口県出身者5人の内訳は、阿武郡椿郷東分村（現、萩市）2人、阿武郡川上村2人、熊毛郡1人であり、そのうち後山4人、鍛冶1人（椿郷東分村出身）であった。⁽²⁷⁾

ところで、田中助一氏は「鹿背隧道の巻石工事を萩の石工の山中武資が請け負って大損をしたと石工の古老から聞いた」と記されている。⁽²⁸⁾しかし、山中武資の名前は、管見のところ文献資料には検出することはできない。おそらく、武資ら萩の石工集団も、前述の隧道工事を請け負った人物たちの組に編成され、工事に携わったものと推測される。⁽²⁹⁾

前述したように、鹿背隧道は、明治17年7月17日に開通式が挙行されるが、その工事はかならずしも順調に進んだわけでもなかった。明治17年4月24日には、死者1人（大島郡久賀村の沖村卯吉）を出し、負傷者も31人を記録している。⁽³⁰⁾また、隧道開通後の明治18年10月15日には、隧道内の天井石が崩落の危険にあるため、枠留工事の起工を急がせているとともに、隧道内の水漏れ6箇所、合計19間余り（約34m）を報告している。⁽³¹⁾

役 割		出 身 地	
頭 領	1人	大島郡	8人
先 山	25人	山口県	5人
後 山	24人	大分県	39人
鍛 冶	3人	岡山県	1人
計	53人	計	53人

〔佐波山洞道掘削事業一件書類〕明治16年～21年〔1883～88〕
県庁戦前A土木36、山口県文書館蔵により作成

4. 隧道の開通

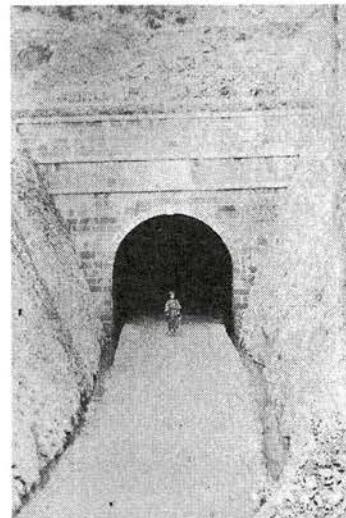
鹿背隧道の開通式は、明治17年（1884）7月17日に挙行された。『防長新聞』は同年7月23日と25日に特集記事を組み、式当日の景況を次のように伝えている。^[32]

鹿背坂の隧道ハ掛官が非常の勉強と注意の周密なりしより、差しもの大事業も滞り無く落成し、通行自由となりたれば、去る十七日同所南の口に於て開通の式を挙げられたり、隧道の入口にハ御酒を供え、鏡餅を重ねて天地の神祇を祭り、無数の球燈を木々の間に掛け連ねて壯觀を添られたり、美麗なる緑門を過ぎて式場に臨めバ、四方に幕にて囲ひたる中央に県令の坐を設け、左右に県会議員・県官・郡区長等列を正して居並び、正面に阿武郡長及び地方の貴紳工事に關係ある諸氏扣られたり、伶人内に在りて樂を奏し明世の徳を頌せり、幕外に參集する人民ハ歓呼して工事の美を歌ひ、聖代の祥瑞洋々たるの間に県令原君ハ除ろに立て坐を離れ、左の祝文を朗讀せられたり

県令ハ前号に記載せし祝文を朗讀し終らると、阿武郡長口羽氏ハ左の如き答詞を述べられたり

（中略）

此に次で二三郡長・常置委員の祝詞ありし後ち、写真師に命して一同の真影を撮写せしめ、兼ねて阿武郡長が用意せし萩天神社内の休息所に帰りたり、此の休息所ハ社内大樹の間に椅子卓机を並べ、四方を幕にて囲ひたれバ緑陰特に涼を覚え、会賓ハ郡長が注意の厚きを喜びたり、此の休息所の前ハ相撲場なり、同地浜崎の少年が奉納すると云ふ、此度の工事ハ各地の便益を増せし中にも、萩ハ特更に其の利を被れバ、開通式の当日にハ何なりと一趣向して景氣を添んものと待構へたることゆゑ、家々の軒頭にハ国旗を翻し提灯を掲げ、町々よりハ舞屋台を引出し、異様の風体にて踏舞り歩くもの多きなかにも、兵体の扮態にて馬車を引行し、五軒町の一連ハ隊伍の整列なると号令の嚴肅なるを以て、非常の喝采を得たり、此の賑を見んと近郷近村より来萩せし人数ハ、實に口云ふ能ハざるの多数にして、古老ハ天保十五年村田清風先生が羽子ノ台（羽賀台一筆者註）に狩せし以来、見ざる所なりと云へり、其の盛なりし推して知るべし
このように、開通式は厳かの中にも、華々しくかつ賑々しく執り行われた。萩の町々からは、踊り舞台などが繰り出し、まさに萩の町を挙げて隧道の完成を祝ったのである。萩の住民にとっては、待望の隧道開通であった。



竣工当時の鹿背隧道

5. むすびにかえて

鹿背隧道の開通は、萩における陸上交通体系の近代化の端緒をなすものである。それとともに、鹿背隧道は明治30年（1897）以前に築造された総石張りの道路隧道としては国内最長であるといわれているように、この隧道工事での技術的な蓄積が勝坂隧道や琵琶湖疏水の工事に生かされてきたはずである。このように、鹿背隧道は、近代道路交通における意義だけではなく、近代土木技術上においても重要な役割を果たしたといえるのではないか。

大正2年（1913）には、鹿背隧道を山口県における自動車登録の第1号となった乗合自動車が走った。これは、萩と小郡を結ぶ県下で初めてのバス会社（防長自動車株式会社）による定期バスの運行であった。⁽³³⁾

このように、鹿背隧道は萩のみならず山口県の道路交通においても先駆的な役割を果たしてきた。しかし、大正9年に萩から川上村を迂回して明木に達する幅4間（約7.2m）の新道路が開通すると、萩・小郡間あるいは萩・山口間を結ぶ自動車交通は、もっぱらこの新道が利用されるようになり、これら区間を最短で結んでいた鹿背隧道は、自動車交通の本道路から取り残されてしまった。

その後、平成4年（1992）に萩市と旭村明木を結ぶ萩有料道路の開通によって、鹿背隧道の西隣に長さ570mの萩往還隧道が完成した。この年、鹿背隧道開通から108年を経て、陰陽連絡道は再び最短ルートが現出したのであった。先述したように、鹿背隧道は平成11年に国の登録有形文化財に指定され、萩の近代化を支えた交通遺産として再びその存在意義が見出されることになった。

- 註 (1) 『萩市史 第二巻』(萩市、1989年、132ページ)
(2) 地方税規則は、明治11年に郡区町村編制法・府県会規則とともに公布され、地方三新法と呼ばれた（『国史大辞典 第九巻』吉川弘文館、1988年、445ページ）。
(3) 『防長新聞』明治17年7月23日付（山口県立図書館蔵）
(4) 「通常県会議決書」（官省公報類271、山口県文書館蔵）
(5) 前掲（4）
(6) 前掲（1）（132～133ページ）。
(7) 『防長新聞』明治17年7月25日付（山口県立図書館蔵）
(8) 前掲（7）
(9) 前掲（3）
(10) 前掲（3）
(11) 前掲（3）
(12) 「玉木家文書」（萩市郷土博物館蔵）
(13) 前掲（7）
(14) 「隧道関係書類綴込」（山口県行政文書県庁戦前A土木29、山口県文書館蔵）
(15) 前掲（14）
(16) 前掲（14）
(17) 『近代防長人物史 人』（マツノ書店、1987年復刻、130～131ページ）
(18) 前掲（14）
(19) 前掲（14）

- (20) 『日本民俗文化体系 第十四卷 技術と民俗（下巻）』（小学館、1986年、456ページ）
- (21) 「佐波山洞道掘削事業一件書類」（山口県行政文書県庁戦前A土木30、山口県文書館蔵）
なお、勝坂隧道（佐波山洞道）は、明治16年10月に起工し、同20年8月に開通した（『山口県政史 上』山口県、1971年、470ページ）。
- (22) 前掲（21）
- (23) 田村喜子『京都インクライン物語』（中央公論社、1994年、216ページ）。
なお、琵琶湖疏水は、明治18年6月に起工し、同23年4月に第一疏水第一期工事が竣工した（『国史大辞典 第十一巻』吉川弘文館、1990年、1107ページ）。
- (24) 前掲（21）
- (25) 前掲（21）
- (26) 前掲（20）（453～454ページ）
- (27) 前掲（21）
- (28) 田中助一「石造美術の名工山中武資のこと」（『史都萩』第33号、1976年）。
なお、同稿に山中武資は「藩政時代には藩御抱えの石工であったと思われる」とある。
- (29) 鹿背隧道の石材には、安山岩が使用されている。おそらく、笠山産のものと思われる。
笠山は萩市の北東部に位置する陸繫島で、江戸時代から石材の産地となっており、「笠山石」として知られていた。石材の切り出しにも、多くの石工たちが携わったことであろう。
なお、笠山における採石については、拙稿「笠山の自然環境史」（『萩市郷土博物館研究報告』第10号、2000年）を参照。
- (30) 前掲（14）
- (31) 前掲（21）
- (32) 前掲（3）（7）
- (33) 前掲（1）（271ページ）
なお、防長自動車株式会社（防長交通株式会社の前身）の創立者は、鹿背隧道の工事費調達などに奔走した阿武郡長口羽良介の長男口羽節介である。

付 記

本稿を執筆するにあたり、山口県史編纂室の淺川均氏には、『防長新聞』の記事の存在をご教示いただきました。また、鹿背隧道の石材については、萩市立萩西中学校の火除崇氏に同定いただきました。記して感謝の意を表します。

萩市越ヶ浜 客死者墓誌

*清水満幸

萩市越ヶ浜地区は萩市中心市街地の北東に位置し、集落は笠山と本土との間の陸繫砂州上に立地している。砂州の両側は、笠山に抱かれる形でそれぞれ夕瀬湾、嫁泣湾となっており、現在は漁港として整備されている。

江戸時代、越ヶ浜は萩城下町の外港として、北前船を初めとして多くの回船が寄港する港町でもあった。地区内には、現在でも、越前屋、越後屋、和泉屋、大阪屋など、国や都市の名前をいうカドナ（門名）が多数存在しており、その多くが船宿として寄港する回船とかかわりを持っていたという。

地区内中善寺（曹洞宗）の墓地と、フルバカ（古墓）と呼ばれる墓地とには、国や村、船などの名前を刻んだ墓が散見される。それらは客死者の墓と考えられるが、一部は現在も手向けの檻が供えられている。

以下では、国名等が確認できた墓碑銘を報告し、海上交通史調査研究の基礎資料としたい。なお、墓石の風化が進み判読が難しい文字については□表記としている。

《中善寺墓地》

墓1.（正面）覺巖良性信士

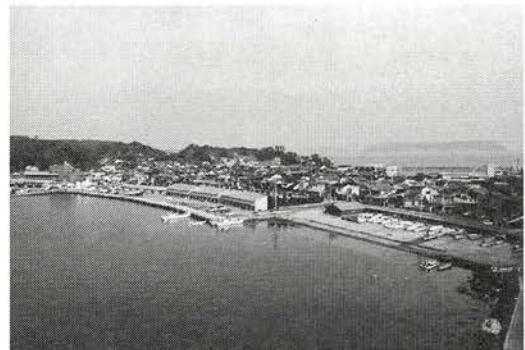
（右側）文化十三子六月八日

（左側）佐渡国宿根木村 石塚彦治郎冥

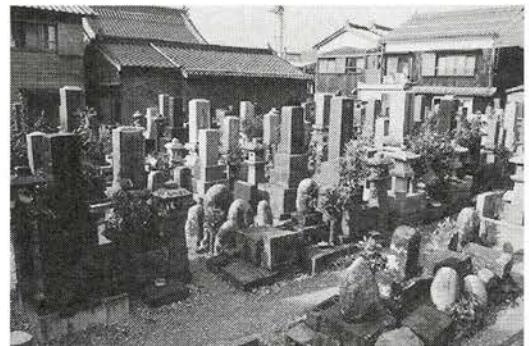
墓2.（正面）靈岳道機信士

（右側）文久元甲酉四月

（左側）佐渡宿根木村 甚太郎冥



越ヶ浜地区（手前夕瀬湾）



中善寺墓地

墓3.（正面）嶺雲道起信士

（右側）慶応四辰八月三日

（左側）越後国荒濱浦住人 榮野金七冥

- 墓4. (正面) 玉山本光信士
 (右側) 文化十年癸酉
 (左側) 七月廿九日
 越後國鬼伏浦 平野由左衛門
- 墓5. (正面) 积越岸秋泊信士
 (右側) 安政二卯七月廿八日
 (左側) 越後国糸魚川 池原三良兵衛貳
- 墓6. (正面) 积元秋山道林信士位
 (右側) 明和元□八月十七日
 (左側) 越中放生浦武左衛門
- 墓7. (正面) 有山自慶信士
 (右側) 文久元辛酉四月廿一日
 (左側) 能登国龍村 高田屋勘五郎貳
- 墓8. (正面) 海屋良安信士
 (右側) 明治八年
 (左側) 亥十月廿九日
 能州赤神村白山丸舸子 箱崎安五郎□
- 墓9. (正面) 善翁粗心信士
 (右側) 寛政三亥六月十八日
 (左側) 加洲安宅 俗名□□屋長兵衛
- 墓10. (正面) 大安船法信士
 (右側) 弘化三丙午五月十五日
 (左側) 加瀬橋立浦西出
- 墓11. (正面) 本□自性信士
 (右側) 安永七□亥八月朔日
 (左側) 丹後由良 新屋兵右衛門
- 墓12. (正面) 但馬□市村 俗名前田辰藏
 (右側) □□吉祥丸舸子
 (左側) 明治十七年申六月十二日死亡
- 墓13. (正面) 一念是空信士
 (右側) 寛政三亥五月□五日
 (左側) 因洲加路浦 中村や宇七郎
- 墓14. (正面) 知水流光信士
 (右側) 明和九年辰年
 雲瀬雲津浦
 (左側) 俗名六三郎
 正月二十六日
- 墓15. (正面) 新歸□山淨□信士
 (右側) 雲瀬□ 万延二酉
 (左側) 俗名固太郎 十二月□□

墓16. (正面) 智岳光恵童子

(右側) 明治□申八月十一日

(左側) 濱田百姓 富三良子

墓17. (正面) 脱山道口信士

(右側) 文政六未十月□

(左側) 讃^ム箱浦 甚兵□

墓18. (正面) 義海道仙信士

(右側) 明治八亥八月廿八日

(左側) 阿^ムぶ櫻^ム信士 佐伯浦

俗名 仙五郎寅

墓19. (正面) 季巖淨秋信士

(左側) ばん洲あ古□□□浦 元九郎

墓20. (正面) 大□了海信士

(右側) 文化十二亥四月初八日

(左側) 摂^ム神戸柴屋船舸子

備中北木嶋大藏

墓21. (正面) 慈海道航信士

(右側) 安永二癸巳六月十三日

(左側) 摂^ム大阪阿わ志や善八



佐渡国出身者の墓



越後国出身者の墓



丹後国出身者の墓

《古墓》

墓22. (正面) 井町船客先祖合葬墓

(右側) 昭和六年一月 井町常一建立



古 墓

墓23. (正面) 機山戒定信士

(右側) 元治二丑九月十六日

(左側) 薩洲市来□濱 與兵衛

墓24. (正面) 釋秋觀禮位

(右側) 播磨奥口崎村

元文元辰年

(左側) 八月廿九日

井村八右衛門

墓25. (正面) 互應了心信士

(右側) 宝曆八戊寅十一月廿日

(左側) 摂磨□濱 増屋□□衛

墓26. (正面) 還本円親信士

(右側) 紀州藤代石高浦 九兵衛

享保六丑年

(左側) 六月十六日

萩市の民俗芸能

— 神楽について、その1 —

*清水満幸

萩市においては、現在、木間、三見床並、三見手水川、三見中山、山田、上野、香川津、越ヶ浜、大井市場の9地区において神楽が伝承されている。この他にも、三見河内や中ノ倉地区でかつて神楽が舞われていたと伝えられている。

いずれの地区的神楽についても、記録は少なく、その沿革については詳らかではない。

以下では、木間、三見床並、三見手水川、山田の4地区の神楽について、調査成果の概略を報告し、今後の神楽調査研究の基礎資料としたい。

《木間地区の神楽》

・名称

カグラマイ（神楽舞）と称す。

・沿革

伝承によると、およそ200年近く前に、西木間集落の原川仁右衛門が上方から神楽舞を習い伝えたとされる。以来、五穀豊饒を祈願するため舞われてきたという。

以前は、西木間、東木間、北木間の3集落においてそれぞれ神楽舞を伝えていたが、北木間集落で神楽舞を舞い始めたのは大正元年（1912）頃のこととされる。西木間集落の杉本千代松を師に伝習したと伝えられる。



若宮神社

・奉納の日時と場所

例年、8月15日の若宮神社風鎮祭において舞を奉納している。昭和53年（1978）までは、春、夏、秋に執り行われる若宮神社祭礼のたび毎に舞を奉納していた。

かつては拝殿の中で舞っていたが、現在は神社境内拝殿の前で舞う。藁筵2枚（畳2畳程度）を敷いて、およそその内で舞う。拝殿内で舞っていた頃は、拝殿の天井、舞の場の上方に「天塚（てんがい）」と呼ばれる2尺四方の木枠に御幣を貼ったものを吊り下げていた。

・伝承者

舞い手をマイコ（舞子）と称す。

神楽舞は、東木間、西木間、北木間の3集落にそれぞれ伝えられていた。昭和53年（1978）までは、春、夏、秋の若宮神社祭礼の折りに、上記3集落が交代で神楽舞を奉納していた。しかし、集落ごとに舞を維持することが困難となってきていたため、翌年からは、青年を構成員とする北斗会を中心に木間地区全体で舞を伝承している。

またかつては、長男のみが神楽舞を舞っていたが、現在はそれを問わず、木間地区居住ないし出身の男性が舞い手となっている。

・鳴り物、調子

鳴り物は太鼓、合わせ鉦、横笛が用いられ、これらの演奏や演奏者をハヤシ（囁）と称す。太鼓の拍子は、タンタカ スッタン ターン トロツクと呼びならわされており、五調子と表現される。

・神楽舞に関する伝承

現在使用している面は、大正初年頃に製作されたと伝えられる。若宮神社において、放浪の彫物師に依頼して製作したとされるが、その彫物師がどこから来たか等詳細については伝えられていない。

「山王り」や「四本幣」などの舞の最中に、周囲で「ヤーレマエッ、ソーラマエッ」と囁したて激しく舞うことを強いると、やがて舞い手が失神したり跳びはね暴れ始めたりする。この状態を「オニガツク（鬼がつく）」と称す。周囲の者たちは、舞い手を抱え上げて舞の場から外へ運び出す。舞い手の長老がシンカン（神官）となり、ゴシンペイ（御神幣、舞始めや舞仕舞に用いる御幣）で鬼がついた舞い手を祓うと鎮静する。鬼がつくと豊作になると伝えられている。

「帶ノ舞」は、安産祈願の舞とされる。安産祈願する者が、妊娠の帯を持参して舞の奉納を依頼する。

・演目、採物、衣装、内容など

かつては24の演目が奉納されていたが、平成10年（1998）は以下の16の演目が奉納された。

1. 座ならし（舞始め）

1人舞

採物：（左）御幣（白大幣）（右）鈴

衣装：鳥帽子、紋付き、袴（白）、白足袋、ユダスキ（縄の襷）、以下注記のない場合この衣装

2. 四本幣（しほんべい）

4人舞（子供による舞）

採物：（左）御幣（右）鈴

3. 宇立（うだち）

2人舞（子供による舞）

採物：（左）扇→刀身→刀（右）鈴

4. 三舞（さんまい）

3人舞

採物：（左）扇（右）鈴

衣装：ショウゾク（装束、他の名称は聞かれず）

内容：初めに唱えごとを唱え三方に盛った洗米を扇で弾くように撒く



三舞

5. 天堀（てんがい）

1人舞（天堀操作）

内容：2尺四方の桟状の木枠に御幣を貼り付けたものを天堀と呼ぶが、これ2個を拝殿天井に渡した竹に綱を取って吊り下げ、綱の端を引いたり緩めたりすることで四方に動かす。

6. 戸子呂奈良志（ところならし）

1人舞

採物：（左）扇（右）鈴

衣装：爺の面、白の装束

内容：神殿より現れ緩やかに舞う。途中、多数の神名を唱える。

7. 岩戸（いわと）

1人舞、他に姫宮の面を持ち、岩戸に模した天塚を押さえる者が1人

採物：（左）杖 （右）扇 途中から両手で天蓋

衣装：鬼の面、鬘、鉢巻き、手甲、脚絆、腹当て、赤い装束、短い袴

内容：舞の途中から採物を置き、天塚に添えた榊を抜き取って舞い、最後には天塚を引き取って激しく舞う。



岩戸

8. 両剣（りょうけん）

1人舞

採物：（左）扇→刀身2本→刀身→刀 （右）鈴→刀身→鈴

衣装：鬘、装束、短い袴、手甲、脚絆

9. 四本幣（しほんべい）

4人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴

10. 矢剣（やつるぎ）

1人舞

採物：（左）弓 （右）鈴→刀身→鈴

衣装：鬘、鉢巻き、装束、短い袴、手甲、脚絆

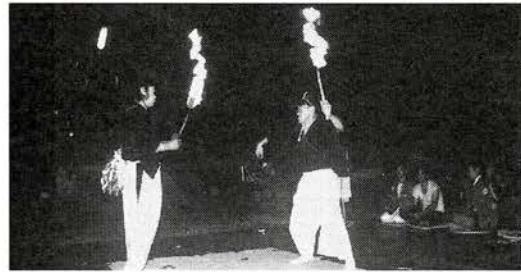


矢剣

11. 火ノ舞

2人舞

採物：（左）松明 （右）鈴



火ノ舞

12. 帯ノ舞

2人舞

採物：（左）帯、途中両手で帯 （右）鈴



帯ノ舞

13. 山王り（やまおうり）

2人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴



山王り

14. 當社（とうしゃ）

2人舞

採物：（左）弓 （右）鈴

15. 四剣（しけん）

4人舞

採物：（左）扇→刀身→鈴→扇→刀身→刀 （右）鈴→刀身→鈴

16. 舞仕舞（まいじまい）

1人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴

これらの他に、「杖の舞（1人舞、着面）」、「戸鉾（とほこ、2人舞、着面）」、「扇の舞違い（2人舞）」、「山荒神（やまこうじん、2人舞）」、「三つ山（2人舞）」、「山三崎（やまみさき、2人舞）」、「戎の舞（3人舞、着面、問答）」、「王子の舞（6人舞い、着面、問答）」の演目があるが、奉納されなかった。

なお、この年の全ての演目については、記録写真を撮影した。

《床並地区の神楽》

・名称

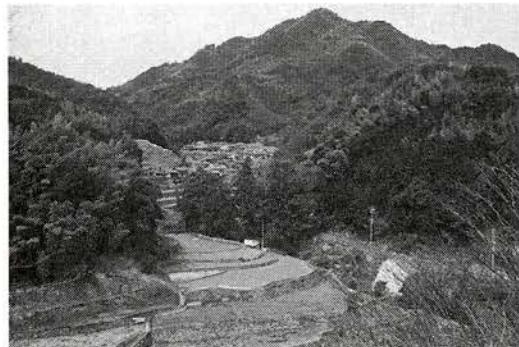
カグラマイ（神楽舞）と称す。

舞の調子が速いため、他の地区からはケンカマイ（喧嘩舞）と呼ばれることがある。

・沿革

いつ頃から舞われているか、またどこから伝わったか等については不明。

他の地区で後継者がいなくなり神楽舞の奉納が困難になった時期にも、中断させることなく継続して奉納を行ってきた。



床並地区遠望

・奉納の日時、場所

12月4日、森神社（通称モリサマ）の祭礼の日に、神社から床並地区公会堂にモリサマを迎えてその神前で舞を奉納していたが、最近は祭礼定日前の土曜日の夜に奉納するようになった。また、三田八幡宮の式年祭などに八幡宮にも奉納することがある。

かつては、森神社の舞殿で舞を奉納していた。舞は夕刻から始まり、明け方に及んでいた。舞の場には藁蓆2枚が敷かれ、おおよそその上で舞が舞われる。舞の場の上方には、天蓋（てんがい）と称する2尺四方の木枠に御幣を貼りつけた物を吊り下げる。

・伝承者

かつてはイエトリ（家の後継者）のみが神楽舞に参加することができた。

奉納は昭和30年代まで若連中により行われていた。現在は、床並地区在住者や出身者で構成された床並青年会を中心に、児童生徒も含めて神楽舞の伝習が行われている。

「三舞米」が舞の基本とされ、これより舞を覚える。続いて「三宝荒神」、「四剣の舞」と伝習し、「違」を舞うことができて一人前とされる。これまで到達した者は、刀を用いる舞であるとか一人舞であるとか、それぞれに練習を重ね舞を習得する。

・鳴り物、調子

太鼓と鉦（合わせ鉦）が用いられる。かつては横笛も用いられていたが、現在は伝えられない。

太鼓を打つ拍子は、タンタカ スッタン ターンコ タラベケと言いならわされる。

・神楽舞に関する伝承

「戸鉾」の舞まで順番を変えるものではないといわれていた。また、この舞で岩戸が開かれると、この舞より前に寄進の舞を行ってはならないとされる。何かを祈願して舞の奉納を依頼することを舞を寄進するといい、「帶」、「三舞米」、「四剣の幣」、「三方荒神」、「弓」、「違」、「火」、「えびす」などが寄進されることが多い。

舞の最中に座り込んでしまうことをオリがつくと呼ぶ。これは神様が舞い手に乗り移られたからと考えられた。舞い手はオリがつくことを嫌い、オリがつかぬよう舞うことを心掛けた。お神酒をいただいて長い舞を舞うとオリがつくことが多かった。刀を用いる舞では、刀を地に付けぬよう交代の舞い手が常に控えることになっている。

安産祈願のために「帯」の舞を奉納する。妊婦の帯を持参し、舞の奉納を舞い手に依頼する。舞を寄進するともいう。

道化た舞を行う六郎は、「チンコ」と呼ばれる男根状の蘿苞を股間に下げる。これに触ると子宝に恵まれるとされ、新しく嫁入りした者は追いかけられる。

祭りの前に餅を搗き、一升餅を三重に重ねてミカガミ（御鏡）とし神前に供える。舞の奉納が終わるまで供えておき、翌日下げて等分に切って全戸に配る。これをいただくと無病息災に過ごすことができるとされる。

注連縄や舞に用いる御幣等の道具を、祭りの前日に調える。舞で用いた道具については、舞の後に下げ渡すが、これをいただくと縁起が良いとされた。

不幸事があった家では、1年間は神事にかかわれないので神楽舞にも参加しない。

・演目、採り物、衣装、特徴など

元来は24の演目が奉納されていたとされるが、平成12年（2000）には以下の21演目が奉納された。

1. 参場（さんば）

1人舞

採物：（左）御幣（大白）（右）鈴

衣装：烏帽子、着物（カスリとも称す）、
白袴、黒足袋、ユダスキ（御幣をつけた紐の襷）以下、特記するもの以外はこの衣装。

内容：舞に先立ち、塩を撒き舞の場を淨める。その後、迎えたモリサマを拝して舞始める。



参 場

2. 天蓋（てんがい）

1人舞

採物：無し

内容：舞の場の上方に渡した竹に綱で吊り下げた2基の天蓋を、その綱の端を持ち引いたり緩めたりすることで四方に動かす。

3. 三舞米（さんまいごめ）

3人舞

採物：（左）扇 （右）鈴

衣装：赤、黄、緑のイショウ（衣装、狩衣状、他の名称は聞かれない）

内容：舞の途中でコウジョウ（口上）を唱え、三方に盛った白米を、扇で撥ねるように東西南北と中央に撒く

4. 四剣の幣（しけんのへい）

4人舞

採物：（左）御幣（小） （右）鈴



四剣の太刀

5. 床ならし

1人舞

採物：（左）御幣（白大）→扇 （右）鈴

衣装：面、白の衣装

内容：途中、御幣を面前に神名を唱え、緩やかに舞う。

6. 四剣の太刀（しけんのたち）

4人舞

採物：（左）扇→鈴→刀身→刀と扇 （右）鈴→刀身→鈴

内容：途中、4人の刀身を中央に置き、その周囲を鈴を打ち鳴らし口上を唱えながら回る。

7. 戸鉾（とほこ）

1人舞、他に岩戸に模した天蓋を持って控える者が1人

採物：（左）杖→御幣（白大）→杖 （右）鈴

衣装：面、白の衣装

内容：岩戸に模した天蓋の前で舞う。

8. 夜中の鬼神（よなかのきじん）

1人舞、他に岩戸に模した天蓋を持って控える者が1人

採物：（左）杖 （右）扇

途中より採り物を置き、天蓋を引き取ってからは天蓋を持って舞う

衣装：面、鬘、鉢巻き、鬼の衣装（赤）、腹当て、脚絆、手甲、

内容：岩戸に模した天蓋の前で舞う。

採り物を置いた後に天蓋の枠を引き抜いて舞い、やがて天蓋を引き取り、それを持つて舞う。

9. 三方荒神（さんぽうこうじん）

3人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴

10. 弓（ゆみ）

2人舞

採物：（左）弓 （右）鈴

11. 違（ちがい）

2人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴

12. 両剣（りょうけん）

1人舞

採物：（左）扇→刀身2本→刀身→刀と扇 （右）鈴→刀身→鈴

衣装：鬘、鉢巻き、鬼の衣装（赤）、腹当て、脚絆、手甲

内容：舞に先立ち舞い手と舞の場を塩で清める。



違

13. 肩着（かたぎ）

2人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴 途中両手で御幣と鈴を握る

14. 帯（おび）

2人舞

採物：（左）帯 （右）鈴 途中両手
で帯を持つ

内容：安産祈願者があった際に舞うが、
舞を始める前に舞手と舞の場とを
塩で清める。



帯（塩による清め）

15. 小太刀（おだち）

2人舞

採物：（左）扇→鈴→刀と扇 （右）鈴→刀身→鈴

16. 矢剣（やつるぎ）

1人舞

採物：（左）弓 （右）鈴→刀身→鈴

衣装：鬘、鉢巻き、鬼の衣装、腹当て、脚絆、手甲

17. 火（ひ）

2人舞

採物：（左）松明 （右）鈴

18. 山（やま）

2人舞、他に舞い手が持つ綱の端を握る
者が1人

採物：（左）御幣（白）→綱→御幣
（右）鈴

内容：御幣を持って舞った後に、綱を持
ち神殿方を向いて舞う。

綱くぐり、綱たぐり、唱えごとあり。



山

19. 夜明（よあけ）

2人舞

採物：鬼（左）杖（右）扇

神明は無し

衣装：神明は面

鬼は面、鬘、鉢巻き、衣装、腹当
て、脚絆、手甲

内容：ゼンノツナと呼ばれる前年の神社



夜明

注連縄を舞の場に張り渡し、それを挟み神明と鬼が問答を交わす。鬼が神明から受けた米を撒きつつ退出した後、神明が刀でゼンノツナを切断する。

20. 神聖（しんせい）

1人舞

採物：（左）刀身→刀と扇（右）鈴

内容：ゼンノツナ切断の後、神明役は面を置き、刀身を持って舞い始める。

21. 舞納

1人舞

採り物：（左）御幣（白大）（右）鈴

この年には、「王子の口」、「所望分（しょもわけ）」、「えびす」の各舞は奉納されなかった。また舞の順番については年により変動があり、寄進の舞が隨時挿入され繰り下がることもある。ただ一方で、上述したように「戸鉾」までの順を変えるものではないとの伝承もある。

なお、この年の全ての演目については、記録写真を撮影した。その他にも、平成7年、同11年に演目全ての写真撮影をおこなっている。

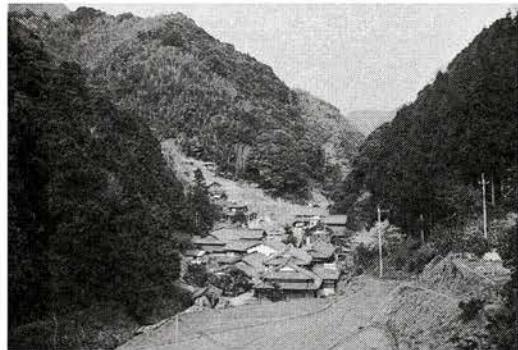
※ 以上、床並地区の神楽について報告するにあたり、床波地区在住の森田一宏氏編『床並の舞』を参考にしました。記して感謝申し上げます。

《手水川地区の神楽》

・名称

カグラマイ（神楽舞）と称す。

舞の調子が早いため、チャンチキマイとも称す。



手水川地区遠望

・沿革

木間地区の神楽舞を習い覚えたとの伝承がある。伝わった時期やかかわった人物等については不詳。

・奉納の日時と場所

権現様（金峰神社）祭礼の折りに、神楽舞を権現様に奉納する。祭礼日は、かつては11月13日、14日であったが、現在は11月の第2土曜日と日曜日で、奉納は土曜日に行われる。日中神社拝殿において舞い初めて、夕刻より手水川公会堂において舞を奉納する。

舞の場には藁筵2枚（畳2畳程度）が敷かれ、おおよそその上で舞う。舞の場の上方には、天蓋と呼ばれる2尺四方の桟状木枠に御幣を貼りつけた物を吊り下げる。

権現様の祭礼以外にも、三見浦地区の大歳神社祭礼や玉江浦地区的弁天社祭礼の折に、招かれて舞を奉納することがある。浦地区に招かれた際には、必ずエビスの舞を舞う。

・伝承者

舞い手をマイコ（舞子）と称す。

かつては、一家の長男のみ舞に参加することができた。

現在は、手水川に住む男性皆が舞に参加することができる。

・鳴り物、調子

太鼓、合わせ鉦、横笛を用いる。

太鼓を打つ拍子は、タンタカ スッターン ターン タラベコと呼びならわされており、これを五調子と呼ぶ。他の地区の神楽舞とは微妙に異なると意識されている。

・神楽舞に関する伝承

舞い初めから7番目の舞まで、つまり「参場（さんば）」、「三舞米（さんまいごめ）」、「天蓋（てんがい）」、「四幣（しへい）」、「四剣（しけん）」、「床ならし」、「岩戸（いわと）」と続く舞の

順番を変えない。理由は伝えられていない。

「四幣」、「帯の舞」などの激しい舞で、舞い手が失神したり突然飛びはね始めたりする。オニガツク（鬼が憑く）とかオリガツクと称す。かつてはオニガツクと豊作になると言われていた。オニガツクと周囲の者が皆で抱きかかえて舞の場から運び出し、舞の衣装を脱がす。カンヌシ（神主）と呼ばれる神官役の者が、用意しておいた御幣（舞始めや舞おさめで用いる）で舞い手の頭を撫ぜると鎮静する。カンヌシは面を着用し、かつてはカミアゲと呼ばれる唱えごとを唱えていたというが、現在は伝えられていない。

「岩戸」の舞の鬼に子供を抱きかかえられると子供は健康に強く育つとされる。

「帯の舞」は安産祈願のために舞われる。妊婦や妊婦の家族が、妊婦の帯を持参して舞の奉納を願う。舞い手は、その帯を手に舞を奉納する。舞の順は定まっておらず、安産祈願者があればそのつど舞を奉納する。

「火の舞」は火難よけの祈願のために舞われる。

・演目、採物、衣装、内容など

元来24の演目が奉納されていたとされるが、平成3年（1991）は以下の17の演目が奉納された。かつては、夕刻より舞始め、「夜明けの鬼」を舞うのは実際に夜が明ける頃になっていたといふ。

1. 参場（さんば）

1人舞

採物：（左）御幣　（右）鈴

衣装：鳥帽子、着物、袴（白）、黒足袋、ユダスキ（紐の襷）、以下特に記さない場合この衣装

2. 三舞米（さんまいごめ）

3人舞

採物：（左）扇　（右）鈴

衣装：赤、黄、青のショウゾク（装束、狩衣状、他の名称は聞かれず）

内容：最初に唱えごとをしつつ三方に盛った米を扇で弾くように撒く。

3. 天蓋（てんがい）

1人舞

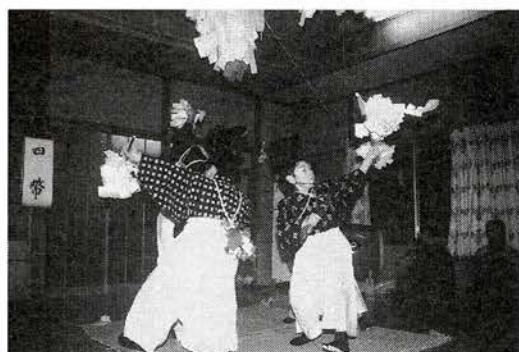
採物：無し

内容：2尺四方の木枠2基にそれぞれ御幣を貼り、その中央に綱をとって舞の場の天井に渡した竹に掛け、その綱の端を引いたり緩めたりすることで、木枠を上下左右に動かす。

4. 四幣（しへい）

4人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴



四幣

5. 四剣（しけん）

4人舞

採物：（左）扇→鈴→刀身→鈴 （右）
鈴→刀→鈴→刀

内容：途中オニがついたため、急遽舞い手が交代。

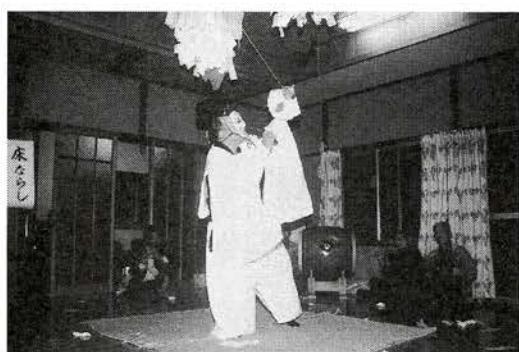
6. 床ならし

1人舞

採物：（左）扇 （右）鈴

衣装：面、白の装束

内容：緩やかに舞い、途中、多数の神名を唱える。



床ならし

7. 岩戸（いわと）

1人舞

他に、天照大神の面を付け柵を挿した、岩戸に模した木枠（天蓋で用いたもの）を押さえる者が1人

採物：無し

衣装：面、鬘、鉢巻き、鬼の装束（赤）、

手甲、脚絆着用

内容：激しく素早く舞いながら、木枠の



岩戸

榊を抜き取り、やがて木枠そのものを引き取る。途中、舞を見る者の中から乳児を抱え上げる。

8. 弓の舞

2人舞

採物：（左）弓 （右）鈴

9. 帯の舞

2人舞

採物：（左）帯、途中から両手 （右）鈴

内容：一人にオニがつき、途中で急遽別の舞い手が加わる。



カンヌシによるカミアゲ

10. 扇子の舞

2人舞

採物：（左）扇 （右）鈴

11. 火の舞

2人舞

採物：（左）松明 （右）鈴

内容：点火した松明を持ち舞う。

12. 矢剣

1人舞

採物：（左）弓→弓と刀 （右）鈴

衣装：鬘、鉢巻き、鬼の装束、手甲、脚絆

13. 四幣（しへい）

4人舞

採物：（左）御幣（白幣） （右）鈴

14. 違いの舞

2人舞

採物：（左）御幣（色幣）（右）鈴

15. 所望分（しょもわけ）

6人（門前博士、太郎、次郎、三郎、四郎、五郎）の問答と舞

採物：（左）弓（右）鈴

衣装：面、装束（白、青、赤、白、黒、黄）

内容：門前博士と東西南北中央を表す5人王子が問答を行い、それぞれ所管の領分が定められる。

16. 夜明け

2人舞

神採物：（左）刀（右）鈴

鬼採物：（右）杖

鬼衣装：面、

内容：祭礼の前に掛け替えた前年の注連

繩を舞の場に張り渡し、それを挟んで鬼と神との問答が行われる。

鬼が神より受けた福の種（米）を撒きながら退いた後に、神が刀で注連縄を切断し舞う。



夜明け

17. 舞じまい

1人舞

採物：（左）御幣（右）鈴

なお、この年の全ての演目については、記録写真を撮影した。また、平成5年、同11年にも全ての演目を写真撮影している。

《山田地区の神楽》

・名称

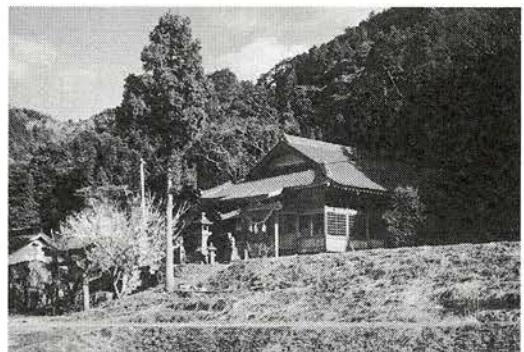
神楽舞（かぐらまい）と称す。

・沿革

一時期休止、昭和52年（1977）に復活、保存会で伝承。

古老より口伝で習得したが、その時点で起源については詳らかではなかったという。

復活時には笛を吹くことができる者が既にいなくなっていたが、山田地区より笛を習い伝えていた人が三見河内地区に居ることが判明、通って習得したという。



山田天神社

・奉納の日時と場所

現在は、11月第3土曜日の山田天神社の祭礼の折りに、神社拝殿において五穀豊饒と家内安全を祈願して奉納されている。かつては、山田地区内九郎坊集落の諏訪社祭礼においても奉納していたと伝えられている。

拝殿には藁筵2枚（畳2畠程度）が敷かれ、おおよそその上で舞われる。また、舞の場の上方には、天蓋（てんがい）と呼ばれる2尺四方の桟状木枠に御幣を貼ったものが吊り下げられる。

・伝承者

かつては長男のみ舞うことができたが、現在は山田神楽舞保存会を結成し、小中学生を含め地区全体で神楽舞を伝承している。

舞い手をマイダユウ（舞大夫）と呼ぶ。

・鳴り物、調子

太鼓、合わせ鉦、横笛が用いられる。

太鼓の拍子は、タンタカ スットン ターンコ タラベコと呼びならわされ、六調子と表現されている。

・神楽舞に関する伝承

舞い初めの「三ば」から「岩戸の鬼」までは、あまり順番を変えるものではないと言われて

いた。現在は子供の舞を早い時間帯に行う関係で、順が変わることがある。「岩戸の鬼」以降の舞の順は、その年により変わる。

面については、現在12枚伝えられているが、製作者や製作年については不詳。元々は山田地区内諏訪社の面で、三見中山地区の盲目の人が彫ったものとも伝えられている。昭和56年（1981）頃、島根県浜田商港近くのイワモトチクザン氏に修繕を依頼し、現在のような色鮮やかに塗られたものとなった。

「帶の舞」は安産祈願の舞で、妊婦やその家族が、妊婦の帯を持参し舞の奉納を以來する。舞い手はその帯を持って舞う。寄進舞とも呼ぶ。

・演目、採物、衣装、内容など

平成9年（1997）は以下の24の演目が奉納された。

1. 三ば（舞始め）

1人舞

採物：（左）御幣（白大）（右）鈴

衣装：鳥帽子、着物（白）、袴（白）、足袋（白）、ユダスキ（紐の襷）、以下注記のない場合はこの衣装

2. 幣の舞

2人舞

採物：（左）御幣（右）鈴

3. 散まい米

3人舞

採物：（左）扇（右）鈴

内容：舞の始めに唱えごとを唱えつつ、三方に盛った洗米を扇で撥ねるように撒く。

4. 床のならし

1人舞

採物：（左）扇（右）鈴

衣装：面、神官のショウゾク（装束、他の名称は聞かれず）

内容：着面、神殿より現れ緩やかに舞い、途中多数の神名を唱える。

5. 幣の四剣

4人舞

採物：（左）御幣（右）鈴

6. 天蓋

1人が天蓋を操作する。



天蓋

7. 三宝荒神

3人舞

採物：（左）御幣（右）鈴

8. 宇立

2人舞

採物：（左）扇→刀身→鈴→刀と扇（右）鈴→鈴→刀身→鈴

9. 太刀の四けん

4人舞

採物：（左）扇→刀身→鈴→刀と扇（右）鈴→鈴→刀身→鈴

内容：途中、井の字形に置いた4人の刀身を中心に、鈴を鳴らし唱えごとを唱えながら周囲を回る。

10. 岩戸の爺

2人舞（爺と神主、神主は道化で舞を真似る程度）

採物（爺）：（左）杖（右）鈴

採物（神主）：（左）御幣（右）鈴

衣装：いずれも着面、白の装束、神主は衣装背中に詰め物をし、男根に模した藁苞を下げる。爺と神主の問答あり。



岩戸の爺

11. 岩戸の鬼

1人舞、他に天照大神の面を持ち、岩戸に模した天蓋を押さえる者が1人

衣装：面、鬘、鬼の装束、手甲、脚絆着用

内容：岩戸を模した天蓋に挿された榊を抜き取って舞い、最後には天蓋を引き取って激しく舞う。途中、見物の子供を抱きかかえ舞う。



12. 弓の舞

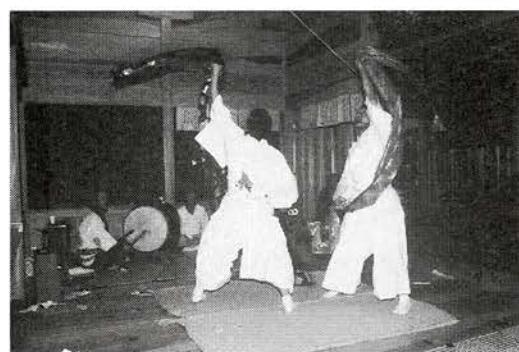
2人舞

採物：（左）弓 （右）鈴

13. 帯の舞

2人舞

採物：（左）帯、途中から両手 （右）鈴



14. 違いの舞

2人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴

15. 帯の舞

2人舞

採物：（左）帯、途中から両手 （右）鈴

16. 違いの舞

2人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴

17. 所望分

6人舞（神主、太郎、次郎、三郎、四郎、六郎による問答）

採物（神主）：（左）御幣 （右）鈴

採物（神主と六郎以外）：（左）御幣→弓 （右）鈴

採物（六郎）：（左）刀 （右）鈴

衣装：いずれも着面、太郎が青、次郎が赤、三郎が黒、四郎が白の装束。

18. 両剣

1人舞

採物：（左）刀2本→刀身→刀2本 （右）鈴→刀身→鈴

衣装：鬘、装束、手甲、脚絆着用

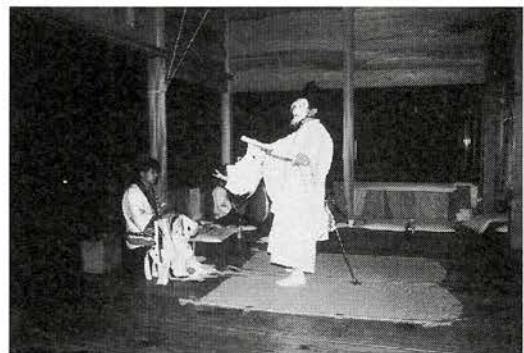
19. 無言の爺

1人舞、他に天照大神の面を付けた天蓋
を押さえる者が1人

採物：（左）杖→御幣→杖 （右）鈴

衣装：面、白い装束

内容：天蓋を前に極めて緩やかに舞う。



無言の爺

20. 矢剣

1人舞

採物：（左）弓 （右）鈴→刀身→鈴

衣装：鬘、鬼の装束、手甲、脚絆

21. にぎりばち

2人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴

22. 夜明けの鬼

2人舞

採物（鬼）：杖

採物（門人）：（左）扇→（綱を切った後は）刀 （右）鈴

衣装（鬼）：面、鬘、鬼の装束、手甲、脚絆

衣装（門人）：面、白装束

内容：前年の注連縄を拝殿に張り渡し、神殿より現れた門人が一舞いした後に鬼が現れ
激しく縄を揺さぶる。縄を挟み鬼と門人の問答があり、杖と福の種（米）が交換
され、鬼が種を撒きながら退いた後に、門人が刀で縄を切断する。

23. 火の舞

2人舞

採物：（左）松明 （右）鈴

24. 舞じまい

1人舞

採物：（左）御幣 （右）鈴

他に、玉江浦の恵比須祭りに招かれて神楽舞を奉納する際には、「恵比須」の舞を必ず舞う。なお、この年の全ての演目については、記録写真を撮影した。また、平成6年、同11年、12年にも全ての演目の写真撮影をおこなっている。

以上、萩市内4地区の神楽について概略を報告した。調査にあたり、口上とか唱えごとと呼ばれる舞の最中に発せられる言葉についても、併せて記録することができた。萩地方のある時期の言葉を大変に良く伝えるそれらについては、稿をあらためて報告したい。また、調査の折りに撮影した写真についても、紙幅の関係で掲載を割愛した。これについても、稿をあらためて報告したい。

長井雅楽旧宅について

*柏 本 秋 生

1. はじめに

萩市内には数多くの史跡がある。これらの中には、指定文化財として文化財保護法の保護下にある。文化財保護の仕事は、放置すれば消滅してしまうものを保存し、後世に継承することを第一とする。評価の定まっているものはもちろんあるが、諸説があるものでも保存することによって、将来、再検討するチャンスを残せるのである。

長井雅楽という人物の評価をいかになすべきかは、人によってそれぞれの意見があると思う。しかし、百年祭が実行されながらも、その旧宅については保存されることなく、取り壊されてしまった。そして現在、道路の拡張によって、かろうじて保存された石碑も一時撤去されている状態である。実はこの石碑も破損した。その経緯も文中に記述する。

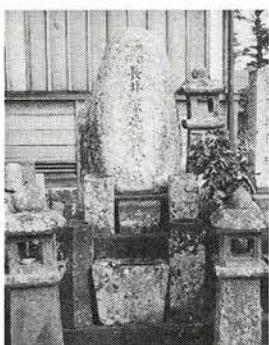
変わりつつあるこの状況を、経緯を含め、現状でできるだけ記録しておくことで、近い将来再建される石碑の位置決定の参考となれば幸いである。

なお、当報告の前号で、道迫真吾学芸員によって、山口県文書館所蔵の「長井雅楽ニ関スル談話」の資料紹介が行われた。この結果、従来ふれられることの少なかった伝記的な部分についても、新たな資料を得ることができた。

2. 長井雅楽略歴

文政2年（1819）、大組士300石長井次郎左衛門泰憲の子として萩松本村中の倉に生まれる。政治家。萩藩士。名は時庸、通称隼人。

天保8年（1837）に藩主毛利敬親の小姓役となり、嘉永3年（1850）には奥番頭格に抜擢され、明倫館の内用掛となった。嘉永4年（1851）世子の元徳の傅役（お守役）を兼任し、次いで安政5年（1858）には直目付に累進し、藩政の枢機に参与した。



文久元年（1861）、積極的な開国論である「航海遠略策」を説いて藩論を代表し、公武間を周旋した。しかし、文久2年（1862）坂下門外の変で公武合体推進派の老中安藤信正が襲撃を受け、負傷して失脚した。この事件を契機に尊王攘夷運動が高揚し、毛利藩中でも、久坂玄瑞を中心とする長井弾劾の運動が激化してきた。同年7月には藩論が尊攘に大転換する。

この動きの中で、翌文久3年（1863）2月6日、長井は萩の自邸で自刃を命ぜられた。享年45歳。墓は曹洞宗海潮寺（萩市北古萩50）にある。



第2図 長井家居住地変遷図

3. 長井雅楽旧宅の変遷

長井家は何度も転居している。

鳥越・小畠（第2図1・2） 雅楽が生まれる以前の長井家が居住していた。時期は不明。夫人の談話によれば、⁽²⁾鳥越の旧宅は其の後方々に転売され、近い頃（談話が採られた明治30年代時点）まで升本という酒屋の所有になっていたという。現在は屋敷跡地のみ残っている。その後、小畠（第2図2）に転居したという。小畠については場所の情報が全くない。

手水川（第2図3） 小畠の次に中の倉手水川に転居した。ここで雅楽が生まれているので、文政2年（1819）以前のことと推定される。なお、場所について、松本二郎氏は、手水川刑場跡よりもさらに福栄村に近いところとしている。⁽³⁾

土原袋町（第2図4） 雅楽が4歳の時に父が亡くなり、母に育てられている。この少年時代に、土原袋町に転居したらしい。この転居時期も不明であるが、天保8年（1837）、雅楽夫人と結婚した時にはこの家に住んでいたというから、⁽⁴⁾時期の一端をおさえることができる。また、1才年下で竹馬の友であった上山清成の談話に「雅楽と云ふものは元来土原で育ったもので（後略）」という文章があるので、比較的幼時に土原へ転居した可能性がある。

土原山中丁（第2図5） 結婚から20日程度経過したところで雅楽の母が死去した。このため留守宅は当時14歳の夫人一人暮らしどなった。そこで夫人の実家、中の倉の吉田家から祖母が出てきていたが、度々出てくるのが大変なことから、実家が土原山中丁に転宅してきた。この実家に夫人は8年同居していたが、その後実家の裏手の家を購入し、転居したという。単純に年数を加えれば、弘化2年（1845）頃のことになる。

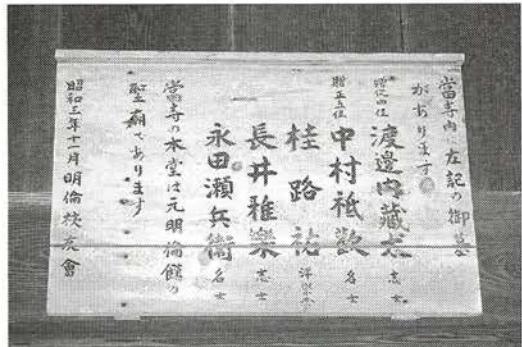
その後雅楽は、文久3年（1863）、45歳の時にここで自刃して生涯を終えた。雅楽の死後、嫡子の与之助は、一旦親類預けの処分を宣告されたが、翌年格別の沙汰により新知150石をもって家名再興されている。夫人の談話などから推定しても、長井家はこの旧宅に居住しつづけたと推定される。

なお、嘉永年間の古図では、同地は桜井平右衛門（大組・64石6斗6升7合）の所有となっている。ただし、この屋敷は、未亡人談話などからも買収したことが明らかである。購入屋敷の場合、必ずしも居住者の名が記されることは、他にも例がある。⁽⁵⁾桜井の名は、これ以前の絵図でも見られるようなので、長井家は、桜井家から住宅を購入したものであろう。ちなみに、背後の屋敷は、雅楽夫人の実家である「吉田猪之助」名義となっている。

以上の変遷の結果、未指定ながら「史跡」として考える際には、「長井雅楽誕生地（手水川）」、「長井雅楽旧宅地（萩市土原袋町・山中丁）」となるだろう。特に山中丁の旧宅は、自刃の地、終焉の地、ということになる。一般に知られていたのもこの旧宅であった。

4. 旧宅・墓の顕彰

大正の末から昭和初期にかけて、萩市内に残る幕末維新の志士の旧宅・墓等について、顕彰が行われた。旧宅を標示する石碑が、萩町によって建立された。高さ約120cmの尖頭石柱形で、台石がつく。形式・規模は統一されている。昭和48年の調査で86基が確認されている。一部のものに年号が刻まれており、それを見ると、



第3図 海潮寺標示版

「大正14年3月」「大正15年5月」「昭和8年3月」がある。土原山中丁の長井雅楽旧宅についても、この時期に門前に石碑が建立されたものと思われる。

一方、明倫小学校の交友会は、昭和3年11月、萩町内の諸寺院にある名士の墓の標示板を作製して、その山門や墓所の入口に掲げた。海潮寺に現存する説明板に、長井雅楽の墓も標示されている。⁽⁶⁾

以上のことから、この時期、長井雅楽関係の史跡も、顯彰の対象になっていたことがわかる。

5. 長井雅楽百年祭と旧宅

昭和37年（1962）は長井雅楽切腹から100年目である。前年の昭和36年に毛利元道氏（旧萩藩主毛利家の当主）が菊屋嘉十郎萩市長を訪れ、ゆかりの萩市で盛大な慰靈祭を執行してはどうかという話をした。これを菊屋市長が萩郷土文化研究会に相談し、同会では、会員河野道、松本二郎、脇英夫、田中助一の4氏を世話人とし、菊屋市長を発起人代表、毛利元道氏を顧問として「長井雅楽顕彰会」を立ち上げたのである。⁽⁷⁾

長井雅楽顕彰会は、昭和37年3月16日に、雅楽の墓がある北古萩の海潮寺において百年祭を実施し、記念小冊子の刊行を行った。

式典には雅楽の曾孫長井弘氏も参加している。居住地は東京であり、この時点では旧宅は長井家の所有から離れている。

この小冊子の口絵に、「長井家旧宅門（萩市土原山中町）」のキャプションがついた写真が掲載されている（第4図）。門前には石碑が建てられているのが確認できる。しかしながら、本文中には旧宅についての記述



第4図 長井家旧宅古写真

がない。わずかに「百年祭記事」の項に再録された「長井雅楽時庸百年祭趣意書」中に「当市はその呱々の声を挙げた生誕の地、又その尊き血を流したる旧宅は、今尚土原山中丁に存し、海潮寺境内にはその英魂静かに眠れるものがある。」と記されるのみである。

結局、誕生地、旧宅、墓所が文化財指定されることはなかった。⁽⁸⁾

6. 旧宅の調査記録

百年祭から14年が経過した昭和51年（1976）8月に、東京都立大学石井研究室によって建物調査が実施された。この調査で文章による記録のほか、3枚の図面が残されている。

門の立面図を見ると、昭和37年の百年祭の写真に写っているものと同一であることがわかる。建物の平面図は第5図3のとおりである。調査報告（未刊）の記述は次のとおり。

玄関 玄関は土間1坪で玄関の間は1畳しかないが、痕跡によれば玄関の間は2畳であった。

座敷 4畳の次の間、8畳の主座敷ともに長押を打たず、柱には面皮材を使用する。主座敷の天井の棹縁は床刺して、南側には濡れ縁のある土庇がつく。

内向き部分 家族の部屋は南側に床の間がついた4畳半、仏壇のついた「せっぷくのま」と呼ばれる4畳半、北側に6畳の3室がある。台所は板の間と土間を合わせて3.5坪ある。

当家は、主座敷をはじめとし、どの部屋にも長押を打ってない点で注目される。なお、主屋は以前の半分の規模しかない。

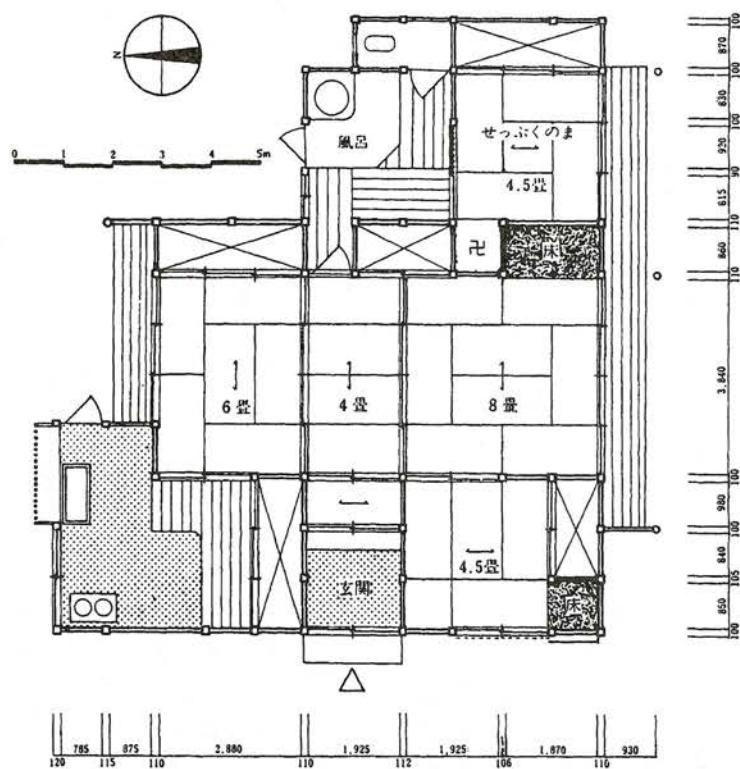
さて、「せっぷくのま」と呼ばれる部屋があることなど、この建物は長井雅楽居住時の面影を残しているように思われる。しかし、実際はどうであろうか。幸い、雅楽の切腹については、臨席者の位置関係を記した書類が残っている。次にそれを紹介し、この旧宅調査の結果と比較してみよう。



1. 長井雅楽旧宅門 立面図（採図 昭51.8）

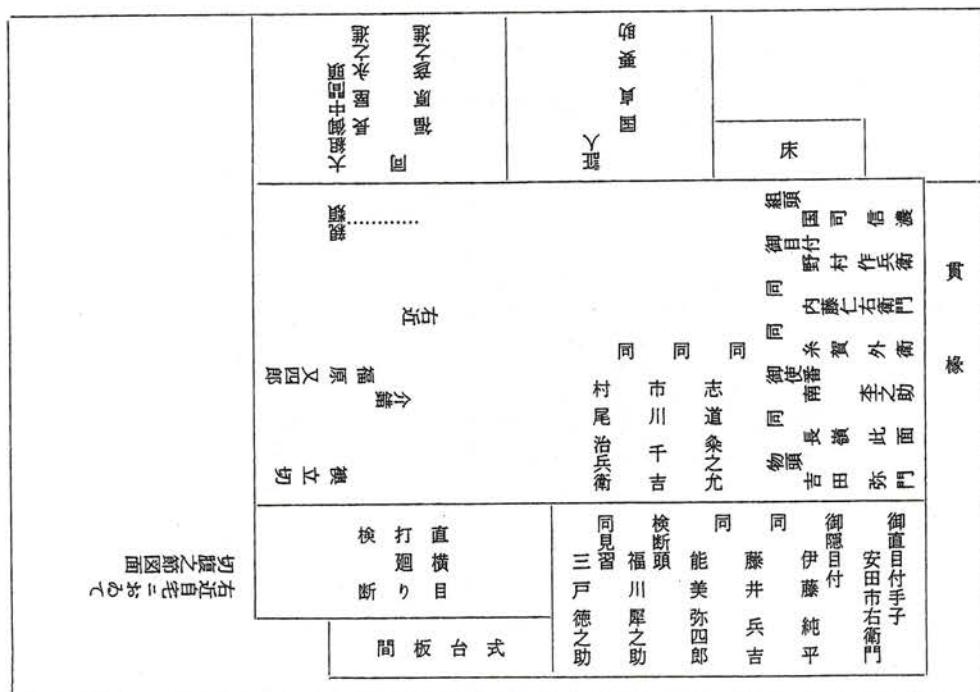
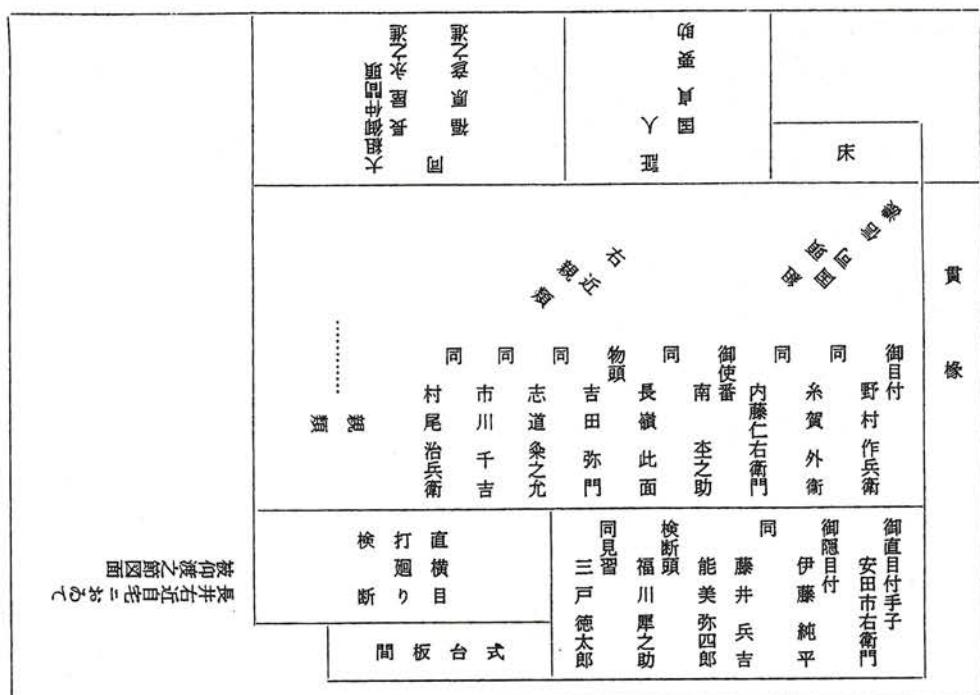


2. 長井雅楽旧宅門 断面図（採図 昭51.8）



3. 長井雅楽旧宅門 平面図（採図 昭51.8）

第5図 長井雅楽旧宅実測図（東京都立大学調査）



第6図 長井雅楽切腹時状況図

7. 長井雅楽の切腹状況

長井雅楽は、文久3年（1863）2月6日に、土原山中丁の自宅において切腹した。この時の様子を記した報告書があり、これに2枚の図が添付されている。「長井右近自宅ニおみて被仰渡之節図面（以下「仰渡図」という）」と「右近自宅ニおみて切腹之節図面（以下「切腹図」という）」である。⁽⁹⁾ 2枚の図面の間取りはほぼ同一である。

雅楽夫人の談話と合わせながらこの図を検討してみる。

「上の間が八畳、次が六畳、此方が玄関、その六畳の二ノ間で割腹でござります。上の間にハ役人方、親類などハ其の六畳の次に居りませう、それから次に三畳がござります、其の辺に居りましたらう。（未亡人談話）⁽¹⁰⁾」

座敷は8畳で、隣に6畳の次の間がついていたという。仰渡図・切腹図ともに中央に長方形の部屋が書かれ、右端に貫椽（濡れ縁か）、右上に床がある。おそらく、8畳間と6畳間の間の建具をはずし、一体としてこの切腹の場に用いたことを示しているのであろう。組頭国司信濃の着座位置、床の存在から、右側が8畳の上の間であることは明確である。

申し渡しの際には、床前の上座には組頭国司信濃一人が座り、その前に8畳間から6畳間にかけて御目付け役以下が並んでいる。長井雅楽は2つの間の境当たりに座って、申し渡しを聞いたものと思われる。

その後、切腹の際には、場は8畳間と6畳間ではっきりと別れ、6畳間での切腹を、上の間である8畳からの確認する形となっている。仰渡図では6畳間にいたと思われる役人衆は、全員8畳間に移動している。6畳間には長井雅楽と介錯の福原又四郎、そして親類が並んでいる。この状況は、夫人の語る切腹の場面と一致している。

また、2図には、これ以外にも部屋が書かれている。図の上方に証人国貞要助の座る部屋、大組中間頭長屋永之進、同福原彦之進の座る部屋、図の下方に御直目付手子安田市右衛門等6名が座る部屋、そして直横目打廻り検断の座る部屋である。最後の直横目打ち廻り検断の座る部屋の下に「式台板間」と書かれているので、ここが玄関の間であることもわかる。6畳間の横に玄関があることは、やはり夫人の談話に出てくる話と一致する。

ただし、この図は、申し渡し及び切腹に關係する部分だけが描かれたものである。これは武家屋敷に共通する、「表向き」の部分と言える。例えば、夫人の談話に出てくる、「次の三畳」は描かれていない。これは「内向き」であったと考えられる。夫人は「表向き」で切腹に立ち会うことはできず、隣接する「内向き」部分に控えていたものであろう。

次にこの状況を、東京都立大による調査結果と比較する。

まず、主座敷は8畳で、共通している。床の間、縁側の位置関係も同じである。切腹をした次の間は、未亡人の談話では6畳であるが、調査結果は4畳であり食い違う。しかし、次の間に玄関が隣接する間取りはよく似ている。

また、未亡人談話で次の間に続いて3畳間があったとされているが、調査結果では6畳である。玄関が改造されていることも合わせて考えると、次の間は縮小され、逆に3畳間は拡張されている可能性がある。

玄関の横の4.5畳間は、切腹をした際に御直目付手子安田市右衛門以下が居並んだ部屋に一致する。当時押し入れはなかったであろうから、6畳間であったのだろう。逆に、主座敷・次の間の奥にあった証人国貞要助の座る部屋、大組中間頭長屋永之進、同福原彦之進の座る部屋が存在しない。仏壇や押入れ、風呂の前の板の間などに改造されているのかもしれない。

一方「せっぷくのま」と呼ばれている部屋は、実際の切腹の場面とは合致しない。

以上の検討によると、主座敷、次の間、玄関、縁側などの位置関係は、切腹時の記録と、調査結果でかなり共通している。しかしながら、もしもこれが長井雅楽切腹の旧宅であるとすれば、その後改造を受けている可能性が高い。それは、調査記録に「主屋は以前の半分の規模しかない」と述べられていることからも推定される。

この改造はいつ行われたのであろうか。未亡人の談話には改造の話は出てこない。おそらく談話の時点、すなわち明治30年代には、旧宅は当時のまま保存されていたのであろう。

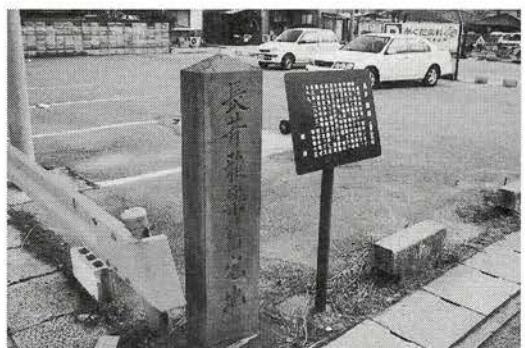
その後、実際に切腹した次の間を改造して縮小し、「せっぷくのま」の名称も奥の仏間に移したものであろうか。長井家の手を離れてからの改造であれば、第2次世界大戦以後の新しい改造である。昭和37年の百年祭の時に文化財指定されなかったのも、こうした改造を受けていたためかもしれない。

また、記録と現地の照合がなされていないことから、都立大学の調査時には、仰渡図・切腹図、及び夫人談話の存在を知らなかつた可能性がある。

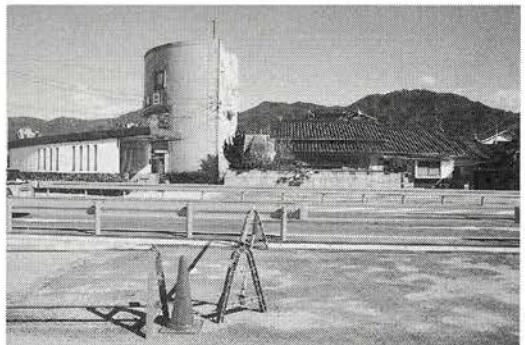
旧宅そのものが残っていれば、さらなる検討を加えられるのであるが、現状では推定にとどまらざるを得ない。しかしながら結論的には、改造されながらも長井雅楽切腹当時の旧宅が、取り壊される時点まで遺存していたと考えられるだろう。

8. 街路改修と石碑の再建計画

旧宅が撤去されたのち、同地は駐車場となり、石碑のみがガードレールの間に建てられていた。この風景は昭和50年から平成11年までの約



第7図 旧宅解体後の状況



第8図 旧宅付近現状

25年間継続していた。私を含めて、この風景しか見たことがない人も多いであろう。しかし、前面道路の拡幅工事が始まり、この石碑も再度の移転を余儀なくされることになった。工事主体である萩土木建築事務所と萩市教育委員会との協議により、道路拡幅後、出来るだけ旧位置に近い場所に移転する計画を立てていた。ところが、平成11年8月に、この石碑が転倒し、中央部から二つに折損してしまった。

転倒の原因は不明である。石碑は破片も含めて、現在萩市教育委員会で保管している。平成14年度で修理を実施する予定である。

再建の位置であるが、現在地の地番を確認すると、長井雅楽旧宅である173番地の北隣の地番は171番地である。この地番は完全に道路に含まれている。173番地もいくつかの地番に分割され、東半分、すなわち旧宅の表の部分は、道路敷となってしまうのである。

したがって、道路完成後、少しでも旧位置に近いところに建てるすれば、第11図の白抜き範囲内が適当であろう。

9.まとめ

長井雅楽（1819～1863）は松本中の倉で生まれ、2度転居を行い、最後は土原山中丁の自宅で自刃した。この終焉の旧宅地には門と主屋が昭和50年代まで残っていた。ただし、主屋は途中で改造を受けていた可能性が高い。建物解体後、旧宅地は駐車場として遺存していたが、今回の道路改修によって、表部分半分は道路敷となる。現状での史跡指定等は困難であるが、石碑のみは道路完成後、旧宅地の一部に再建立される予定である。

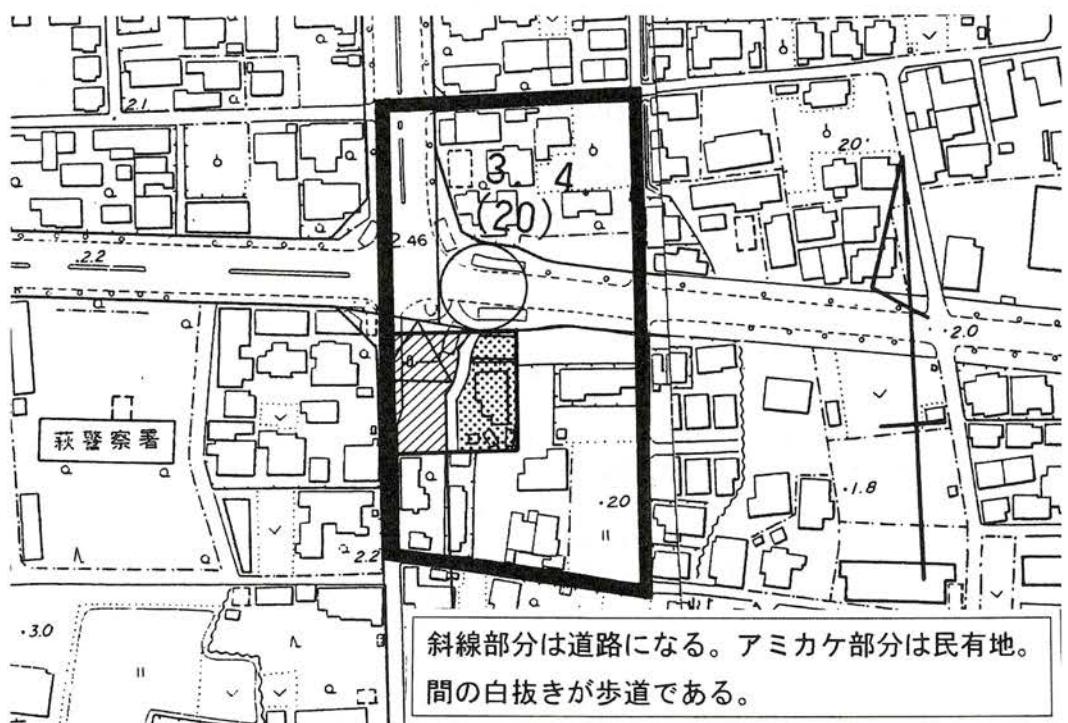
- 註 (1) この略伝は、『萩市史』第1巻の記述を参考にした。
(2) 道迫真吾「資料紹介 長井雅楽ニ関スル談話」『萩市郷土博物館研究報告』第11集、2001 P8。
(3) 松本二郎「長井雅楽の出生地とその親族」『史都萩』第38号、1979。
(4) 註2文献 P8上。
(5) 村田清風別宅等。
(6) 「先賢の墓の標示」『萩市史』第2巻、1989 P363
(7) 長井雅楽顕彰会『長井雅楽』、1962
(8) 萩市においては、昭和35年に萩市文化財保護条例が制定され、昭和37年から萩市指定文化財の指定が始まっている。ただ、開始当初であり、指定予定案件が多数あったことも事実であろう。
(9) 中原邦平『長井雅楽詳伝』マツノ書店復刻版、1979
(10) 註2文献 P9上。



第9図 折損した石碑



第10図 萩城下町絵図（嘉永年間）



第11図 長井雅楽旧宅周辺位置図（1：2,500）

萩における磁器生産について

—小畠焼 その1—

*柏 本 朝 子

1. はじめに

萩焼の歴史は、慶長9年(1604)に毛利輝元が萩へ入府した事から始まる。萩焼は、江戸時代には萩藩の御用窯として操業し、藩の手を離れた明治以降も各窯元のたゆまぬ努力により焼き続けられていった。萩焼の伝統的技術や技法は、新しい要素も取り入れつつ現代にも受け継がれ、平成14年(2002)には経済産業省から伝統的工芸品にも指定されている。

このように萩焼は、茶陶としてのみでなく、山口県の伝統産業としても全国的にも知られている。それに対し、同じ萩の地で江戸後期に創業され、明治期には朝鮮半島にまで輸出された小畠焼の存在については、意外に知られていない。

現在、萩市内では、萩城跡（外堀地区）や大野毛利家上屋敷遺跡など近世の遺跡が発掘調査されている。調査がすすむにつれ、出土する大量の陶磁器の中に小畠焼も含まれていることが明らかとなってきた。

本稿では、現在では滅んでしまった小畠焼に注目し、その研究史を紹介するとともに、文献資料を用い、江戸時代における小畠焼の実態について考えてみたい。

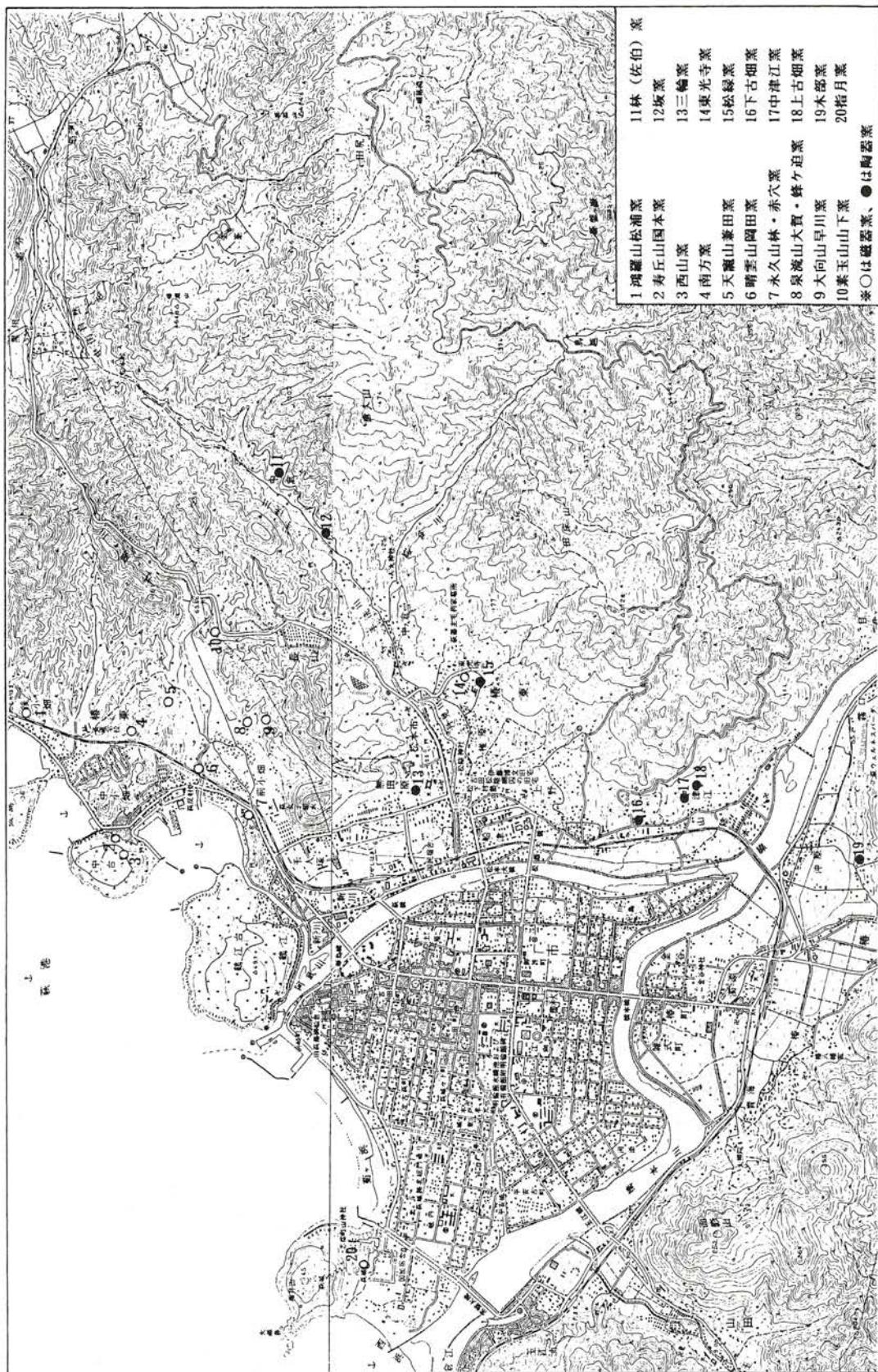
2. 研究史

山口県における近世陶磁器についての研究は、明治期の近藤清石氏⁽¹⁾に始まる。近藤氏は、『萩焼解説書外工芸品事』⁽²⁾の中で、萩焼を中心に各窯について概説している。近藤氏自身焼物には造詣が深かったとみえ、明治23年(1890)には山口市の万代窯の開窯を指導している。開窯の際は、萩から東光寺窯の職長大和作太郎（松緑）を招いており、萩の陶磁器生産の実情についても詳しく述べられる。

近藤氏が活躍した時代には、小畠焼は、まだ現役の焼物であった。小畠焼に限らず、当時山口県内には、多数の窯が操業していたが、鉄道の開通により他地域から大量生産された安価な製品が流入したことなどが契機となり、昭和初期には多くの窯が過去のものとなっていました。

小川五郎氏は、昭和11年(1936)「防長陶磁沿革史」⁽³⁾を著し、総論的に山口県の陶磁器の発達・系統について概説し、萩焼とその系統をひく諸窯について解説した。また、昭和29年(1954)の「山口県の陶磁器」⁽⁴⁾では、小畠焼についてもふれている。

一方、地元萩でも操業を停止した窯跡は、開発に伴い次第に消滅していく運命にあった。また、実際に陶磁器生産に従事した関係者も年老いて世を去っていく。このような状況のもと、



第1図 耕市域の黒跡分布図 (2万5千分の1を60%縮小)

活躍したのが、萩市在住の医師であり郷土史家の山本勉弥氏であった。山本氏は、昭和10年代から20年代にかけて、萩市内及び近隣の窯跡の踏査を行った。萩焼に加え、小畠焼窯跡からの表探や関係者からの聞き取り調査を地道に行い、大きな業績を残している。その中には、現在完全に消滅してしまった窯跡も多い。また、これらの聞き書きは、現在では全く不可能なものだけに貴重なものである。これらの成果は、昭和25年(1950)出版の『萩の陶磁器』⁽⁵⁾にまとめられている。なお、山本氏が収集した表探資料や伝世品は、山本氏の没後、「山本勉弥コレクション」として萩市郷土博物館に一括寄贈された。

昭和30年代の研究者としては、吉田祥朔（樟堂）氏があげられる。吉田氏は『近世防長人名辞典』の著書で知られている。この書の編集のために、多数の古文書・伝記等を収集しており、その蔵書は「吉田樟堂文庫」として山口県文書館に寄贈されている。その中に萩藩の古記録を写した「浦小畠陶器窯御取建之事」という写本が含まれている。

河野良輔氏は、各窯元に関する文献資料を丹念に調査したうえで、歴史的考察をし、萩焼の体系化を行った。⁽⁶⁾その中で、小畠焼についても言及している。河野氏は、近藤氏の筆写した「浦小畠陶器窯御取建之事」のもつ重要性に気付き、この資料の一部を引用し、考察を加えている。

民俗学者の宮本常一氏に師事した神崎宣武氏は、民俗学の手法を取り入れ、山口県内にある窯跡及び製品について実際に現場に足を運び、調査を行っている。昭和51年(1976)に『やきもの風土記』⁽⁷⁾としてまとめられ、萩焼や小畠焼についても述べている。生活必需品としての側面から焼物をとらえ、生産者・販売者・購入者にも注目した興味深い内容である。

実際に小畠焼に関わった関係者からの報告としては、次のようなものがある。

兼田重徳氏は、天寵山兼田窯の関係者である。昭和53年(1978)にかかれた「小畠焼について」⁽⁸⁾の中で、大正時代頃の小畠焼の製法について詳しく述べている。原料や絵付け、窯積み、窯焚きの様子等を詳しく説明した資料である。具体的な記述が多く貴重であるが、製品自体の記録がないのが残念である。

平成11年(1999)に報告された斎藤定氏の「萩市前小畠岡田窯第六代岡田翁聞書」⁽⁹⁾は、昭和47年(1972)に小畠焼について岡田公亮氏より聞き取り調査した内容をまとめたものである。小畠焼の生産に実際に携わっていた方の話であり、小畠焼が衰退していった状況や原料、絵付け、販路など大正時代の窯元の様子がよくわかる資料である。

陶磁器についての考古学的な調査事例としては、昭和40年代の須佐唐津窯の発掘調査が最初である。昭和51～55年、同58～63年には、山口県教育委員会によって萩焼（松本・深川）古窯の発掘調査が実施されている。窯跡や失敗品を捨てた物原が検出され、製品についても明らか

になってきた。昭和49・57年には、深川（東ノ新窯・西ノ窯）の測量調査が行われた。

昭和57年（1982）には、生産遺跡分布調査^[12]（窯業）が行われ、山口県内の窯の分布や各窯の概略が紹介された。その結果、開発等が行われる場合、近世の陶磁器窯は「周知の遺跡」として認知される事となり、実際に事前に発掘調査が行われるようになってきた。

平成4年（1992）には、豊北町教育委員会が明治時代の磁器窯である大山田窯の発掘調査を実施している。磁器窯としては県内ではじめての調査である。また平成10年（1998）には、萩市教育委員会が同じく明治時代の小畠焼の窯である南方窯の発掘調査を行っている。^[13]

以上のようにこれまでの山口県における陶磁器についての調査・研究は萩焼を中心で、小畠焼は、その補足程度に扱われてきた。図録等に収録される場合も「染付八稜鉢」や「吉田道亭」の色絵磁器など特殊な製品が紹介されているのみである。小畠焼の研究としては、大正時代の生産の様子については、ある程度報告されている。しかし江戸時代後期の小畠焼開窯当初の状況については、不明な点が多い。また考古学の基本である発掘調査はもちろん、伝世品や表採資料の実測・写真撮影等もほとんど行われていない。そのため小畠焼の生産地であった萩においても窯跡や製品などその実態については、不明瞭なままで、「小畠焼とは何か」という基本的な定義についてもあいまいな状態である。

3. 小畠焼の定義

先行研究における定義を以下に引用する。

明治24年（1891）近藤清石氏^[14]「一萩 小畠窯 三ヶ所 一小畠焼 文政三年三月創業。旧藩产物方ニ於テ肥前ノ陶師喜十ヲシテ磁器ノ製造之口事セシム。當時日取山下権七ナルモノアリ。磁器ノ業ヲ產物方製造所ニ学ヒ同所ニ後故アリ產物方ノ製造所廢セラル、ヲ以権七之ヲ買受ケ營業セリ。之レ小畠焼ノ嚆矢ナリ。其他岡田明治七年創業、兼田等ハ皆輓近ノ開始ナリ。」

大正5年（1916）時山彌八氏^[15]「小畠焼 寛文年間大和三輪人源太左衛門休雪 長門国阿武郡萩小畠沿革不明」

昭和7年（1932）小野賢一郎氏^[16]「長門国阿武郡小畠村の產。文政元年毛利家の物産方によって創始せらる。皿、茶碗、酒瓶等を製す。酒瓶は灘行にして日本酒用。」

昭和12年（1937）鹽田力藏氏^[17]「萩市大字小畠にあり。文政三年、萩藩物産方により、肥前の陶工喜十を招き、磁器を開窯させたものである。」

昭和25年（1950）山本勉弥氏^[18]「広義には、小畠の諸窯で焼いたもの。狭義には、山下窯、泉流山大賀窯、兼田窯などで作った白磁器、特に大坂方面の注文に応じて送り出した酒瓶などを言う。」

昭和56年（1981）河野良輔氏^[19]「小畠焼の呼称は現代において定着したもので、現在の萩市小畠地区で江戸後期から明治中期にかけて焼かれた陶器や染付磁器、色絵磁器など茶陶以外のやきものの意味するものである。」

以上、小畠焼の定義について年代順に書き連ねてみた。細かな部分で違いはあるが、これらの定義を総合してみると、「小畠焼は、文政年間に萩市椿東の小畠地区に開窯され、萩藩の産物方が経営にかかわり、主として磁器を焼いた。」という事になる。また「肥前」「茶陶以外のやきもの」という言葉も鍵となりそうである。

4. 江戸時代の小畠焼—文献資料にみる小畠焼—

萩藩は、藩の金銀が他国へ流失するのを防ぐため、様々な物品について統制を加えていた。
陶磁器もその一つで、藩の出した法令の中に陶磁器に関する藩の方針が伺える。⁽²⁰⁾

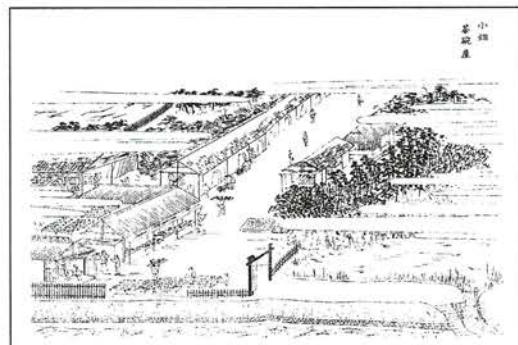
寛永19年(1642)「一 唐津焼物、國中へ入候儀一切停止の事」

明和4年(1767)「一 烧物類、御国焼并唐津焼清水焼等の下直の皿茶碗等売來り候、此分ハ
常々入用の品ニ付、売買被差免候、近來物数奇の焼物類、種々の無用
の品売買仕と相見候、此類売買被差留候事」

17世紀半ば、他国の焼物である唐津焼については藩内には一切入れない方針であった。この頃、唐津焼はすでに全国各地に流通している。萩でも、萩城跡（外堀地区）や現在発掘中の大野毛利家上屋敷遺跡から唐津焼が出土している。おそらくこの時期には、藩内にもかなりの量の唐津焼が流入していたと思われる。唐津焼は、萩藩の御国焼きである萩焼と競合することとなり、移入が禁止されたのであろう。

しかし18世紀後半になると藩内での需要拡大に伴い、御国焼（萩焼）、唐津焼、清水焼等値段の安い日常雑器については、売買が許可されるようになる。

それでは、小畠の地に新しく窯が築かれる事となった19世紀前半は、どのような状況だったのであろう。小畠焼が成立した経緯については、次の資料に詳しく記されている。



第2図 小畠茶碗屋（『八江萩名所図画』より）

資料1 「浦小畠陶器竈御取建之事」（『汲古雑抄一』吉田樟堂文庫 山口県文書館蔵）

この資料は、文政7年(1824)山城屋文藏、孫四郎親子が萩藩の役人に対して提出したとみられる文書で、10年前の文化11年(1814)に創業した浦小畠の陶器窯についての中間報告である。おそらくこの時期、この窯は何らかの画期を迎えていたと考えられる。商売好調であるならば、事業の拡大、不調ならば廃絶、縮小などが予想される。

この文書は、一種の企画書であり、山城屋文藏という商人が小畠焼の成立に深く関わっていることがわかる。資料2にも「京都町人山城や文藏」と書かれている。山城屋という屋号から萩

と上方をつなぐ商人であったと思われる。従って、藩外の事情に詳しく、知人も多い。また、自分も出資する一方、藩や土地の有力者に出資させて開窯を勧めるなど、プロデューサー的な役割をも果たしている。なお、焼物だけでなく、養蚕などの産業にも関わっている。

以下、主な内容を要約する。

事業の契機

小畑に窯を築くことになった契機は、そもそも山城屋文蔵が萩焼の御細工人たちと関わりを持っていたことに始まる。「萩焼は、伝統を守り他地域との交流もなく、古来連綿と御用物を焼いてきた。そのため流行に乗り遅れ、進物としてつかわれるのみとなり、御館入りの町人が挙領してもあまり喜ばれないという噂を聞き、文蔵も残念に思っていた。そこで、20年前、よい手本なども運び御細工人とも相談しながら努力したところ、次第に面白い器が焼ける様になった」という。

萩焼古窯調査との整合性

上記は、従来引用される際には省略されていた部分である。山口県教育委員会による萩焼古窯の発掘調査⁽²²⁾では、松本窯の変遷を6期に分けている。この文書が、該当する時期は、やや古い時期も含まれるが、第VI期(坂4号窯物原下層期)と第IV期(坂4号窯物原上層期)に相当する。上層・下層の間には、黄色粘土の整地層を挟む。下層の開始は、延享2年(1745)頃からで、上層は文政10年代(1827)から幕末までの、坂8代斎の時代にあたるという。

萩焼古窯の出土遺物を検討してみると、まずV期に日常雑器が多くなる事に気がつく。碗、皿をはじめ、急須や土瓶、灯火具など多種にわたっている。萩焼古窯の報告書では、「製品の日常化」と表現している。これに先行するIV期でも、それ以前とは大きな差異が認められる。すなわち、前半代に主体をなしていた李朝風の碗・皿から新機種の碗・皿類や型物に転換している。先述の明和4年(1767)の萩藩の法令からも萩焼の値段の安い日常雑器が、藩内である程度生産され、流通しつつあったことがわかる。

また、窯道具については、IV期とV期の間に大きな画期がみられる。天秤ではいわゆるプロペラ天秤が出現し、トチンはそれまでの不整形のものから整形のものに変化し、ハマは足付きのものが出現している。つまり新しい窯詰技術が導入されたといえる。同時期の深川ではこれらのうち、プロペラ天秤と整形のトチンはみられない事から、一律に導入されたのではなく、各陶工による取入れや、山城屋文蔵のような人物の働きかけ、あるいは肥前からの新技術の導入などが考えられる。

19世紀前半の状況

「当時、萩には御細工人の家が三軒あり、藩の御用物を焼いていた。また、御茶具類には大道士を使用し、花器、置物、丁字窯等通例の器については、小畑海手岡山の土を使用していた。このようなよい土がありながら、土瓶、土鍋、茶碗類は御国用に乏しく、京焼や信楽焼を移入

している。これは、大変不経済である。運送中の破損もあるし、京焼の場合、土取り場は遠く、窯場は、地代や家賃が高く、薪も高い。荷造り用の藁、^{わら}菰に至るまで、萩より安いものはない。さらに高瀬伏見までの人力、淀川、海の運賃まですべて陶器の値段に上乗せされているのである。」

浦小畠開窯計画

「そこで、土のとれる浦小畠の地に窯を築けば、陶土や薪、製品の積み出しにも便利である。人夫を使う上でも都合がよく、雑費が抑えられるので、十分採算が取れる見込みがある。萩城下をはじめ近郷の人々からも重宝がられるであろう。」

場所の選定

「文蔵は、内々に御細工人で、当時すでに隠居していた林半六(泥平)に声をかけ、浦小畠の土地を調査に行った。四畳半二間の建物が建っている場所一反ニ畝二十歩を銀約一貫五百目で、購入した。この地は土もとれ、後には山手を少々買い足した。」

茶碗屋天満屋弥右衛門の提案

「新しい窯は、林半六を頭取とし、一応御国流つまり萩焼の窯の形態で築かれた。当時は、大坂から必要な焼物を買い入れており、年に二度、天満屋弥右衛門という茶碗屋が萩を訪れていた。天満屋は、文蔵とは顔なじみなので、小畠に連れて行ったところ、土や場所もよいので、いずれは京焼や信楽焼に勝るものができるだろうと言う。ただし、土瓶、行平鍋その他何でも〈諸国通用の形容〉があるので、上方から細工人を呼び寄せる必要があるという。その理由は、京都は手轍轆なのに対し、萩は唐流で足轍轆を使うこと。また、萩から上方に修行に行かせるのは、時間がかかりすぎるということからである。」

そこで上方の事情に詳しい天満屋に頼み、細工人と荷造り職人を連れ帰ってもらうこととなつた。その見返りとして荷物引受の問屋になれるように口添えすることを約束した。」

技術者の招聘

「程無く天満屋は、上方から5人の職人を連れてきた。文政10年当時、小畠に居住しているのは、次のとおりであった。

嘉吉 (京三條の細工人で、開窯当初より居住。)

次兵衛 (京五條の細工人で、7年前に来萩。當時御山細工頭取。)

喜助 (元来天満屋の手代で、荷造りを担当し、諸国の焼物にも詳しい。開窯当初より居住。)
この3人のほかに地元の職人として、

吉之助 (蛭子町藤村の息子。最初は茶碗に絵付けをしていたが、現在は細工に従事。)

岩次郎 (小畠出身。雑用をしていたが、細工人になる。) この吉之助と岩次郎は次兵衛と嘉吉の指導を受け、一人前の細工人となった。このほか上方から利助という夫婦も来て

いた。」

藩の介入

「窯が開かれて1年半後の文化13年(1816)になると、上方などからきた下働きの者たちが言語同断の振舞をし、窯の継続が困難になったため、御手惱（藩営）となった。御手惱になってからは、管理を厳しくし、宿番を置くなどしたが、なかなか経営が難しく、操業停止も考えた。しかし産物として取り立てられたばかりで、そのうえ藩のお膝元でもあるのに、停止させるのは、外聞もわるい。孫四郎へ任せてみれば何とか続けられる可能性もある。」

西山窯の開窯

「萩に来る他国船は、小畑焼を購入する際、深川風の焼物を好むので、文蔵は深川風の焼物も小畑で作りたいと考えた。ちょうど浦小畑窯の近くに窯跡があった。これは九年前、熊谷五郎四郎等が中心となって始めたが、2年足らずで失敗したものである。熊谷から後始末を頼まれていたので、深川を出たがっていた職人2人を採用しここで焼物を焼くことにした。この窯を西山と呼んでいる。本来の窯は、京焼の窯であった。京焼と深川焼では、窯の構造が異なるので、京焼の窯の後ろへ深川流の窯を2口増築した。」

磁器生産の開始

次に本題の石焼（磁器）生産の話となる。「南京窯、俗に唐津焼、今利焼と呼ばれる磁器は、肥前でたくさん生産されている。また、筑前でも下手の製品が焼かれている。近年、尾張でも生産され、これらの磁器は、萩にたくさん移入されている。実は以前から、高杉様より、「⁽²⁴⁾萩城下辺で磁器が作れないか。」という相談を受けていた。孫四郎が原料などを吟味し、準備はしていたが、当面は京焼の生産を第一に考えていました。」

滝部での磁器生産

そうこうしているうちに、磁器の生産について、文蔵は滝部に先を越されてしまった。

「文蔵は、現在の豊北町滝部で、磁器生産が開始されたという情報を得た。高杉様の命を受けた孫四郎らは、滝部に偵察に行き、製造された磁器を萩に持ち帰った。最初にしては並の物ができていた。滝部の細工人は、肥前から来ていた。これらの細工人は、追々萩にも来ており、萩藩の野村伊之助様が自分の知行地に連れ帰り、木部野で磁器用の石を見つけ、磁器窯を築かせている。」結局、この滝部で磁器を焼いていた肥前の細工人は、文蔵らに引き抜かれたらしく、「小畑で昨秋から（文政6年）磁器の生産が開始され、現在頭取をしている喜十郎は、初めは肥前から滝部へ来ていた者である。」と書かれている。

磁器生産の勧め

最後に肥前を例にあげ、「肥前焼は、陶石を40里も離れた肥後の天草から船で取り寄せ、船着場からさらに馬で5里もある窯場へ運び、薪も萩より高値であること」とマイナス面を強調している。それに対し、「小畑の場合、磁器用の土や釉薬用の石もあり、水の便や製品の積み出しに大変都合がよいこと」をアピールしている。また、「地元の者を採用し、技術を習得させていけ

ば、繁盛するだろう。」とも述べている。そして「よい世話人や頭取がいれば、藩内に他国の製品が入るのを防げる上、余分な製品は四国や山陽方面の国との交易にも使える。」と付け加え、「世話ををする人がいないので、藩の力添え無しには操業できず、残念である。」と締めくくっているのである。

以上の内容から読み取れることは、①浦小畑窯は、京焼の細工人を呼び寄せ、京焼や信楽焼風の製品をめざし、文化11年(1814)に開窯した。②文政6年(1823)からは、肥前の細工人をつかい、磁器の生産も並行して開始した。③京焼系の古窯場を再利用した西山窯では、深川の細工人を呼び、深川系の窯を増築して、深川風の焼物も焼かせた。④陶器生産は、現在不振で、今後は、磁器の生産を主力としたいと考えていたことなどである。何よりも小畑焼の最大の特徴は、商人の強い働きかけと時代の流行にのった経済性の高い製品を目指したという2点にあるといえるだろう。なお、浦小畑窯は、後の壽久山窯をさすと思われる。

この文書が提出された文政7年(1824)以降も陶器と磁器とが並行して生産されていたのかどうかは、不明である。けれども、文書の流れから推察すると、今後新たに窯を作るとすれば、磁器窯であろう。現在、各窯跡から採取された遺物を整理・分類する作業をおこなっているところである。この作業により、ある程度製品の分析が可能になると思われる。

一方こうした新興の産業に対しては、必ずしも賛同者ばかりではなかった。これを批判的にとらえる人々も存在したのである。

資料2 「御内密申上之覚」(益田家文書 東京大学史料編纂所蔵)

この資料は、安政4年(1854)頃、萩藩永代家老益田家の家臣が、当主に提出したとみられる意見書である。益田家としてというより、当主が家老として藩の運営に関わる際の注意と思われる。以下、意訳する。

産物に対する注意

この家臣の意見では、「産物というものは、多くは当初の趣旨通りにはいかず、途中で御仕法が変わったり、全く中止されたりして長続きせず、損失も少なくない。藩の財政が苦しいため、十分な支出ができないので、思うように運ばない。」というものらしい。また「産物の開発に関しては、山師や商人を相手にしなくてはならない。彼らは、裏表があって、人を欺くことだけを考えており、口では御国益のためなどと言って、しきりに開発を勧めるが、内実は好き勝手にしてやろうという気持ちしかない。後の公損などにはお構い無しである。」という。その実例として「生蠅、藍座、藏目喜や長登等の銅白目鉛」と続き「いずれもかつては繁盛していたが、現在は損失を出している。」と述べている。

山城屋文蔵による養蚕の導入

次に以前、京都町人山城屋文蔵の世話を養蚕絹織物を行った経緯がとりあげられている。「文蔵は、江州から養蚕に心得のある女性を多数萩に呼び寄せ、諸士妻女等にやり方を教え、桑の木を屋敷などに植えさせた。そして加比丹という絹紬をたくさん織らせ、長崎での交易でいくらでも高く売れると言つておきながら、いざ現物が出来上がると、色々難癖をつけて買い叩き、これまた損失になった。さらに役人についても追々異動があり、世話をしてくれる人もいなかつたためか、自然と止んでしまった。おまけに桑の木も絶え絶えになつたので、以前のとおり畠にしたが、土地が荒れてしまい当分は作物もできなかつた。これも損失といふべきではないか。」と記している。

小畠皿山の盛衰

続いて小畠皿山の話となる。「小畠皿山も20年程前後に御仕法がかわったため、他国の焼物の移入を一切禁止し、御国焼きで済ませる様にということになった。そのため一時は繁盛しているようにみえたが、他国焼が全く入ってこないため、小畠焼は自然と高値の傾向になり、皆が迷惑しているという時に、御国産方役所も廃止され、同時に藩の管轄を離れたため、今では民間で焼いているらしい。小倉機、種油、扇子その他も御国産方が引き受けて売りさばいていたが、元になる役所が無くなってしまったので、方針が崩れてしまった。皿山については、職人に前賃銀を渡すので、追々焼き出しのたびにお下げ銀で払い、近年の内には皆済する勘定であったけれども、この様にやり方がかわった上では、どのように片付けて行けばよいのかわからない。」と言っている。

以上のように、資料2は、資料1と表裏一体ともいえるものである。山城屋が養蚕に関わっていたことは、資料1の末尾でも簡単に触れられている。その中には、「養蚕については、高杉様よりも特に仰せ付けられて一生懸命取り組んだが、頭になる人物に根気がなく、欲ばかり深い。山へ桑を植えるというので、赤土だから無理だと意見したが聞き入れなかった。もし桑が育たなければ山を貰うと最初からたくらみ、蚕は飼わずに丹後の残綿織を集め、大騒ぎしたけれど二年も続かず損失を出した。しかし今年からようやく軌道に乗り、初めて繭を出して納得した。」と書かれている。

資料2に見える養蚕の失敗は、この後のことであろうか。悪意の有無は別として、新しい産業をはじめる際、その道に詳しい職人を呼び寄せ、地元の者に習い覚えさせていくという方法は、小畠焼の場合と非常に似ている。

資料1の「浦小畠御取建之事」は、企画書としてよくできており、経済性を重視した見通しや各地の窯のリサーチ等も豊富で、説得力がある。しかし小畠焼が磁器を生産し始めた後も、順調であったとするなら、資料2の「御内密申上之覚」の中でもきっと賞賛されていたはずである。すなわち、安政4年(1854)の段階では、すでに小畠焼の経営状態は、周囲から見ても決して

良好ではなかったと考えられる。この2つの資料の間に位置するのが、『防長風土注進案』の記述である。

資料3 『防長風土注進案 第20巻 當島宰判』

弘化2年(1845)に報告されたこの資料によると、阿武郡當島宰判椿東分には当時、操業中の陶器窯が五ヶ所、操業を停止した窯跡が四ヶ所あった。陶器窯と表現されているが実際には磁器窯も含まれている。

操業中の窯と廃業した窯

操業中の五ヶ所のうち二ヶ所は、萩焼の御細工人の窯である。一ヶ所は、坂家でもう一ヶ所は三輪家である。御細工人の家は、一時は3軒あったが、林半六が出奔したため文化14年(1817)^[25]に林家が断絶となり、その後は2軒のみになる。残り三ヶ所は、今浦壽久山・同西山・前小畠天龍山で、いずれも小畠焼の窯である。また、廃業した前小畠素玉山・同所泉流山・同所大向山・同所永久山の四ヶ所も同じく小畠焼の窯である。その開窯年代をみると文化11年・13年(1814・1816)に創業した窯は存続しているのに対し、新しく文政7年から13年(1824~1829)にかけて創業された窯のうち、一番新しい文政13年創業の前小畠天龍山窯を除いた四ヶ所が、廃業している。

窯の廃業理由

前述の資料1・2を参考にして考えると、文政7年から13年に相次いで創業された窯は、「浦小畠窯御取建之事」つまり山城屋文蔵、孫四郎親子の企画に基づき、開かれた可能性が高い。おそらく磁器中心の窯であろう。一方その新しい窯が、かえって先に廃業してしまったのは、「御内密申上之覚」にみえるように、他国焼移入禁止⇒小畠焼高騰⇒御国産方役所廃止という一連の流れの中で、廃業に追い込まれたと見るべきであろう。しかし弘化2年(1845)後も、全ての窯が一方的に衰退していったわけではないことにも注意する必要があるだろう。

素玉山窯については、次稿の「各窯の遺物」の項で詳しく紹介する予定であるが、安政2年(1855)の銘を持つ製品が存在する。素玉山窯は、弘化2年(1845)の時点では、廃業しているものの、その後復興したことが予想できる。

資料4 『阿武郡當島郡中大略』(山口県立大学蔵)

この資料は、村々の現況を藩に報告した帳簿で、安政2年(1855)^[26]頃書かれたとみられる。この中に、「皿山三ヶ所 天龍山 前小畠赤坂・素玉山 同中山・壽岳山 同浦」とあり、素玉山窯は安政2年の時点では、操業を再開していたことが裏付けられる。なお、記述がみられない事から西山窯が新たに廃業となり、泉流山・大向山・永久山については、弘化2年に引き続き廃業中であったと考えられる。

5. 山城屋文蔵、孫四郎について

資料5 「御在國控」(毛利家文庫 4 忠正公68)

この資料によると山城屋文蔵は、京都町人で、萩町人小橋吉郎左衛門の家に寄食していたという。養蚕と製陶に精通しており、御用達を務めている。その息子孫四郎も父同様小橋吉郎左衛門方に滞留し、養蚕や産物皿山御取建その他産物方の御用達を務めた。その後萩に住居を構えたが「去秋御詮議之筋有之、御国産方役所御引せ被成、彼もの御用達をも被差除候」とあり、何らかの理由で、国産方役所も手を引き、御用達の任も解かれている。

しかし藩の利益に貢献したという事から、他の出身ではあるが、父同様に天保15年(1844)12月28日に年始御目見の榮誉を与えられている。

なおこの資料により、小畑焼から国産方役所が手を引いたのは、天保15年の秋という事がわかる。

6. 小畑焼と萩藩の関係

小畑焼は、創業当初の文化11年（1814）には民間経営の形態をとっていたが、1年半後には藩の「御手惱」となっている。この「御手惱」とは、「御産物方」(資料2では、「御国産方役所」)⁽²⁷⁾の支配を意味している。

小畑焼については、「御産物方」の中の下部組織である「皿山方」⁽²⁸⁾が直接管理していたとみられる。「皿山方」は製品の販売も統制している。弘化2年の『防長風土注進案』の「職人商人札之事」という項に「茶碗屋三軒 右皿山方より提札御下渡相成居候事」という記述があり、陶磁器の販売については、皿山方から提札を与えられた茶碗屋のみ許可されていることが推定できる。

また、陶磁器を管理する「皿山会所」⁽²⁹⁾という役所が、弘化2年当時操業を停止していた永久山に置かれている。この永久山窯は、林半六（泥平）が、御産物方御用の窯として与えられた窯に相当すると思われる。

資料6 「雜事控」(毛利家文庫 9 諸省45 30の13)

この資料は、天保8年(1837)に、坂新兵衛が提出した林半六（泥平、文中では佐平）の名跡の取立てに関する嘆願書である。藩から与えられた窯の破損状況についても書かれており、この窯については廃絶の理由として、窯の老朽化で使用不能となったためとも考えられる。なお、永久山については、磁器ではなく萩焼を中心に製造していたと考えてよいだろう。

安政4年(1854)頃かかれた資料2によると、これより二十年程前、すなわち天保年間には「御国産方役所」は小畑焼の経営から手を引いており、小畑焼は再び民営化しているようである。資料4の中に焼物竈屋として御細工人の坂家と三輪家の二軒がみえる。これらは「兩人所惱」

と書かれており、萩焼の御細工人は、安政年間には、両人所の支配下にあったことがわかる。それに対し「皿山三ヶ所 天寵山 前小畠赤坂・素玉山 同中山・壽岳山 同浦」は、「客屋捌」とかかれており、おそらく民営化されたため、町奉行の管轄になったことを示している。従って、民営化⇒藩営化⇒民営化という経過をたどった事になる。これらの他に小畠焼と藩との関係を示す資料として次のものがある。

資料7 『座右雑記』(萩市郷土博物館叢書 第1集)

この資料は、当時都濃宰判の代官であった伊藤弥一右衛門信成の覚書で、彼の藩役務所勤の記録である。文政10年(1827)の項に「一七月七日浦小畠茶碗竈龍巻二て崩ル。近辺少し損ス。怪我人無之」という記述がみられ、浦小畠窯の被害を気にかけている様子が伺える。

資料8 「谷村家文書」(萩市郷土博物館蔵)

この資料は、萩市土原に所在する谷村家から当博物館が譲り受けた襖の下張りとして使用されていたものである。物品目録の断片とみられる。その中に「一小畠焼茶碗百ヶ 但御舟倉ト名有之分」の一文があり、浜崎宰判の勘場(代官役所)が置かれていた御船倉から特注された小畠焼であったと考えられる。これらの茶碗は「御舟倉」の文字を染付した磁器だったのであろうか。

7. 小畠焼と村田清風

山本勉弥氏は、小畠に窯が開かれた理由を村田清風による藩の殖産興業政策に求めている。清風は、江戸後期借財八万貫といわれた萩藩の財政を立て直した人物である。山本氏は「文化11年・文化13年に開設された浦小畠国本窯(壽久山窯)及び西山窯は、当時尚些が微力ではあるが、清風が苦心した財政策の反影であると思う」としている。さらに「文政7年清風が42歳の時、当職手元役となり、自己の抱く堅固な意見を直に実行し得るようになったのであるから文政7年より文政13年に至る7年間に前小畠に起こった素玉山、泉流山、大向山、永久山、天寵山の5つの皿山は全く清風の誘導に因るものとみて間違いない」とした。そしてこれらの新興の窯が中止になったのは、清風が一時失脚した天保15年(1844)とし、清風が復帰した嘉永元年(1848)以後に永久山を除く窯が漸次復活再興したと推定した。

現時点では、小畠焼に関する文献資料に乏しく、村田清風が小畠焼の創業に直接関わったという確証は見出せない。しかし今後萩藩の公的な記録等の中に清風が小畠焼に関係したという記録がみつかる可能性も否定できない。

資料1から判断する限りでは、小畠焼、特に磁器生産に関しては高杉春明(小左衛門)が、直接的に関わっていたとみるのが妥当であろう。

清風が産物方の事業についてどのように考えていたかをわずかに伺わせるものとして、天保12年(1841)頃に書かれたとみられる「荒目安」という資料がある。非常に断片的で、メモ書きともいえるものであるが、その中に

「一 瓦や皿山板場九州廣しま石州の放蕩者より集酒と博奕を樂しみ仕候而世話人少も油断有之時ハ忽ち損取候事

一 産物方ニよき算勘之役人計り被差出候而も無覚束候事」とある。想像たくましくして読むなら、清風も産物の取り扱いには、頭を悩ませていたようにも思える。一方、

「一呉服 一他國酒 一畠物 一木具 一磁器 右他國仕正金銀で候物々」という一文もあり、藩外に金銀が流出する原因となる磁器等については、藩内で作りたいと考えていたとも解釈できる。

8. 小畠焼と萩焼の関係

萩焼は、これまで藩の御用窯として茶陶を中心に製造してきたと考えられてきた。しかし、発掘調査によって、茶陶以外の日常雑器も製造していたことが明らかとなってきた。

小畠焼は、創業当初から日常雑器である施釉陶器と磁器の生産を目的とした。従って小畠焼の製造が開始された19世紀前半以降からは、萩焼の日常雑器と競合することとなる。

資料9 「坂新兵衛願書」(坂家文書)は、萩焼の御細工人である坂新兵衛から御両人所宛てに提出された文書である。⁽³¹⁾皿山方が直接支配する小畠焼に圧迫される萩焼の苦勞が伺える資料である。

9. 磁器製法の伝播

萩には、江戸初期に始まる萩焼の伝統がある。登窯や蹴轆轤等の技術もあり、磁器生産を開始する上で、ある程度の条件は整っていたといえる。磁器生産が遅れた理由は、原料である陶石と萩焼にはほとんどみられない絵付けの問題であろうか。

有田では、陶石は藩により厳しく管理されていた。また磁器の製造に関しても秘密厳守で、磁器職人の流出を防ぐため、逃亡した職人はもとより、窯元までも厳罰に処せられた。各藩では、この製作技術を手に入れるため、磁器職人を優遇して迎えた。そのため特に19世紀初めになると、各地に磁器職人が移り住み、磁器が製造されるようになった。

資料1によると、小畠焼の焼成技術は、有田の職人が伝えたと記されている。その御当地である有田にも、萩へ職人が出て行ったという記録が残っている。

資料10 『皿山代官旧記覚書』(池田史郎編 皿山代官旧記覚書刊行会)

この資料は、有田の皿山代官が記した公的な記録である。その「文政四巳達帳」の中に萩に関連する記述がみえる。これによると文政4年(1821)に長州萩へ有田の絵付師や細工人が入っていることがわかる。萩が実際に磁器製造に成功するのは、この2年後の文政6年(1823のことである。

これ以前の職人の流入としては、有田に次のような伝承が残っている。⁽³²⁾「天明年間(1781～1788)に有田の名工副島勇七という者が諸国の製陶地をまわり、技術を伝えたといわれる。佐賀藩は、有田代官所の下目付け小林伝七に探索を命じ、連れ戻して処刑した。砥部あるいは、尾張瀬戸で捕らえられたというが、一説によると長門国萩で捕らえたともいわれている。」

これが事実と仮定するなら、すでに18世紀末には肥前の技術が萩に伝えられていることになる。現時点では、これを裏付ける資料はなく、「浦小畠陶器窯御取建之事」等の文献等からみても、やはり磁器生産は文政年間に肥前の技術を取り入れ開始されたと考えるべきであろう。

10. まとめにかえて

以上、小畠焼の研究史及び江戸時代の小畠焼の様子について文献資料を用い考察してみた。文献資料については、多かれ少なかれ作者の思惑や当時の社会情勢等が反映されており、誇張や事実とは異なる事柄も含まれている可能性がある。従ってこれらを差し引いて考える必要がある。

次稿では、窯跡の状況及び各窯跡から採取された遺物について紹介していくとともに文献資料とつき合わせながら検討していく予定である。現在、小畠焼の系譜をひく各窯元の方々にご協力をいただき、資料収集を行っているところである。

なお、小畠焼についての情報（特に吉田道亭や大賀大眉、春山等）や伝世品等をお持ちの方は、ぜひ御一報いただけすると幸いです。

(註)

- 1 旧萩藩士であった近藤氏は、藩政時代には右筆役、事跡編輯掛を務めた。明治以後は、地誌・旧記編纂掛となり山口県地方史の研究に尽力した。文献について博学多識で知られる一方、大内塗を復興させた事からもわかるように伝統工芸の保存にも力を入れていた。また明治30年及び41年に発掘された山口市の赤妻古墳に関しては、実測図の付属した発掘調査報告書を作成するなど、考古学的研究の先駆者でもあった。
- 2 『萩焼解説書外工芸品事』(近藤清石文庫・山口県文書館蔵) 1891頃
- 3 「防長陶磁沿革史」(一) (二)『陶器講座』第8・12巻1936
- 4 「山口県の陶磁器」『山口県の陶磁器展 郷土陶磁器展の手引き』清交会1954
- 5 『萩の陶磁器』萩文化協会1950
- 6 「萩焼—萩藩窯の成立と発展」「古萩—その源流と周辺」山口県立美術館1981
「長門のやきもの」「日本やきものの集成」8山陰 平凡社1981
「萩焼四百年の歴史」「萩焼四百年展—伝統と革新」朝日新聞社文化企画局西部企画部2001
- 7 『やきもの風土記』マツノ書店1976

- 8 「小畑焼について」『史都萩』第36号 史都萩を愛する会1978
- 9 「萩市前小畑岡田窯第六代岡田翁聞書」『山口県地方史研究』第81号 山口県地方史学会1999
- 10 須佐唐津窯編集委員会『須佐唐津窯』須佐町教育委員会1971
- 11 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化センター「萩焼古窯」『山口県埋蔵文化財調査報告』131集 山口県教育委員会1990
- 12 山口県教育委員会文化課・埋蔵文化財センター「生産遺跡分布調査報告書 窯業」『山口県埋蔵文化財調査報告書』第74集 山口県教育委員会1983
- 13 豊北町教育委員会「大山田窯」『豊北町埋蔵文化財調査報告書』第10集1994
- 14 註2に同じ
- 15 『もりのしげり』1916
- 16 『やきもの読本』寶雲舎1932
- 17 「日本陶工傳」「陶器講座」第21巻 雄山閣1937
- 18 註5に同じ なお山本氏は小畑焼という不明確な名称をさけて、小畑焼何々窯とよぶことを提案している。
- 19 「長門のやきもの」『日本やきもの集成』8山陰 平凡社1981
- 20 山口県文書館『山口県史料』1976
- 21 萩市史編纂委員会『萩市史』第3巻 萩市1987によると「萩呉服町一丁目大通り」に店を開いていたという。また、田中助一『萩先賢忌辰録』萩仏教教団1970によると山城屋文藏は文政8年（1825）9月8日萩で没している。墓は、北古萩一区明円寺にあるという。
- 22 註11に同じ
- 23 坂・林・三輪家の三軒。文化4年(1807)から8年(1811)の『無給帳』に、焼物師として坂助八・林弥十郎（半六）・三輪勘七、文化8年（1811）から12年(1815)の『無給帳』には坂助八・林半六・三輪勘七(両蔵)の名がみえる。
- 24 高杉春明(小左衛門)萩藩大組。所帶方より用所役となり、当職手元役藏之兩人役等を勤める。また、郡奉行も勤めた。文政7年（1842）没。
- 25 文化12年(1815)から文政2年(1819)の『無給帳』に「半六令出奔候付丑六月十八日御恩御扶持不残差上候事」とある。
- 26 資料中に铸物師の郡司右平次、焼物師の坂新兵衛、同じく三輪両蔵の名がみえる。この三人の名が同時に記載されているのは、安政2年から6年の『無給帳』である。『無給帳』によると、郡司右平次が、安政3年の3月に伴の彦次郎に株を譲渡していることから、資料4は、安政3年3月以前に書かれたものと推定される。
- 27 資料7『座右雑記』の文化12年(1815)の項に「当春より御国産方出来ル。当人岩政六郎右衛門様」とある。
- 28 「皿山方」に関連した人物としては、天保元年(1830)には、皿山方頭人の河上久衛門繁昭、天保5年(1834)には皿山方役人の草刈庄左衛門らがいた。
- 29 資料11『防長新聞』に「小畑の雅楽殿川の辺にあった產物方の役所」とある。雅楽殿川近辺には、永久山窯があり、ここに置かれていた皿山会所を意味するものと思われる。また文中の「宮川孫四郎」は、山城屋孫四郎と同一人物であろう。
- 30 「御歎申上候事」（註5『萩の陶磁器』）に「…御慈悲を以帰嶋被差免於前小畑に松本焼窯等被仰付、御產物方より月別米御建被遣難有仕合二奉存上候…」とある。
- 31 この皿山方については、小畑焼以外の陶磁器をも管理していた可能性も否定できない。
- 32 有田町史編纂委員会『有田町史』陶芸編 有田町1985

（謝辞）

本稿を終えるにあたり、2年間ご指導下さった山口大学考古学研究室の近藤喬一先生、中村友博先生に心から感謝申し上げます。文献につきましては、山口大学国史研究室の田中誠二先生、当博物館の樋口尚樹館長にご教示いただきました。泉流山吉賀窯の吉賀晶司氏、天龍山兼田窯の兼田三左衛門氏・兼田昌尚氏、晴雲山岡田窯の岡田仙舟氏・岡田裕氏並びに山口大学教育学部の吉賀将夫氏の皆様方には、陶土の採取や窯跡の確認、遺物の採取等をご快諾いただいた上、貴重な助言を賜りました。また、田村秀祐氏並びに須子英二氏にもご協力をいただきました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

資料1 「浦小畠陶器竈御取建之事」(『汲古雜抄一』吉田樟堂文庫 山口県文書館蔵)

文化拾壹戌三月

浦小畠陶器竈御取建之事

文政七申霜月 山城屋文藏

同 孫四郎 報告

一高杉様江氣附申上候者、松本ニ陶工御細工人三軒被建置、御用物焼調之儀、古来より連綿之由承り申候、且御茶具類ハ小郡臺道土を以造り〈上田正藏後山御留場と承り候〉華器置物丁字釜等通例之器者小畠海手岡山〈爰も唐人山と申、高麗左工門見立之土地と聞傳候〉之内ニ有之ヲ見立作り申候、然處右御細工人之儀者、他國他所へ交り候事も無之、古来より造り來候細工物ニ泥ミ形チ之大小其姿時之流行ニ後れ、乍憚他國御進物被下等名而已ニ成、御館入之町人共頂戴仕候而も重宝薄様子兼々噂御座候而残念ニ存、廿ヶ年斗已前松本稽古焼之節者、よき手本物杯運ひ色々申談、何卒諸國ニ而稱美仕候様ニと三軒之衆中も被骨折、次第二面白キ器も出来立候、御國ニ而者松本深川須佐と各一風相立候得共、他國ニ出候而ハ皆一樣之萩焼と唱候、ケ程御名產之土有ながら土瓶土鍋茶碗之るひ者御國用ニ乏ク、惣而京三條五条之焼物、江州信樂之茶碗取寄候事不経済、且道中之破損無益ニ費申候、依之浦小畠ニ竈築候而、三軒之弟子追々取建出職為致候ハゝ、土之運ひ船出し之都合可宜、凡之算當仕見候所、現場ニハ不手馴候得共、往々者他國積も引合可申歟、京焼之土場ハ多分官家御領寺社領ニ而、遠方より壱荷いか程之值ヲ定、竈場ハ地料家賃之高直、又薪ニおゐてハ松かさニ而茶ヲ煮と申譬之通り、荷造り之わらこも迄何一つ御國より安事無之、其上高瀬伏見迄之人力、淀川、海、船之運賃悉陶器ニ掛り申候、小畠ニ取建候ハゝ、窯場より土出薪尤下直、海邊之津出しハ便利能、人夫遣も是ニつれ而悉皆上エ下タ之違ひ、茲を以申時ハ眼前雜費少キ故ニ算當ニ合可申哉、其上御城下ヲはじめ近郷迄諸人之重宝不大形と利害得失申上候處、空論とハ申ながら聊尤ニも被思召候哉、先内々文藏取斗ひ、手段致見候様被仰付、右御細工人之内林半六隠居ハ〈泥平と申仁細工功者ニ而手達者ニ相見候ニ付、隠居之身柄幸と存候而私〉自己之目論と申、同人引つけ小畠土地見合ニ罷越候〈只今之御場所是ナリ〉在来建物一ヶ所〈四畳半二タ間〉建有之〈都合壱反式畝廿歩、其後山手少々御買足〉土地と承り申候、其節ハ佐世某様御抱ニ而御座候〈往古高麗左衛門土取場之統と申事ニ而、此地床ニも細工土有之由泥平見積り候處、如案見當テ、于今此御場所より細工土取得遣ひ申候〉其節此屋舗少し高直ニ御座候得共、右細工土有之譯ニ而、無拋銀壱貫五百目斗ニ而買得被仰付候〈拾壱ヶ年已前より初り、此御場所内之土を以細工仕候、代銀凡百貫目斗も可有之、猶此末いか程〉、左候而林頭取ニ入込、一應御國流之竈築調相成申候、其頃迄ハ大坂より余分之焼物買下し候ニ付、年々天満屋弥右衛門と申茶碗屋、年ニ両度ツ、罷越候、此者兼而〈文藏〉存候ものニ御座候間、〈孫四郎〉申談手段も可有之哉と此御場所為一見つれ越候處、土之模様所柄甚稱美仕候而、行末者京信

樂ニ勝候通之品々無疑出来可仕、尤土瓶行平鍋其外何ニ而も諸國通用之形容有之ニ付、上方より細工人御呼寄無之而ハ調申間敷〈京ものハ手轆轤、御國ハ唐流ニ而足轆轤、此違ひニ而如此申候〉、右ニ付孫四郎天満屋色々談見候得共、御國より稽古ニ登し候而者手延ニ而却而失墜多、〈私共ハ〉素人之儀、何卒弥右衛門自力を以、細工人四五人連下り呉候ハ、往々荷物引受之間屋ニ被仰付候様可願遣段説客相進メ候ニ付、同人も是迄御國へ商内仕候儀、為冥加登坂之うへハ、細工人荷作り迄もつれ越可申候と漸納得致、無程五人連下り申候、其後段々入替り、當時居残り小畠居住之もの、

嘉吉〈京三條細工人ニ而初發罷下り居住ひ、妻と子共三人御座候〉

次兵衛〈京五条之細工人、七年已前罷下り妻娘連越、當時御山細工頭取仕候〉

喜助〈是者元来天満屋手代ニ而荷造り仕、諸國焼もの直合能存、初發より罷下居住仕、妻子御座候、陶器荷造りハ素人手業ニ出来不申處、此ものより追々授、地下之もの習覚申候〉
吉之助〈蛭子町藤村之伴、啞病ニ而親より孫四郎へ相頼、最初ハ茶椀ニ繪為書、只今ハ專細工仕候而、一ヶ月ニ八九貫文之手業仕候〉

岩次郎〈小畠産ニ而孫四郎出勤中雜仕ニ遣ひ候處、親共之頼ニ而細工人ニ仕廻、專手職仕候〉
右吉之助岩次郎兩人、次兵衛嘉吉より段々教方深切を盡し候ニ付、壱人立之細工人ニ相成申候、此外ニ利助と申夫婦者上方より下り居申候、九左衛門ハ松本雅樂ヶ原ニ住居仕、日々細工ニ通ひ、其余閑邊ニ而水瓶其外大物造候細工人も參り居候、斯迄地場居り候而ハ追々取建相成、終ニハ不殘御國人ニ而相続可仕候〈肥前も其初唐風より傳候節ハ、皆如此と存〉

脩又昨年より石焼御取建ニ付而者、双方勵合一統出精仕、浦小畠竈、今年者是迄月別竈ニ細工仕詰、初發より無之事、然者且々御勘定ニ掛り可申候、ケ様相成候而者格別無子細、心安様ニ相見候得共、新規開発之御取建と申ものハ六ヶ舎と申話、〈私共〉拾四五年携り漸合点仕候、又前段ニ戻り申上候右之御場所、一ヶ年半斗林頭取ニ而世話被仰付候處、上方其外より從者共寄集り、言語同断之事共仕出し種々心配仕候得共、逆も相続成間敷姿ニ而、夫より御手惱ニ相成申候〈林親子ハ無是非不行跡別れ々々ニ離散仕候、右故天満屋も余分損失仕、私方ニも段々迷惑之廉御座候〉泥平事ハ、其後深川へ罷越候而、暫足留持申候、此仁名工ニ而、其節より深川もの抜群上品ニ相成申候、然處同人又此所ニも不戻居、下之関より長府御皿山へ移り候事洩聞得、御呼返し大嶋へ被遣候、右様子人傳ニ承り馴染之儀氣之毒ニ存、且於細工ニ者手達者之名工廢業之程何共残念ニ存候、然處先年同苗十兵衛養蚕ニ付、見嶋渡海被仰付、彼地風土承り候處御國屬島とハ申ながら少し異成所御座候様兼而申候、依之倩考候得者、利休時代之茶器熊川、見嶋手等多ハ高麗物に今傳り名物と相成候、然時ハ見嶋と朝鮮海上ハ隔候得者、隣國ニて海底続申候、對州焼も朝鮮ニ似寄候處相見被得候ニ付、見嶋之土も決而一種可有之禍ヲ幸ニ轉し、右泥平ヲ見嶋へ御移し被成候ハ、一御經濟可被為在哉、之内含高杉様、赤川様へ申上候處、則島替被仰付、當時彼嶋ニ被差置候、其後泥平も已前之事共後悔

仕、内々及文通申候者〈私共〉兼而察候通、一種之土見出し手造之品四ツ五ツ送り試呉候様頼越、小畠、松本両竈へ入焼調候処、至極面白相見、高杉様、柿並半右衛門様へも入御覽申候、左候而見嶋御庄屋中村平左衛門へも被掛御聲〈私共よりも〉談候而、輶轎等送り遣し申候、猶小竈一ヶ所取建被仰付候而も格別御雜費も有之間舗、少々宛ニても焼調一種之御產物整候時ハ、流人迄も自然と馴覺候而雜器造り候之一助ニも相成可申、既竈築造直積り迄も被仰付候処、其節孫四郎上京留主中ニ而、陶器之方同人へ御任せ被遊候ニ付、下向仕候て可被仰合と御座候而、其後高杉様御死去只今ニ至り申候、且中村平左衛門儀も其節より御產物方御用聞ニ相成、手船造り大坂其外へ通船仕候。

又候前ニ戻り、浦小畠御窯前段申上候通、御手惱ニ相成御嚴重ニ被仰付、御手子之衆御入込宿番〈藏目喜金山へ出候山口矢原ノ市左衛門〉被差置御世話被成候得共、開発之初ニ一應懶惰之惡癖を難除、寄集もの、我僕もの斗右を打ハ左ニ廻り、御国法之訳も不弁何共御手ニ合兼、次第二御費御不勘定と立行候ニ付、被相止候之外無之、併御產物御取開之初、御膝元之御場所忽廃し候而ハ世上之誹謗物笑之程何共氣之毒ニ被思召、岩政六郎右衛門様より文藏へ此御場所之儀ハ、先達而氣附任申出御取建被仰付、今更被相止候而者是迄心配之所詮も無之、何卒存寄工風無之哉案見候様被仰掛甚以當惑仕候、其砌ハ養蚕御取建最中ニ而手も張、身柄入込一肩ぬぎ働キ候儀も出来兼、色々愚案仕候處、金兵衛事〈當時改名孫四郎〉初より此一件ニ骨折、京都聞繕等も仕候ニ付、若年ニハ御座候得共此者へ被命候而、入込ニ被仰付候ハ、自然取直し、且々御相続之場ニも至り可申哉、御受合ハ成兼候得共、金山と事替り、あかり之所作故追々精略ニ而調可申歟、此余全以存寄毛頭無御座、尤此もの数年下り苦勞致呉候ニ付其前差登し、京都高倉と申所へ別宅為致申候、早取初候業軀も御座候故、今更打捨罷下り候而ハ無拠費も可仕私より申遣候而、罷下り候程無覚束申上候処、岩政様ニも兼而御存之儀とて尤ニ被聞召同人へ御入割御直書ニ被仰遣〈其節之御書翰御座候〉小田久兵衛様よりも御同様〈是又御書通所持仕候〉ケ程迄御目鑑を以御呼下被仰付候段、外聞旁於〈文藏ニ〉も難有的便ニ申遣候ニ付、不取敢早速罷下り申候、左候而御請申上入込見聞仕候處、誠ニ以譬ニ申蜂之巣破り候如く、前後手之附所も無御座候處、種々様々心配骨折、只今之御山ニ仕立候、其節孫四郎入込倩考候処、是迄居掛り之細工人どもハ我儘惡癖ニ而行儀氣隨之論様も無御座、改而老練之親子ものと申様成實意慥之細工人少し恩銀高値ニ而も抱度趣、又々弥右衛門へ談候處、いつれ古郷をはなれ新取建之場所へ出候ものハ、何職人ニ而も其當座ハ人目慎候得共、元來真物ニ無之終ニハ持前之生地出候もの併一概ニも不被申、百人之中ニハ不仕合ニ而無拠住所出候者も可有之、左様之ものニハ仁愛を以、懷ケ足留候様慈悲心を加へ育候而、其國之地下人ニ為習其業熟練為致候様世話仕候ハ、其土地之産業と成可申、又土地之素人仕込候も同様、退屈不仕錢もうけさせ懷ケ候事肝要、是以六ヶ鋪氣永ニ世話行届候ハ、永久可仕、商人之類ハ利ニ走り候者故、先々利潤ヲ見積り候間、諸國共ニ新山ハ統兼、十と

して八九ハ潰れ申候、此度ハ夫等と違御惱ニ而各方〈文蔵、孫四郎〉御世話被申上候ニ付、御永続可有之、且余程之御費ハ兼而胸中ニ含置覚悟之上、万端御取締拾年御辛抱相成候ハ、急度御場所ニ整可申、攝州三田ニ見事之青磁焼出し無類ニ而名産と相成申候、是も両三度廃し三百貫目斗失墜御座候得共、近方ニ生瀬と申所ニ宜石有是終ニ成就仕候、三田ハ九鬼侯三万五千石之御城下ニ御座候〈文蔵〉近年有馬へ参り生瀬石廿メ目取下り、南京窯ニ而試則小畠ニ御座候、尾州ニ又一御名産出来申候、是者尾張之者肥前皿山ニ拾余ヶ年住居仕、妻子迄も持南京焼之一条ニ工風凝し十分ニ会得、肥州遂電シテ帰國仕、適取建施薬迄も國産見出し申候、大坂問屋土岐屋某、右尾州之ものと初より申合セ成就ニ付、大坂問屋へも當時百人扶持被下候、ケ様之儀眼前弥右衛門も存候ニ付、造作入御世話申上候、

天満屋弥右衛門曰、茲ニ壱人之老陶工アリ、産者攝津國櫻井邑ニ竈取建、櫻井焼之一品ヲ製し出ス、己レ親子と京より名工見立呼寄小手別ニ而業ヲ立、安樂ニ暮し申候、大坂へも焼物下し、少々宛貴得致候事有之、至極實駄老練之人柄也、御取持可申候得共、余り欲氣も無之且ハ遠國之儀承知可仕哉、一應ハ頼見可申と登坂之上乞合候様子ニ候得共、慥成返答も無之何分此仁事承り頻りニ懇望候故、是ヲ目途ニ仕〈文蔵、孫四郎〉態々罷登櫻井邑へ尋候而櫻井と申ハ山城之南攝州之北ニ而、高槻永井侯御領分ニ御座候、昔ハ此所西國街道ニ而駅也、南朝之頃楠公子之西行ニ御教訓遺言之場所、一名子別之里と申候禪寺アリ、公之尊像旗文之石摺等寺宝ニ御座候、石摺ハ津田某様浪華御勤中呈上仕、高槻より御寺領御寄附、侯御在國ニハ御同參と申候、寺ハ大徳流黄梅院末寺と承り申候、右櫻井之陶工甚右衛門へ段々相頼候處、實事之頼義ニ進ミ氣伏仕候而、終ニ親子四人罷越し、當時小畠に頭取仕候次兵衛ハ此甚右衛門方へ京都より細工ニ参り候ものニ而、同人人柄見立世話仕罷下り、只今御山内ニ居住被仰付候、

生瀬之石と此度小畠南京石と似ヨリ候ニ付、三田之趣を以青磁焼候ハ、いかゝと、三田取建候形物之名工亀助と申ものハ京都伏見街ニ住居仕、甚右衛門懇意ニ付下り呉間鋪哉と掛合候處、往来道中滞萩中日別金武歩ツ、之手間ニメ呼候ハ、参り可申と返答仕候、然ハ一年銀拾貰八百目ニ當り候間興さめ申候、名人ハ皆ケ様ニ御座候、其頃河内之國之産之万次郎と申もの夫婦罷下り申候、青磁薬掛候事上手ニ而、只今其通りニ色出不申候、白綠ハ藏目喜より出候間、いか様ニも成候得共加減と相見申候、

又浦小畠蛭子ケ鼻東ノ方ニ古竈場并ニ細工所在來仕候、是ハ九ヶ年以前〈熊谷五郎四郎其外四人最合ニ而取建申度一達より文蔵招談候ニ付、入割申聞候ニハ中々素人寄合ニ而永続仕候ものとハ不分得、別而仲間事ハ人欲ニ而互ひニ申分もつれ出来、中途ニ崩無益之損失ニ可至、暫時見合勘考之上取建候共、遅かる間敷と存寄申聞候得共、御取建御場所之御妨ニも可相成斯申候哉と一統疑念起し候趣ニ付、無是非表向ハ御場所之道理ニ願取建申候、然共如案寄集り、酒食遊樂ニ費多、武ヶ年不足ニ拾三貫目斗損失仕候由ニ而、互ひニ持余し孫四郎へ片付

相頼申候、〉

諸又他國船小畠焼買得候而も深川焼もの信楽之茶碗〈ヲムロ焼ト云、間杉とも申候〉好ムニ付、何卒深川物も少々焼度兼々心掛候處ニ、折節彼地ヨリ五郎左衛門、傳左衛門之兩人少々子細有之、萩表へ出職仕度趣承り申候〈是ハ泥平深川へ参り候節、娘ハ傳左衛門妻ニ遣し、五郎左衛門ハ仲間ニメ下之関新地藤井正義跡竈引受之目論仕候ニ付、深川地下細工仲間不和ニ成候故之依之〉右古竈場と深川細工人両處ヲ組合せ〈孫四郎〉工風を以双方相整、只今此所ニ兩人専細工仕候〈泥平次男浪々仕候付、傳左衛門弟子ニ取建申候〉此竈場ヲ西山と號申候、且京焼と深川者窯内之様子旁築方違ひ候ニ付、京竈後江深川流貳口築増申候（深川兩人ハ西山ニ居住仕、細工物取調御場所へ持運ひ申候、西山之古竈ハ崩候而用立不申、尤素焼出来申候）浦小畠一條者右申上候通ニ御座候、

一御両國之儀者何一つ闕候事も無御座、最上之御國と奉存候、惣而萬物陰陽之氣ヲ受土より不生者無之、此土ニ付段々論御座候、焼物ニ掛候薬土ニ鋸水垂、是ハ瀬戸之茶入杯ニ遣候薬土也〈瀬戸ハ往古勢州ニ属候由、只今ハ尾州知多郡鳴海の沖、伊勢川崎之向地歟と存候、焼ものニハ古キ所と相見、陶器商賣仕候もの瀬戸物屋と申候、南蛮燒質物ハ床鍋と申所ニ仕候、是も尾州と存候、又舟頭福右衛門申分ニハ四日市之南と申候、然者勢州之内歟、何分尾州ハ土之宜國ニ御座候、茶碗繪薬見出し候も不思議、此御國ニ也可有之と專心掛吟味仕候〉

右鋸薬之土蛭子ヶ鼻之山手ニ澤山見出し、只今小畠ニ薩摩焼写新薩摩と申茶色之土瓶則ニ御座候、惣而焼ものニ艶出し候うハ薬者、鶴江邊より大井近所一面御座候、陶器土最上者小郡臺道ニ御座候、半陶と申地名も是より出候哉、

御留場之土と申、上田正蔵抱ニ御座候得共、其所ニ不限長澤堤之近所惣而宜御座候、此堤南端より五六町海手ノ方ニ小原と申所ニ小太郎と申もの竈築、水瓶之類荒物焼候得共、微力ニ而不行届、捌ケ方も鈍く相見候、此街道端ニ竈築土焼之一種取建候ハヽ、九州筋之諸侯長崎之參勤交代國江戸之土産ニ捌ケ方可有之候、先年御產物賣捌ニ付小郡へ出滯留仕候節、松本焼少々持出罷在候折柄、薩州侯御泊ニ而山田二三次様と申御家中御合宿ニテ、此御方江戸御馴染ニ而不思議之再會と終夜御話申、焼もの進物仕候處、至而御悦ニ而其後も頼參り申候、然ハ臺道土之妙、遠國迄称美仕候、其節小原小太郎方へも罷越一見仕候處、細工ハ一向ニ御座候得共、土性ハ言語ニ絶申候、此土ニ而瓶焼候ハ、譬に申箔之小袖ニ繩之帶ニ而甚残念ニ存候、小郡町真光寺院主造ひねりもの御名人ニ而小原竈へ入候、細工物色々一覽仕候処、焼立薬之出塙梅窓ニ見事ニ御座候、又上田正蔵近郷之岡山より徳之形ニ而横ニ口附候器、無疵ニ而大小ニツ掘取得所持仕候、三ワスエニ御座候、神代之儀ハ不存何分古物ニ相見候、正蔵肥后へ参り候節、村井先生ニ咄候處其器不見、表ニ青海波裏ハ布目可有之と被指候由、然者無疑真物也と秘藏仕候〈小サキ破レ一呉候而所持仕候〉正蔵

儀ハ好士ニ而勝手向も宜候間、何卒此所ニ竈取建御國益も備ヘ自己之樂ニ也可相成、雜費入用ハ身上ニ對し九牛の一毛、土ハ勿論薪も船手之便利、其上往還端十分之勝地と進メ見候得共、御國之人氣やかましがり、第一ニ而雅物ニハ候處、経済氣薄納得不仕候而相止ミ申候、小幡源兵衛様御領分此邊ニ御座候間、段々御咄申上候事も御座候處、其節御死去ニ而于今殘念ニ存候、

同所続ニ佐野素焼も一種ニ而本焼ニ無之、ケ程つよきも土性宜故ニ御座候、

紅毛人筑前焼水瓶壺石より三石夥敷本國へ積返り申候、壺石入之瓶銀三百目ニ本國ニ而ハ當り候と通詞方之咄承り申候、本邦ニ而茶方ニ南蛮之水指と高値ニ称美仕候、南蛮ニ水瓶ハ造り不申哉、世界之事小論ニハ不合點成ものニ御座候、右ニ付小郡抜群之土を以何そ製候ハヽ、万國へ行間敷ものニも無御座歟、御國中ニハいか程もケ様之儀可有之、御三家岩國御領物而之御給領逆も防長御一躰之御儀、萩様之御仁恵ニ而御世話被為行届候ハヽ、後年莫太之御國潤と奉存候、

臺道土を以他所ニ而沢山焼出し候ハヽ、是迄松本焼濃茶之美名も失可申哉と存候得共、全左ニあらす、是ハ臺道土を以御細工人被造候故ニ自然之妙御座候、現在此土ニ而小畠細工人ニ為造例し見候得者、其形容かしこく利口過、いか様ニ申而も雅物ニ整不申、此土京都へ登し茶事心得候細工人ニ為造候而も、矢張京焼之萩寫しニ成申候、泥平ヲ深川ニ置、臺道土ニ而為造候而も已前松本ニ而作り候様ニ無是悉試仕候、譬臺道ニ而燒候而も松本ニハ成不申候、當時鉄鍔京江戸ニ而寫、先年御國浪人と申事ニ而紀州ニおみて彫候鍔見受候所大ニ違ひ申候、皆同論ニ而惣而人之音聲迄も水之事といセ之モトヨリ先生被論候由、羽二重者万國一二而異國へも取帰り候、昔ハ日本ニ上糸無之故歎、白糸と申異國へ被仰遣、御物ニメ御取寄相成、京江戸大坂堺長崎五ヶ所ニ糸割符年寄被立置于今連綿御目見仕候、只今ハ日本ニも追々上糸出来唐糸持渡り少相成候由、

宮中之御衣初本御召と申ハ上京柳原と申所ニ織申候、尤京ハ養蚕不仕遠國之糸を立横ニ組合せ織申候、江州飛驒美濃甲州糸ニ御座候、並羽二重者西陣ニ而も織申候、下京ニてハ一向出来不申候、悉皆土と水ニ御座候、然ハ茶器者松本之水に限り可申候、

一南京竈〈石焼と号候〉俗ニ唐津焼、今利焼いつれも肥前國中に多分有之、筑前よりも下物焼出し申候、又近年尾張より余分出し、ケ程所々御座候而も年々南京焼沢山渡來仕候、此器ハ日用ものニ而日々破レ失候故歎

宮中御用年ニ凡銀六拾貫目、江戸御本丸斗百貫目と承り申候、江戸ハ一火災ニ失候事可察、北國ハ寒氣強譬石有之候而も五月より八月中ニ而、土氷り算當引合不申、品ハ上物好し萩よりハ北國究竟之目當ニ御座候、

此石焼之儀、御城下邊ニ而出来申間敷哉と高杉様毎々御囁御座候得共、京竈御取建之初、余分之御費御座候ニ付、仮初二取掛りも致苦敷、尤地石ハ〈孫四郎〉段々吟味仕置、決而上品

調可申と折々京竈ニ而試候處、透塩梅面白一種出来可仕と覺悟仕居候得共、京竈と南京焼ハ細工人諸道具、竈之築建も異ニ御座候ニ付、兼而落着ハ致ながら、先京竈存分ニ整不申而ハ決ル處容易ニ申上かたく、暫申談工風中、先大津瀧部と申所ニ石焼初候而〈孫四郎へ〉通達仕候ニ付高杉様へ申上候處、早速罷越糺候而申上候様被仰付〈孫四郎、武助〉両人參り滯留仕候而焼調之器少々取帰り申候、右初発ニ合せ候而ハ並物相應ニ出来仕候、細工人肥前より参り、此もの共追々出萩仕候中、野村伊之助様御相對ニ而、御在所へ御連越所々為御見被成候處、同所之内木部野ニ相應之石見出し御進メ申上候故、御自力ニ御築建是又並物宜出来于今連綿仕候、右両所へ追々細工人往来仕候ニ付、毎事〈孫四郎〉呼寄滯留為致候而所々石為見候処、いつれも讚美仕候得共虚實之處無覚束、且ハ小畠最初之うちニ少し懲候而為念少手作らせ、則深川焼之所へ入相例得者、弥實事ニ無相違安堵仕、昨秋より申上於小畠只今之御場所御取建相成候〈頭取仕候喜十郎儀、初ハ瀧部へ罷越候而妻嫁仕、只今小畠ニ而一子出生仕候〉

肥前焼ハ肥後天草島より地石四十里之灘ヲ取寄、船着より山ヘハ三リ五里馬之背ニ而送り申候、薪も御國より高直ニ承り申候、然者此御場所地石沢山、薬石も有之、水之手積出し之便利都合宜候間、地下細工人御取建被仰付候ハヽ、往々繁昌可仕候〈當時習候ものハ喜十郎妻方蛭子町藤村吉之助方ニ〉兩人取建並物出来仕候、繪書も習候もの御座候、上之闕御宰判よりも此中石差出例し見申候、是も相應ニ相見申候、然者所々宜世話人頭取御座候ハヽ、御國中陶器他國入ヲ防キ其余四國山陽之國ニ交易相成可申候、三田尻勝間御開作東ノ方浮野峠之下ニも土焼仕候〈浮野ニも宜石御座候、是迄うハ薬ニ遣ひ申候、石焼も出来可仕と存候〉

山口八幡ニ土焼仕候石も御座候由、吉富次郎右衛門先達而御尊仕候、左候得者南京焼出来仕候、山口者名高所柄ニ而、只今之ことく衰候事氣之毒ニ御座候、四十年斗已前と只今之姿余程之違ニ御座候、手職之外取直し様無之候、高杉様ニも御心配、養蚕之初此所格別ニ被仰付精ニ入候得共、頭立候もの無根氣、一足飛之欲斗深く、山ヘ桑植候事も赤土故異見仕候得共不入聞、桑不育時ハ其山ヲ貴と初よりたくミ蚕ハ不飼、丹後之残綿織集メ、大騒シテ二年も不続損失仕候、昨今年ヨリ漸養蚕氣ニ移り、初而繭出し合点參り申候、陶器取建見度所ニ御座候、

此余所々ニ可有之候得共世話人無之、御上之御聲掛り不申而者、惣而不開必竟殘念ニ御座候、皿山一件如此ニ御座候、以上

文政七申霜月

山城屋 文 藏印

孫四郎印

(註) この資料は、昭和30年に吉田樟堂によって万年筆で写本されたもので、原本については、未確認である。『汲古雑抄一』に採録されており、その緒言には「コノ冊子ハ余ガ舊萩藩ノ古記録ヲ見出デツル折々、何ニ倚ラズソノ未ダ眼ニ触れザル記録ヲ寫シ置ケルヲ、コノ頃病間を得コヽニ整寫スルモノトス、而シテコノ第一冊ハ故人村田清風同唯雪父子ニ間スル記事ヲ主トシテ採録シタリ…』と書かれている。表紙には「文

政七報告 陶器竈取建一件 萩藩産業志料原本 一巻寫本祥蔵」とあり、いざれは「防長産業史」を執筆しようという構想があったらしい。
なおくゝは、本文中の割註をあらわす。

資料2 「御内密申上之覚」(益田家文書 東京大学史料編纂所蔵)

(前略)

一養蚕絹織物等頻りニ御取建之時節有之、京都町人山城や文藏世話を以、江州より蚕飼糸取機織等ニ心得候女共多人数呼下シ、諸士妻女等ニも仕法を教へ、見合々々駆廻り、追々宜出来立候由ニて、桑苗をも余多御買下ニて、諸屋敷諸郡江も植付被仰付、一節ハ加比丹ト唱候絹紬をも余分織出被仰付、長崎交易□□ニいか程も直段能引受候と申事にニて、失ニも相成、其上御役人も追々手替りニて世話好キ之人も無之故か、いつと無自然ト相止候形チニ相見、就而ハ桑木も絶々ニ成り、已前之畠ニ掘起し候而も、当分ハ土地荒れ作物も出来兼、彼是ニ而是も御損毛事ニテハ無之哉と考申候、

一小畠皿山も式十ヶ年程前後之比カ、御仕法替ニ相成、他国焼をハ一向ニ入津被差留、強而御国焼ニ而相済せ候様与之御趣意ニテ、一節ハ繁昌之形チニ相見可然事与存居候処、他国焼一向ニ被差留候而ハ、小畠焼自然ト高直ニ相成候氣味有之而、諸方迷惑可致哉与之御僉儀も有之折柄、御国産方役所をも御引セ旁ニテ、其砌より上ノ御手を離れ、只今ニ而ハ下受負ニテ歎焼調候由ニ承り候、猶又小倉機種油御手絞扇子調其外、小々之産物も御国産方之引受ニして取捌相成候処、根役所被差止候付、悉く仕法相崩申候、右皿山之儀ハ職人共江前賃銀有之候ヘ者、追々焼出之度々御下ケ銀之内を以、纔充御取入ニ而、近年之内ニハ皆済をも可仕御勘定ニ□□□処、右□之仕法替リニ相成候而ハ、いか、相片付候哉、其□□存知不申候、小倉機其外小々之分ハ御損失事与相見候、

但、小倉種油其外ニても、於下相調候分ハ、元来上々御世話不及事候、上々御力を不被入而ハ於下難調と申程之部計リ、御世話被仰付度御事候、惣而上々御益も下々益も、御國中之儀ハ一躰ト御目を付られ候而被相行候儀、國產御取立之御本意ニ而可有之処、兎角氣沢山成ル人ハ大手を広ケ、何も角も致したがり候氣味有之候得共、一人ニテハ難行届故、手先を遣ひ候処、存分之もの計りも無之故、終ニハ難被行、余分之御損ニも至る事歎とも相考申す儀ニ御座候、(後略)

資料3 『防長風土注進案 第20巻 當島宰判』

(前略)

一陶器竈一軒 中ノ倉 坂新兵衛 往古ヨリ有之

同一軒 ムタケチ 三輪源太左衛門 右同断

同一ヶ所 今浦壽久山 文化十一戌年被差免候
同一ヶ所 同所西山 文化十三子同断
同一ヶ所 前小畠天寵山 文政十三寅年同断
右五ヶ所只今燒調候事
一陶器窯古址 前小畠素玉山 文政七申年被差免候處當時相止候事
同壹ヶ所 同所泉流山 同九年同断、當時相止候事
同壹ヶ所 同所大向山 同十亥年同断、當時同断
同壹ヶ所 同所永久山 同十亥年同断、當時相止皿山會所ニ相成居候事
(後略)

資料4 『阿武郡當島郡中大略』(山口県立大学蔵)

(前略)

兩人所惱

一鑄物細工場 御細工人 郡司右平次

一同吹鉢場

御除地 田一反一步 一石二斗七升二合

畠三反二十四步 二石三升三合

同断

一焼物窯屋一軒 同 坂新兵衛

一同細工場一軒

御除地 畠七反二畝三歩 六石三斗三升二合

同

一焼物窯屋一軒 同 三輪両藏

一同細工場一軒

御除地 田七畝五歩 七斗七升二合

畠拾五歩 八合

同

一瓦細工場一軒 同 河村七右衛門

御除地 畠一反七畝十八歩 二石三斗二合

同

一同一軒 同 河村孫七

御除地 畠二反十五歩 二石六斗八升一合

客屋捌

一皿山三ヶ所

一ヶ所 天龍山 前小畠赤坂

内 一ヶ所 素玉山 同 中山

一ヶ所 壽岳山 同 浦

(後略)

資料5 「御在國控」(毛利家文庫 4 忠正公68)

京都町人 山城屋孫四郎

右先代文藏より引續當町々人小橋吉郎左衛門育滯留ニ而、產物方御用被仰付、養蚕并產物皿山御取建一件其外彼是遂心勞、御國益も出来御用ニ相立、數年御國中相滯居、就中產物方御用達相勤候中、右吉郎左衛門育被差除萩住居被仰付候段、文政十一年御沙汰相成、夫以來相滯居候處、去秋御詮議之筋有之、御國產方役所御引せ被成、彼もの御用達をも被差除候、右ニ付而ハ帰國之御願をも仕度相含居候へ共、從來御國罷居御國恩を蒙り今更退去をも難仕、何卒前断之被為對勤功年始御目見被仰付引續在仕候様相願候、依之遂詮議候処、他所者御目見之儀ハ先例無之而者容易難差免事ニ候得共、先代文藏義御國罷居候内、年始御目見被差免、當孫四郎義も引續萩罷居御國者同様渡世仕、彼是段々御用相立候義ニ付、脇々差支リニも相成間敷哉、各別之筋を以於于時來年始御目見被仰付候而ハ如何可有御座哉

右天保十五年辰十二月廿四日隱岐殿伺済、即日江戸方差廻ス、同廿八日及御聞候由ニ而戻候付、即日左之通御客屋江及沙汰

一願書之義ハ當町其外之者 御目見願之袋ニ有之

京都町人 山城屋孫四郎

右先年より產物方御用被仰付、養蚕并產物御取建一件其外彼是遂苦勞、數年御國中相滯追々御國益も出来、御用ニ相立候者ニ付、於于時來年始御目見被仰付候事

資料6 「雜事控」(毛利家文庫 9 諸省45 30の13)

私同業林弥四郎家之本人半六先年出奔仕御恩御扶持職場共ニ被召上奉恐入隱居佐平家子共ニ流浪之躰ニ罷成難儀仕罷居申候処ニ、去ル子ノ年佐平事御產物方御用ニ付、御役所より之被仰立を以被召出、職場共新規建調被仰付追々奉遂、御用節重々難有仕合奉存候、左候処彼者儀も当年七拾弐歳ニ罷成老人之事ニ而御座候得共、未堅固ニ土器細工相調來リ、前断之通追々御用物焼調被仰付難有仕合奉存候処ニ、御皿山方より被立遣候竊年久敷相成及破損、当春已來御普請掛リニ御座候処、今以半途ニ破損以来ハ御用物被仰付候而も御用物焼調之場所無御座奉恐入候 (中略)

八月

坂新兵衛

福原八郎右衛門様

仁保孫右衛門様

右天保八酉八月十四日 両人所江廻之

資料7『座右雜記』(萩市郷土博物館叢書 第1集)

一七月七日浦小畠茶碗竈龍巻ニテ崩ル。近辺少し損ス。怪我人無之。

資料8「谷村家文書」(萩市郷土博物館蔵)

一きんりう壱ツ

一極印壱ツ

一なた式丁

一懸子硯箱式面 但石水入共

一御用箱式ツ 但懸子にして石水入共

□□□さん八本

□□間物

一火着一膳

一手洗大小式ツ

一大羽釜壱ツ 但蓋共

一□□□□ツ

一中羽釜壱ツ 但五升焚之分蓋共

一木ばさミ壱ツ

一土瓶拾□ 但黒焼之分

一小畠燒茶碗百ヶ 但御舟倉ト名有之分

一書院下駄壱足

一大そうけ式ツ

一すくひたま七本

資料9「坂新兵衛願書」(坂家文書)

(前略)

一焼物利徳之儀、申出候様ニ御沙汰相成候所、私共焼物之義者、其時々より天さい、上出来不出来も有之なれ合是迄追々奉遂御用之節候、猶つめ草之義者、兼而壳拂之義御沙汰相成候所、近來皿山方御取立相成候節より萩中焼物屋中江皿山方之下壳ニ相成、私共焼物一向壳拂不被

得仕候ニ付、近來下物多分すわり相成、右ニ追々借銀ニ相成、徳銀之見度も無之於下ニ難渋仕候、此先より壱分釜切之つめ草壳拂の手段共御座候ハヽ、徳銀之見度も相見江可申候得共、只今之通ニ而ハ其手段無之候、前段之参り掛り被聞召分宜敷御取成奉願上候、以上

丑ノ正月

坂新兵衛

御両人所様

資料10『皿山代官旧記覚書』(池田史郎編 皿山代官旧記覚書刊行会)

文政四巳達帳

(前略)

一皿山之儀、御国産重之場所柄ニ而、秘事之產物相拵、外々へ相洩候而ハ決而不相叶、然処、近比緩セ成立釜焼共不手メ之処より、長崎山其外へ絵書細工人共致旅出、御上御難題等相懸、別而此節長州萩山へ罷越居候者も有之候ハ、専釜焼共兼而絵書・細工人共へ申諭方大形之処より、右躰之儀致出来義候条、右之通御法被相建儀条、懸リ々々懸ニ無洩様、可相守候事、

但、前同断、万一抱置候絵書・細工人旅人罷越居候者於有之而ハ、抱置候釜焼ハ名代札御取揚、本人を已前より之通稠敷御手当相成候事、(後略)

資料11『防長新聞』明治36年4月11日（土曜日）第5427号

萩小畑泉流焼の由来に就て

(前略)

小畑焼の磁器は京山とかいふ山が古ひ余が祖父宮川孫四郎と言ふ人舊藩の頃小畑の雅楽殿川の辺にあった產物方の役所へ通勤してをられた或日雨後に其近傍なる白山社の山下にて「セキ」と言ふ磁器の原料を拾ふたのがもとにて京都へ持て登り斯道の名工に鑑定させ好評を得たそれから藩に請ふて起業せしといふことだ

職工は京都からも伊万里からも呼び寄せた道亭も其のとき來た上絵かきにて焼付絵を専らにした後には土地の人にも上手が出来西浦焼を創めた興吉と言ふ人も小畑から出た

天保年間に出来たものには染付赤絵青磁等見事のものがあります長門埴田と染付た精巧のもの間々世間に存在しますこの落款なきものは古伊万里、南京窯などに混して世に珍重せられて在ましょふ弘化嘉永頃は日用の皿鉢等北國船の入港毎に盛んに積出した絡師も伊万里から呼んだものにて荷造りの仕方伊万里と同様でありました

この皿山の事を書たものもありましたが皆なくしまして暗記のままをお話します故違ひがないとも申されませぬ（山口宮川臣吉）

大野毛利家上屋敷跡遺跡(旧市立病院跡地) 発掘調査について

*岡 村 良 和

1. 遺跡の位置と歴史的環境および調査の経緯について

大野毛利家上屋敷跡遺跡は萩市大字堀内355番地に位置する。萩市は、関が原の戦いに敗れた毛利氏が本拠地を置いた場所で、萩城を築城し、その周辺に城下町を形成したところである。萩城が築城された指月山付近は、三角州の形成が未発達で沼地が多い場所であったが、毛利氏が萩に入府する以前、すなわち、中世には津和野三本松城を本拠とする吉見氏が指月に居館を設け、家臣や庶民の人々が住み始めて城下町が形成されつつあったとされている。そのような状況の場所に1604年、毛利氏によって築城工事が開始されて城や町が建設されていった。当遺跡は、当時の萩城三の丸のもっとも東側にあたり、すぐそばには城下町と区別した外堀が巡らされていた。城下から三の丸に入る3つの門、すなわち、北の惣門、中の惣門、南の惣門の3つの門が設置されていたが、この場所は中の惣門から入ってすぐ、御成り道の本丁筋にあたる。三の丸は主として藩の重臣クラスの居住地があった場所である。

大野毛利家は、毛利輝元の命により、吉川広家の次男彦次郎に一時断絶していた吉見氏を再興させたもので、熊毛郡大野村（現在の熊毛郡平生町）に領地を与えられ、毛利一門六家に数えられた。毛利隱岐殿と呼ばれ、江戸時代終わりには石高8,600石あまりを領した。当初、江戸時代初期の絵図面では南側半分を大野毛利家が所有し、北側半分には3軒の武家屋敷があった。江戸中期になって全体を所有し、明治維新まで続いた。明治の初期には芝居小屋があったと言われるが、東側部分は士族授産のために夏蜜柑が植栽され、現在まで続いた。その後大正14年には萩町立伝染病院が建設された後、昭和元年には町立堀内病院、昭和26年には萩市立病院となり、平成12年までこの場所にあった。当地は新博物館建設予定地のため、平成12年10月から平成14年3月まで発掘調査を行った。敷地面積の約1万5,000m²のうち調査面積は9,080m²で北西側4,200m²を第Ⅰ地区、北東側880m²を第Ⅱ地区、南西側4,000m²を第Ⅲ地区とした。また、当時の屋敷地東側境界にあたる、現在、公園になっている素水園内のトレンチ調査をおこなった。萩城周辺の武家屋敷の本格的な調査は今回が初めてである。

2. 発掘調査の成果について

ここでは、調査で確認された遺構、遺物について簡単に述べたい。全地区を通して、まず、基本層序は、第1層は現代で、旧市立病院のころの建物基礎や攪乱によって、浅いところで50cm、深いところでは3mにも及ぶ。第2層は明治から昭和にかけて、第3層と4層が江戸時

代であり、この時期には火災や建物の改築などで整地が繰り返されているため、時期区分は難しい。次に確認された遺構は土坑（SK）、石組み遺構（SS）、石組み井戸（SE）、建物基礎の石列（SL）、礎石、埋甕がある。土坑には、火災後に焼けた土や瓦などを処理したものや日常生活におけるごみ穴、そして建物の改築などに伴い瓦等を捨てて処理したものがある。遺物は陶磁器として、萩焼、肥前陶磁器、京焼、備前焼などの茶碗や皿、輸入陶磁器では中世の時期にあてはまる龍泉窯系の青磁や16世紀末から17世紀前半の景德鎮窯系、漳州窯系のものがある。土器として土師器の皿（カワラケ）、焙烙、焼塩壺、焜炉、火鉢、瓦（棟瓦、鬼瓦など）がある。裏側に赤間闇と彫っている赤間硯、石臼などの石製品や寛永通宝の銅錢、また、煙管、釘、クレイパイプ、動物の骨が出土している。

石材については萩城が築かれた指月山付近の花崗岩や笠山の玄武岩が使用されている。また、木製品については井戸からの出土以外見つかっていない。それは砂質で水はけが良いために乾燥して朽ちてなくなってしまったと考えられる。

(第I地区) 敷地内の北側にあたるが、層の確認から江戸時代に少なくとも2層の生活面があると思われる。地区内西側に確認された火災処理土坑は、深さ1m50cmにもおよび、下層に焼土が集められ、その上には焼けた瓦などが廃棄されており、その中から出土した瓦から瓦当文様に動物が貼り付けられているものが数点出土。これは易経の八卦紋と思われる（図版6右中央写真）。文献では17世紀後半にこの場所から出火した火事があったことが記録されているが、時期決定できる遺物は出土していない。また、西側の道路沿いで石列が確認され、これは蔵の基礎と思われる。砂質という地盤もあってか、石の置き方は石を縦に突き刺すようにしっかりと固定し、その上に平らな石を据えていた。地区内中央には、18世紀になって作られたと思われる土壙基礎および門の跡である東西の石列が約30mにわたって確認された。これは東大本郷キャンパスで発掘された加賀藩本郷邸跡において居住空間の境を示す壙の基礎と思われるものが検出されているものと同じ性格ではなかろうか。また、南側には東西に並ぶ石列SL-A、その南側に1層下には東西に並ぶ石列SL-Cと南北石列のSL-Bが確認されたが、（図版5右中央、下中央）、いずれも17世紀代の境界区画にあたると思われる。地区内東側には建物の基礎と思われる石列が南北に配置されていて、長さ17mに及ぶ。時期はおよそ18世紀代と思われる。その他に、石組の井戸が3基、長方形を呈する石組遺構2基が確認された。時期がわかる遺構として、SK01、SK02がある。SK01は、土師器皿の一括廃棄で、44点出土しており、うち14点は口縁部か内底面に煤が付着している。SK02は、"安永三年"(1774年)の文字が刻まれた携帯用硯、さらに"明和十年"(1773年)と書かれた京焼の色絵暦文茶碗が出土しており、18世紀後半の廃棄土坑と思われる。01と02は重複し02が後から掘り込んでいるが出土遺物からほぼ同時期の遺構と思われる。

(第Ⅱ地区) 敷地内の東側にあたる。地区内東寄りに南北にかけて径が100×100cmぐらいの土坑が等間隔にあり、しかも土坑内の埋土には現代のものが含まれていることから、最近まで何度となく夏蜜柑の植栽が行われていたことが確認された。先述したとおり明治以後に武家屋敷地のほとんどは夏蜜柑畠地になっており、昭和初期の鳥瞰写真からもⅡ地区の場所は夏蜜柑畠が伺える。また、花崗岩製の石組井戸が1基確認され、廃棄されたのは遺物から18世紀後半と思われる。花崗岩は18世紀初めに使用禁止されたと言われており、構築年代は17世紀終わりころか。石組最低部からは水が湧き玉砂利が確認されたが、木桶や木製品は見つからなかった。その北隣に南北に5m、東西に1m50cmの長方形の石組遺構が確認されたが、遺構内の埋土、さらに周囲の状況から台所と使用していた可能性もある。また、溝状に東西に配置された石列が確認され、その西側に真砂土をタタキしめたものが見つかったが、これは池の存在を伺わせるものか。その北西側には瓦を大量に廃棄したSK43が確認されたが、出土遺物から明治以後の大規模な整地に伴う廃棄土坑と思われる。

(第Ⅲ地区) 敷地内の南側にあたる。南側は藩主が参勤交代時に通行した御成道があり、長屋門と玄関があったとされる。調査では未確認。敷地内東南隅は昭和20年まで矢倉が残存していたが、(図版4右上写真)現在、市立西中学校がテニスコートとして使用しているため、調査は行っていない。屋敷図が残存している旧福原家萩上屋敷の絵図(図版3右下)などを参考にすると、表玄関から入るとまっすぐ伝い石が伸びているのであるが、調査では確認できなかった。南北にのびるSL04と東西にのびる05については焼土上に配列しているが、この焼土は火災後の整地時にこの場所に集めたと思われ、平面的な広がりは調査区外に伸びているため不明である。深さは1m50cmで、焼土中からの遺物は瓦片が数枚出土しているが、あとは18世紀半ばの鍋島と思われる磁器片が1点出土しているのみである。SL03から東西に伸びる石列と、SL04から東西に伸びる石列はそれぞれに石上面にコンクリートが付着しており、また、市立病院時の配置図面からも病院基礎と思われる。西側沿いに平面で2m×3m、深さが2m弱の廃棄土坑が多い。これらの土坑は断面で見ると、最下層に不要な瓦があり、その上には破損した茶碗、皿、魚の骨などが確認され、3、4層に分かれているので一度に埋められたものではなく、日常生活におけるごみ穴だったのではないだろうか。そのほかの遺構として、寛永通宝が数枚重なっているものが土坑内から何箇所もあったSK33やI地区のSK01と同様に土師器皿を一括廃棄したと思われるSK34が検出されたが、いずれも西側の道路沿いのもので2つの遺構の距離はわずか14mと近い。また、検出中に土師器皿に文様などが墨書きされたものも出土しており、敷地内での地鎮祭のようなものが行われていたと考えられる。その他に石組井戸が4基、石組遺構が2基確認された。井戸について、SE03内からは幕末ごろの陶磁器が出土していることから、明治に入って整地をする際に廃棄されたものと思われる。石組最上部から深さ2m70cmのところで石組最低部になり、水が湧くと同時に木桶が確認され、木桶内

からは木製品が見つかった。SE04もSE03と同様に木桶が確認され、木製品が見つかったが、時期決定できる遺物は確認できなかった。

(トレンチ調査) 現在、公園になっている素水園は昭和9年にできたものだが、江戸時代は屋敷地東側境界にあたる。公園内中央に南北にトレンチ調査した結果、一部損失しているが土壙基礎の石列が確認された。すべて花崗岩製の石を使用し、中には矢穴跡がある石も見つかった。

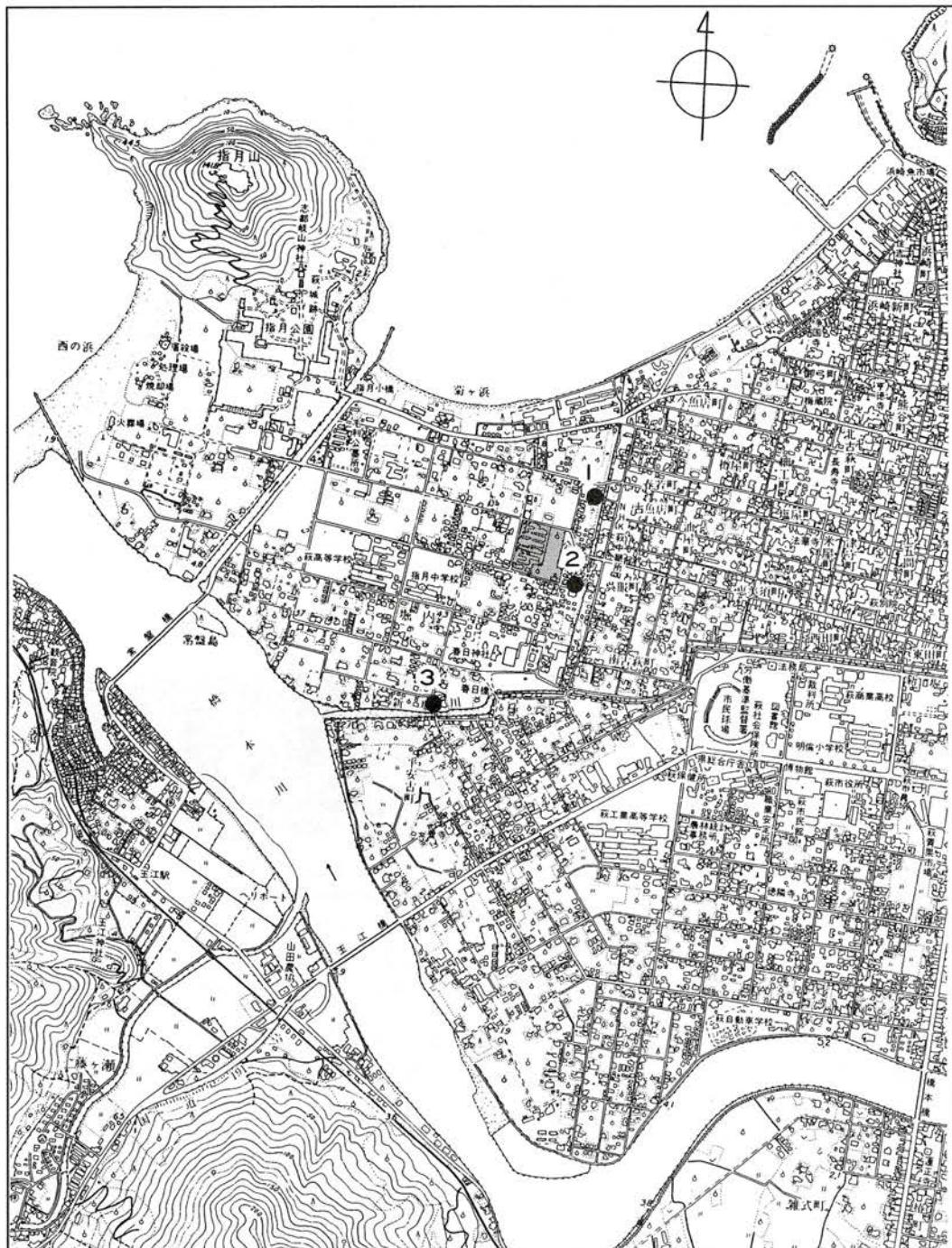
4.まとめ

IからIII地区を通して、全体の様相について考えてみると、I地区の南側およびIII地区の北側は廃棄土坑がほとんどなく、また敷地内のほぼ中央にあたるため、およそ江戸時代においては当主の御殿があった場所だと思われる。また、西側には蔵が建てられ、建物がない空白地を利用してごみなどを捨てていたものと思われる。しかし、先述したとおり、敷地内全体において明治以後の建物の建て替えなどにより、攪乱を受け、あるいは建物の基礎石などが除去や転用されているために残念ながら全容をつかむのは難しい状況である。今後、遺構の性格および出土遺物の詳細な検討を行なうとともに、継続して調査が行われている外堀地区からの出土資料を参考にし、さらに武家・商人屋敷跡地などの調査が進んで資料が蓄積されていけば当時の生活様式が明らかにされていくだろう。

参考文献

- 萩市教育委員会『萩城跡外堀調査報告書』1988
- 江戸遺跡研究会編『江戸文化の考古学』吉川弘文館2000
- 江戸遺跡研究会編『江戸考古学研究辞典』柏書房2001
- 平生町教育委員会編『一門六家 大野毛利氏と平生開作』平生町教育委員会1988
- 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年－九州陶磁学会10周年記念』2000
- 西秋良宏編『東京大学コレクションX 加賀殿再訪東京大学本郷キャンパスの遺跡』東京大学出版会2000
- 萩市教育委員会『萩 堀内 平安古』昭和61年3月
- 嶋谷和彦「“地鎮め”の諸相」『関西近世考古学研究Ⅲ』1992関西近世考古学研究会
- (財)山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター『掘る みる わかる 城下町 萩城跡(外堀地区)発掘調査報告書Ⅰ』1998
- 萩市教育委員会『萩 史跡萩城跡 史跡萩城城下町』平成3年3月
- 学研「歴史群像」名城シリーズ14『萩城』1997年

図版1

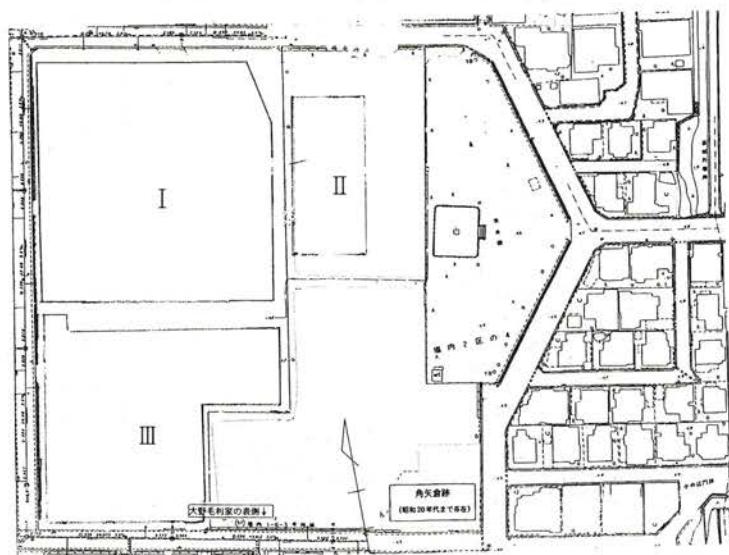


萩市街図

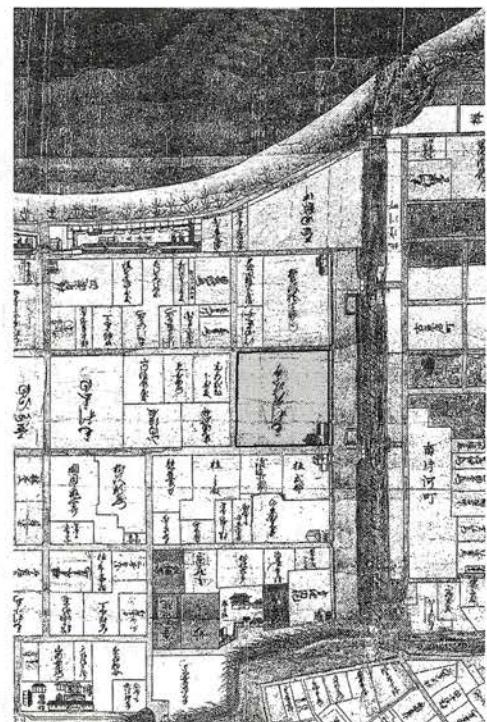
1、北の惣門跡 2、中の惣門跡 3、平安古惣門跡

■ 発掘調査地

0 100 500 1000m



調査区位置図 $S=1/2,500$



寛文10年(1670)前後絵図(部分) 萩市郷土博物館蔵
大野毛利家屋敷地

寛保2年~延享4年(1742~47)絵図(部分) 萩市郷土博物館蔵
大野毛利家屋敷地

図版3

三の丸における屋敷地所有者（嘉永年間 1848~1853）

	氏名	階級	石	斗	升	合
1	長府屋敷	末家（長府毛利家）	83,011			
2	吉川監物	“（岩国吉川家）	60,001			
3	本毛利筑前	一門（右田毛利家）	15,985	8	2	5
4	本宍戸四郎	一門（三丘宍戸家）	11,329	5	3	4
5	本毛利伊予	一門（吉敷毛利家）	10,855	5	9	
6	本毛利隣岐	一門（大野毛利家）	8,255	4	3	5
7	本毛利主水	一門（阿川毛利家）	7,391	2	8	9
⑧	毛利能登	一門（厚狭毛利家）	6,696	6	9	6
⑨	益田越中	永代家老（須佐益田家）	12,062	3	0	6
⑩	本福原近江	永代家老（宇部福原家）	11,314	3	4	1
11	本因幡日之助	寄組	5,425	5	4	8
12	栗屋帯刀	寄組	4,915	5	5	2
13	本山内九郎兵衛	寄組	4,705	1	1	8
14	本益田伊豆	寄組	4,096	0	7	2
15	清水清太郎	寄組	3,710	8	0	3
16	梨羽佐太郎	寄組	3,218	0	5	3
17	志道安房	寄組	3,000			
18	本柳沢黙後	寄組	2,683	4	5	5
19	本桂主殿	寄組	2,319	4	2	7
②	兒玉主税	寄組	2,243	7	9	
21	榎本美作	寄組	2,059	2	1	8
22	井原豊前	寄組	2,002	4	6	8
23	国司主税	寄組	1,950	1	0	3
24	本宍戸備中	寄組	1,500	9	0	5
25	内藤与三右衛門	寄組	1,202	4	5	4
26	赤川仁右衛門	寄組	1,200	1	9	3
27	本桂衛士	寄組	1,113	1	6	
28	福原相模	寄組	1,053	4	6	2
29	榎本来馬	寄組	1,036	0	1	
⑩	繁沢石見	寄組	1,024	6	1	6

大野毛利氏と関係深い諸家略系



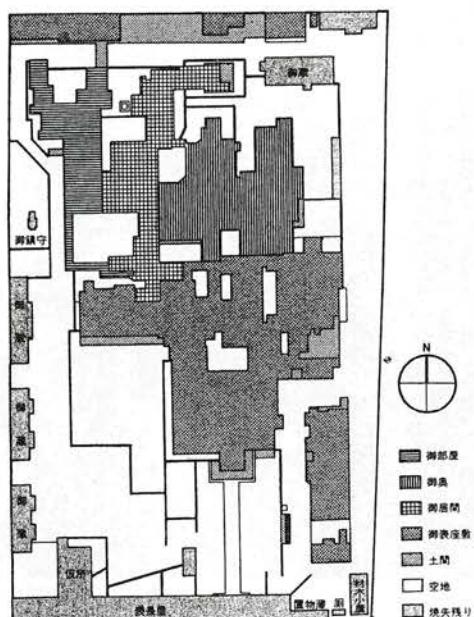
嘉永堀内・平安古町割図〔「萩御城下絵図」〕

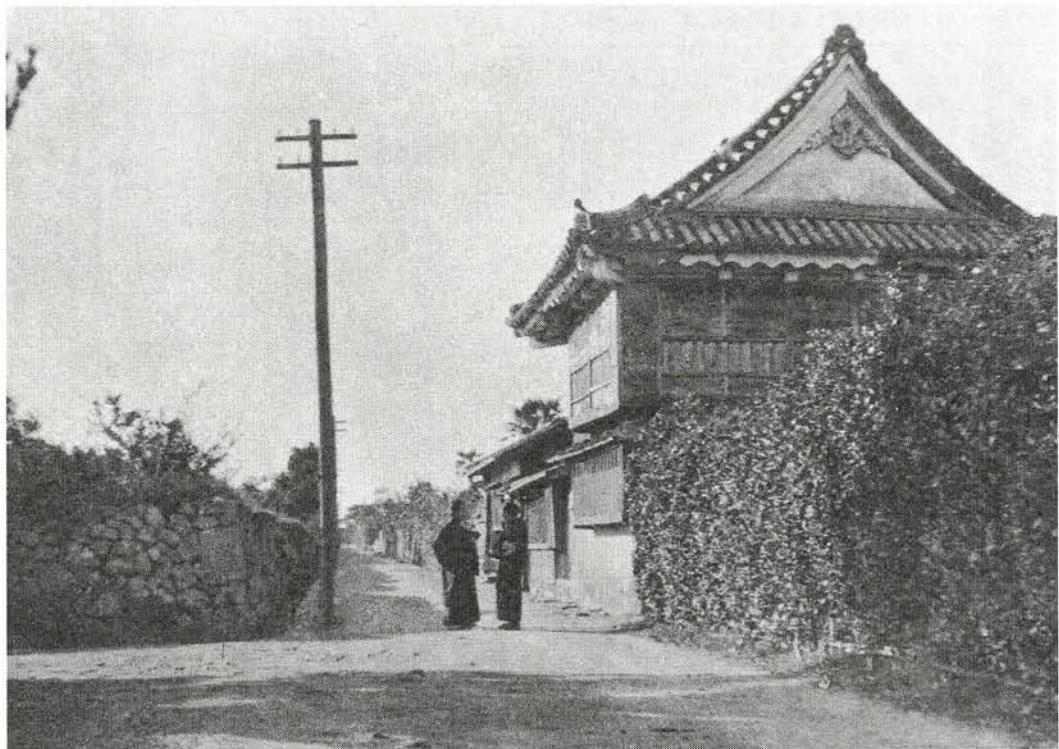
(嘉永4年(1849)による)

注) 矢印の向きは屋敷名の書かれた方向を示す

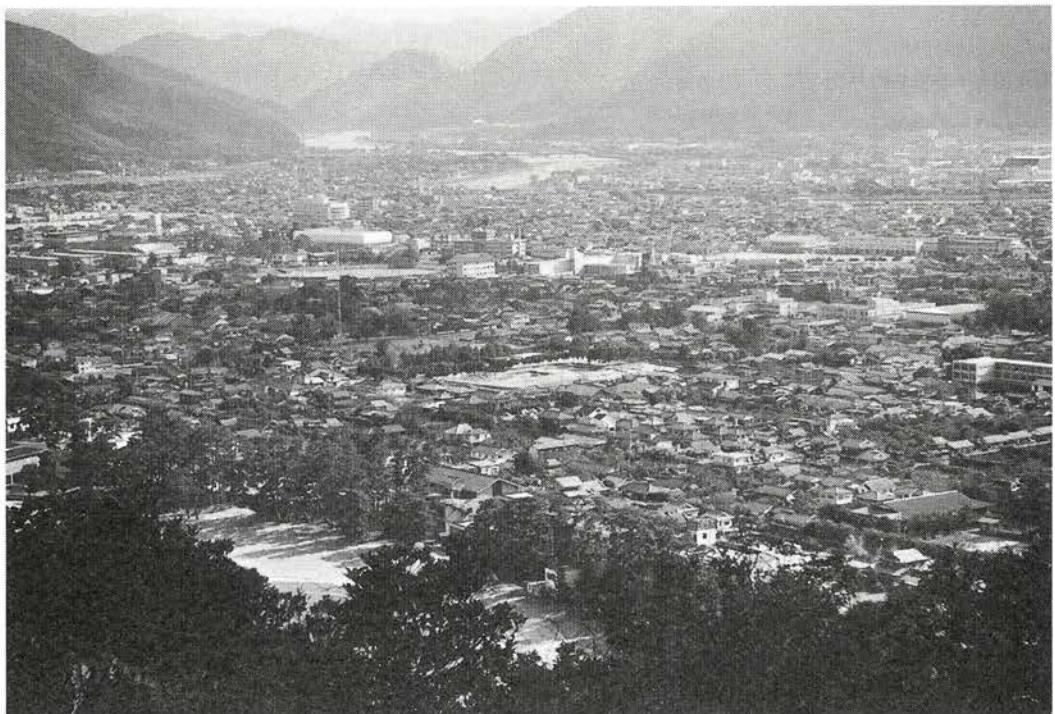


旧福原家萩上屋敷絵図〔加藤裕原図〕



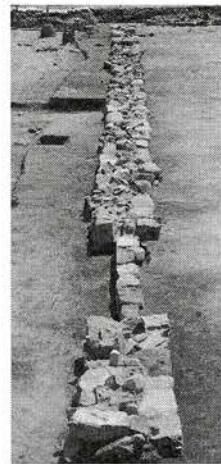
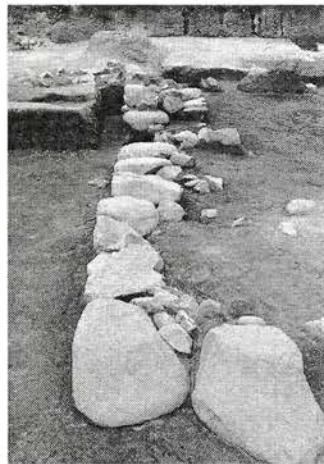
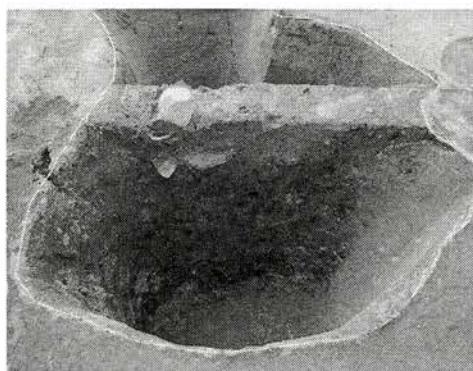


古写真 大野毛利家角矢倉（萩市郷土博物館蔵）



萩城跡詰丸辰巳矢倉跡から市街地をのぞむ
(中央が発掘調査地)

図版 5





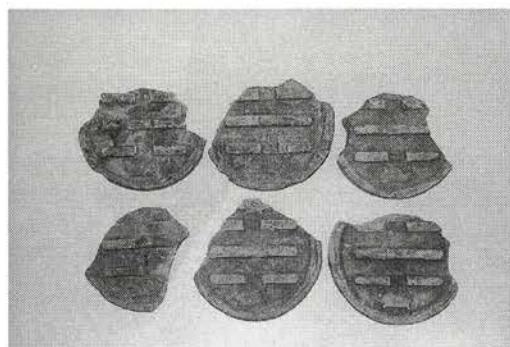
I 地区 SK 01出土



III 地区 SK 34出土



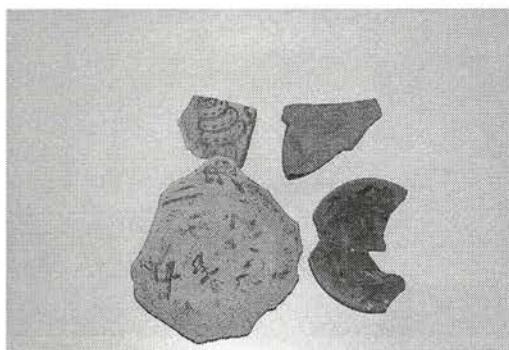
輸入陶磁器



I 地区 火災処理土坑内出土



墨書土器（1）



墨書土器（2）



I 地区 SK 02出土硯

阿武町長沢大堤の改修工事とフネドブガイ *Anemina arcaeformis* の生息

*増野和幸

山口県阿武町福賀にある灌漑用ため池長沢大堤が、2001年8月に水が抜かれ、地域の方を中心 「ぬしとあえる夏」と銘打って、30年ほど前に放流された鯉のつかみ取りのイベントが企画された。満々と水をたたえた大堤の水が抜かれることになったのは、堤の東側土手基盤が弱体化し、降雨により崩壊し被害が生じる恐れが出たために、改修工事が行われることになったことによる。

イベントが行われる夏休み最後の日曜日（8月26日）、町内外から大勢の人が集まり、底の見える堤に入って鯉やブラックバスを手網や素手でとったりして楽しんだ。

一方、堤の改修工事の必要性は当然のことであるが、この堤にはフネドブガイ *Anemina arcaeformis* という大形淡水性二枚貝が生息している。この貝は、殻長約13cm、殻高約8cm、殻幅約6cm。中国華北から朝鮮半島、シベリアに広く分布する。在来種のドブガイとは、殻の形や大きさ、殻の色など形態的に大きく異なる。殻の特徴は横長の橢円形、薄質で脆い。左右両殻はよく膨らみ、殻頂は背線のほぼ中央にあって、背線より高く膨らむ点で、在来種と区別できる。また、グロキジュウム幼生の殻の腹縁が三角形になっている部分に大きい鉤を欠く点で異なる。1991年、波部・増野によって日本で初記録された。その後、福井県三方湖の標本（黒田コレクション：1961年採集）が発見され、第2の産地として報告されたが、現在生息の確認はされていない。なぜ、長沢大堤にのみ本種が生息するのか、その理由や移入経路等は不明である。今回水が抜かれ、約2年間の大工事が行われるにあたり、フネドブガイの生態調査を実施したいと考え、同地の長沢大堤管理組合および工事施工管理者の山口県萩農林事務所の協力を得ながら、現在調査を実施中である。

調査途上の現在、フネドブガイの生息個体数が、発見当時の1990年および、その後晴天続きにより湖底が露出した1994年夏の生息状況と比較して、激減していることが明らかとなった。10年近く前は、湖底を20mも歩けばバケツ2杯ほどの個体が集められたが、今回は多くの調査員の手をもってしても20数個体の生貝を確認するにとどまっている。死殻も予想以上に少ない。明らかにこの10年ほどの間に、何らかの原因で激減したと考えられる。

激減の理由は十分検討しなければならないが、フネドブガイの幼生が他の底性生活をする魚類の生息に強く依存していることから、そうした小形魚類の生息状況と関係しているかもしれない。堤内には異常なほどのブラックバス *Micropterus salmoides* が見られる反面、ドンコ

Odontobutis obscura をはじめとする淡水性小形魚類が非常に少ない。改修工事の開始を前に、残された一部のプール水域内の調査に希望をかけている。

詳細な調査の報告は別に行うこととし、今回は工事を前に行われたイベントの様子、ありし日の堤の姿を記録にとどめる目的で稿を草した。多くの関係者の協力があったことを記して感謝の意を表す。

参考文献

- 波部忠重・増野和幸（1991）：フネドブガイ山口県に産す。ちりばたん。22（1）。
山下幸一・波部忠重（1993）：若狭三方湖からのフネドブガイ。ちりばたん。25（1）。



写真1 満水の長沢大堤（西側農道より遠望）

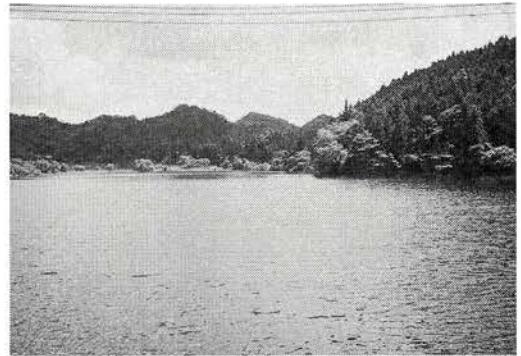


写真2 満水の長沢大堤（東側農道より遠望）



写真3 50%水が抜かれた長沢大堤



写真4 フネドブガイ調査中



写真5 生息が確認されたフネドブガイ



写真6 泥にもぐっているフネドブガイ

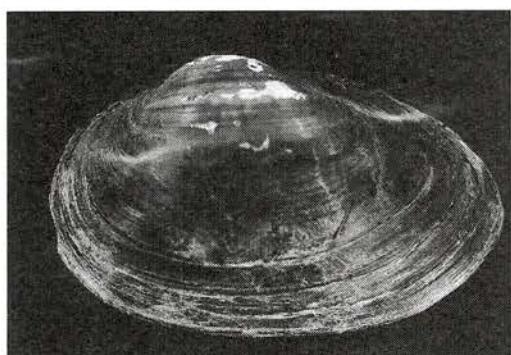


写真7 フネドブガイ (殻側面)

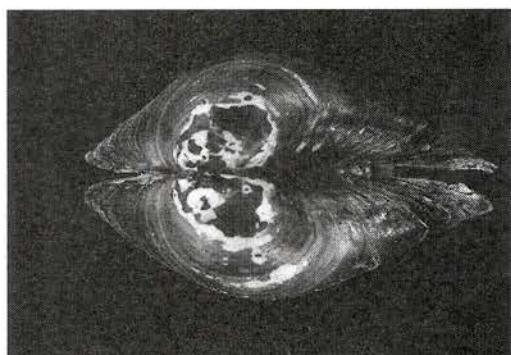


写真8 フネドブガイ (殻腹面)



写真9 魚の捕獲



写真10 捕獲された鯉



写真11 捕獲されたブラックバス



写真12 イベント数日後、酸欠で死んだ魚

萩市笠山における 開花していた植物の季節変移

*伊藤 靖子 **弘長純忠

はじめに

萩市笠山は、標高112.2mの玄武岩質安山岩の陸繫島で、海に突き出し、沖合を流れる対馬暖流の影響を受けるため、市内中心部より温暖な環境であり、これまでの植生調査（吉松、1989）から、当地を分布の北限とする暖地性植物が多数見られることがわかっている。また、間隙の多い溶岩台地であることから、風穴群が多数存在し、そのまわりでは湿気の多い冷たい空気がとどまり、局地的に寒地性植物が自生する素因となっている。このように、笠山は暖地性植物と寒地性植物がごく接近して自生する稀有の場所として、植物地理学上注目されてきた。

ところが、近年、北浦地方における「松くい虫」の被害の増加は、笠山にも及び、海岸周辺で防風林及び魚付き保安林として機能していた松が枯死し、その自生面積を減らしている。また、それら枯死した松の伐採により、背後に控えていた常緑樹への風当たりが強くなり、枝葉を落としている。そこで、高木・亜高木層が失われた地点では、日当たりがよくなり、1年生草本が繁茂し、とくに帰化植物の侵入が著しい。笠山は北長門海岸国定公園の指定を受けており、今後も大幅な開発が行われる可能性は少ないと考えられるため、ここ数年の植物相の変化は大きい。

ところで、萩市内において、ある地点で見られる植物の1年の変化について、調査・研究されていても、あまり公表はなされていない。そこで、今回の調査では、笠山の道路を4つに分け、それぞれ1年を通して開花していた植物を観察・記録することで、笠山における開花植物の変化を追ってみることとした。これにより、ある植物の開花期の目安ができ、また、探訪時期と探訪ルートの策定が容易となる。さらに今後継続していくことで、変わりつつある笠山の植物相の変遷を追うための基礎資料となることが期待される。

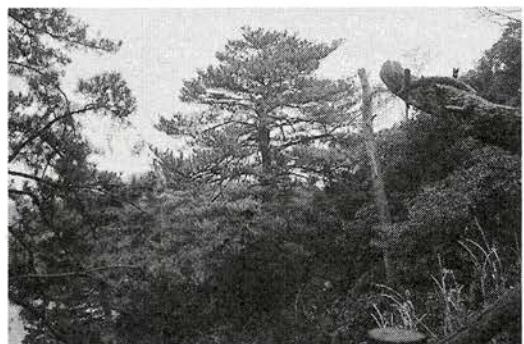


写真1 萩市笠山における松枯れの様子 (2001.1.19)

調査期間と方法

この調査では、2000（平成12）年4月から2001（平成13）年3月の12ヶ月間、毎月1回、図1で示した4ルートを歩き、その時に開花していた植物について、植物名を筆記した。あわせて、いくつかの種については写真撮影も行った。また、どうしても名前のわからないものについては採集し、持ち帰って図鑑で調べ、標本を作製した。使用した図鑑は、『日本の野生生物』草本I・II・III、木本I・II（平凡社）および、『原色日本植物図鑑』上・中・下、木本編I・II（保育社）、『日本帰化植物写真図鑑』（全国農村教育会）などである。

4つのルートについては、A) 南西（越ヶ浜保育園上～元笠山観光ホテル前～吉村造船所～西側自動車道～虎ヶ崎：舗装道路、一部未舗装）、B) 北東（虎ヶ崎～石切場跡：未舗装道路）、C) 中央（虎ヶ崎～ツバキ群生林～笠山麓：未舗装道路）、D) 頂上（笠山山頂部：舗装道路）である（図1）。

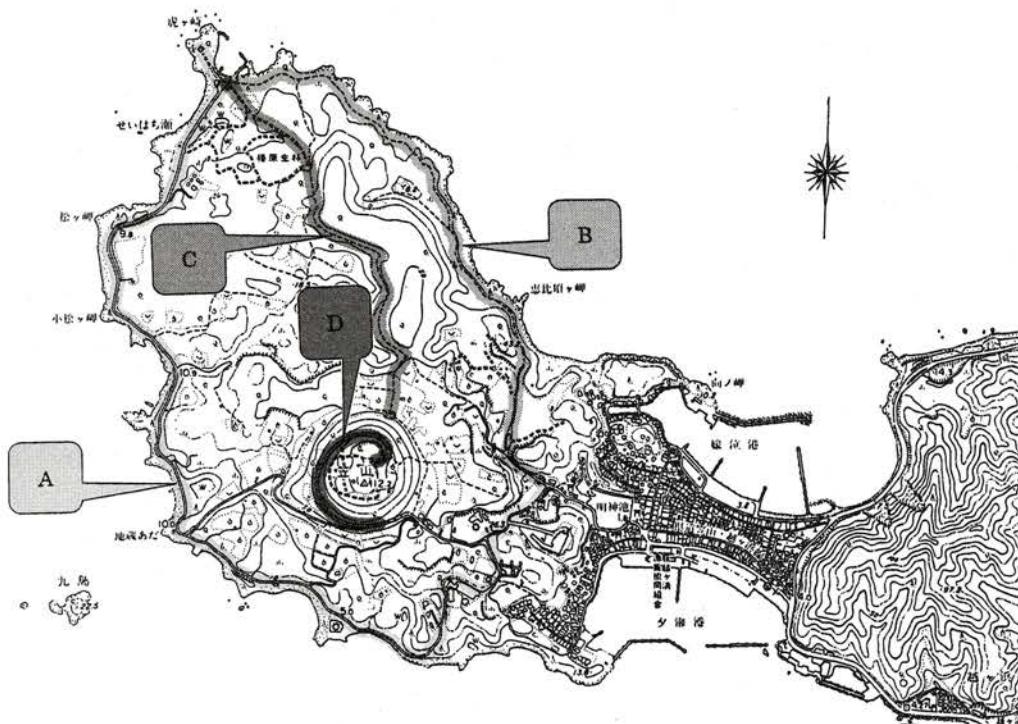


図1 調査ルート「萩市全図」(1/10,000) を50%縮小した。

結果と考察

月1回の調査日と開花を観察した植物数は、帰化種と在来種に分け、グラフを作成した（グラフ1）。グラフからは、開花する植物数のピークが初夏と秋の2回あることがわかる。1月に最も少なくなり、それ以降、春に向けて花を咲かせる植物が増加する。帰化種と在来種の割合については、全体の種数が減少すると帰化種の占める割合が大きくなるが、開花していた植物種数の過半数を占めた月はなかった。

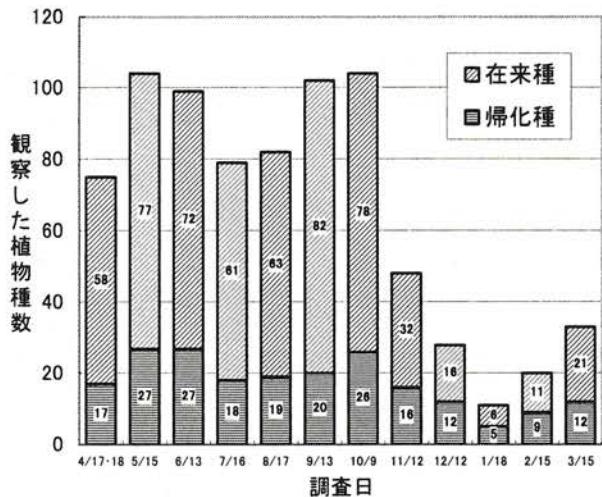
次に、実際にどのような植物の開花を観察し、それはいつだったのかをまとめたものが表1である。全部で335種類の開花を観察し、各コースでの見られた月を記した。一ヶ月しか観察されないものもあれば、のべ10ヶ月にわたって開花していたものもある。開花植物が最も観察されたのは、舗装道路である南西側コースであった。次いで、舗装されていない自然歩道の一部である北東側のコースで、どちらも200種以上観察された。特に南西側コースについては、帰化種の占める割合が大きく、観察された帰化植物の9割以上が南西側コースにて見られる。これは、南西側コースの人・車の往来が多いことが要因の一つであろう。

吉松（1989）に掲げられている種数は526種で、うち羊歯植物は68種であり、今回の観察の対象とした花を咲かせる高等植物は、458種となる。とすると、今回観察された335種という数は、かなり少ない。これは、観察の間隔が約1ヶ月と広いこと、また、道路脇を観察していたことから、風穴群の最も寒地性植物が多く見られる個所に入らなかったこと、樹木の花について、見過ごしているものもあったことが考えられる。

今回の調査では、調査日に開花していた種について、ルート毎に記録していくが、途中から約200mのメッシュを決め、その中で見られた開花植物を記録する方法に変更した。今後は、観察の間隔を狭め、メッシュ毎の調査を行うことで、今回の調査を補完し、また、継続して行うことで地点毎の植物相の変化を追っていきたい。

引用文献

吉松 茂, 1989 : 萩市笠山の植物目録. 74pp. +口絵1p. +挿し図1p., 萩市郷土博物館研究報告第3号.



グラフ1 2000年4月から2001年3月における開花を観察した植物数の変動



写真2 ヒトリシズカ（センリョウ科）（2000.4.18）
Aコースで1箇所群生している。



写真3 ハマエンドウ（マメ科）（2000.5.16）
笠山の海岸において見られる。



写真4 シャリンバイ（バラ科）（2000.5.16）
Bコースの海岸の岩礁で観察したが、Aコース
においても岸壁まで近づくと見られる。

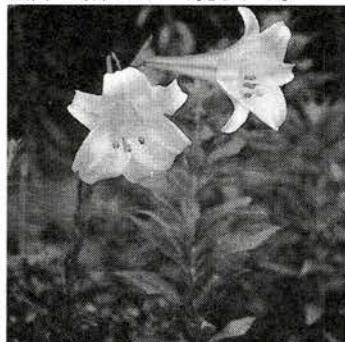


写真5 タカサゴユリ（ユリ科）（2000.8.18）
Aコースの舗装道路のそばで観察した。

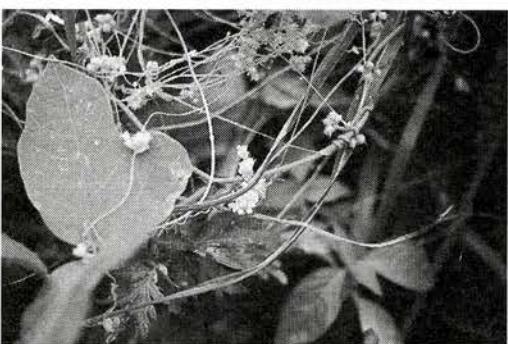


写真6 アメリカネナシカズラ（ヒルガオ科）（2000.8.18）
海岸近くや山中の荒れた畑作地において観察
された。

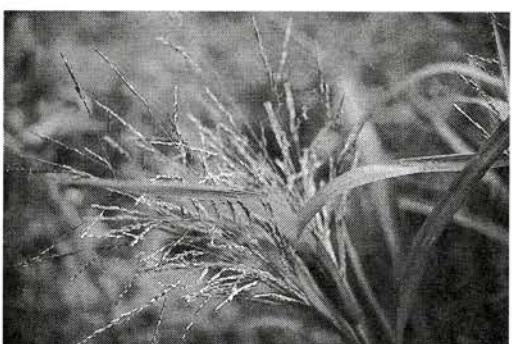


写真7 オオクサキビ（イネ科）（2000.10.10）
Aコースの新しい造成地において観察された。



写真8 ダルマギク（キク科）（2000.10.10）
Bコースでのみ観察された。海岸の群落地の
一つは枯死した松を伐採し、放置してあるため、
観察しにくくなつた。



写真9 シロバナセンダングサ（キク科）（2000.10.10）
Aコースの畑作地への導入路に1株のみ見ら
れた。

表1. 開花を観察した植物名と各コースにおける開花を観察した月

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
1	イネ科	アオカモジグサ	<i>Agropyron ciliare</i> (Trin.) Franch. var. <i>minus</i> (Miq.) Ohwi				5
2	イネ科	カモジグサ	<i>Agropyron tsukushense</i> (Honda) Ohwi var. <i>transiens</i> (Hack.) Ohwi	5-6	5	5	5
3	*イネ科	クロコスカグサ	<i>Agrostis nigra</i> With.	10			
4	*イネ科	コヌカグサ	<i>Agrostis alba</i> L.	5			
5	イネ科	コブナグサ	<i>Arthraxon hispidus</i> (Thunb.) Makino	10	10		
6	*イネ科	カラスマギ	<i>Avena fatua</i> L.				4-5
7	イネ科	ヤマカモジグサ	<i>Brachypodium sylvaticum</i> (Huds.) Beauv.	7			
8	*イネ科	コバンソウ	<i>Briza minor</i> L.	5			
9	*イネ科	ヒメコバンソウ	<i>Briza maxima</i> L.	5	5	5	
10	イネ科	スズメノチャヒキ	<i>Bromus japonicus</i> Thunb.	6			
11	イネ科	コメヒシバ	<i>Digitaria timorensis</i> (Kunth) Balansa	8			
12	イネ科	メヒシバ	<i>Digitaria ciliaris</i> (Retz.) Koel.	8-10	8	8-9	
13	イネ科	アブラススキ	<i>Eccioiopus cotulifer</i> (Thunb.) A. Camus	9-10			
14	イネ科	イヌビエ	<i>Echinochloa crus-galli</i> (L.) Beauv. var. <i>caudate</i> (Roshev.) Kitag.	8-10			
15	イネ科	オヒシバ	<i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn.	8-10	9-10		
16	イネ科	トボシガラ	<i>Festuca parviflora</i> Steud.	5	5	5	
17	*イネ科	ヒロハノウシノケグサ	<i>Festuca elatior</i> L.	5-6			5
18	イネ科	チガヤ	<i>Imperata cylindrica</i> (L.) Beauv.	5-6	5	5	
19	*イネ科	ネズミムギ	<i>Lolium multiflorum</i> Lam.	5			
20	イネ科	ササクサ	<i>Lophatherum gracile</i> Brongn.		9		
21	イネ科	ススキ	<i>Miscanthus sinensis</i> Anderss.	10-11	10	10	10
22	イネ科	チヂミザサ	<i>Oplismenus undulatifolius</i> (Arduino) Roemer et Schultes	10	9-11	9-10	10
23	*イネ科	オオクサキビ	<i>Panicum dichotomiflorum</i> Michx.	10			
24	*イネ科	キシユウスズメノヒエ	<i>Paspalum distichum</i> L.	7			
25	イネ科	スズメノヒエ	<i>Paspalum thunbergii</i> Kunth	9-10	9	9	
26	イネ科	チカラシバ	<i>Pennisetum alopecuroides</i> (L.) Spreng.	10			
27	イネ科	イチゴツナギ	<i>Poa sphondyloides</i> Trin.	5-6	5	5	5
28	イネ科	スズメノカタビラ	<i>Poa annua</i> L.	3-6	5-6	5-6	4
29	イネ科	ヒエガエリ	<i>Polypogon fugax</i> Steud.	5	5	5	
30	イネ科	エノコログサ	<i>Setaria viridis</i> (L.) Beauv.	9	9		
31	イネ科	キンエノコロ	<i>Setaria glauca</i> (L.) Beauv.	9-10	9-10		

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
32	イネ科	ハマエノコロ	<i>Setaria viridis</i> (L.) Beauv. var. <i>pachystachys</i> (Franch. et Savat.) Makino et Nemoto	7-9	6-7,9-10	7	
33	*イネ科	セイバンモロコシ	<i>Sorghum halepense</i> Pers.	7			
34	イネ科	ネズミノオ	<i>Sporobolus fertilis</i> (Steud.) W. Clayton	4,10	5		
35	イネ科	カニツリグサ	<i>Trisetum bifidum</i> (Thunb.) Ohwi	6			
36	カヤツリグサ科	アオスゲ	<i>Carex breviculmis</i> R. Br.				5
37	カヤツリグサ科	シオクグ	<i>Carex scabri folia</i> Steud.	5	5-7	5	
38	カヤツリグサ科	ナキリスゲ	<i>Carex lenta</i> D. Don	10			10
39	カヤツリグサ科	クグ	<i>Cyperus cyperoides</i> (L.) O. Kuntze	7-8			
40	サトイモ科	ナンゴクウラシマソウ	<i>Arisaema thunbergii</i> Blume subsp. <i>thunbergii</i>	4	5		
41	ツユクサ科	ツユクサ	<i>Commelina communis</i> L.	6-10	7,9-10	7,9-10	
42	ツユクサ科	ヤブミョウガ	<i>Pollia japonica</i> Thunb.			9	
43	*ツユクサ科	ノハカタカラクサ	<i>Tradescantia flumiensis</i> Vell.	5-7	5-7,9,11	6-7,9-11	
44	*ツユクサ科	ムラサキツユクサ	<i>Tradescantia reflexa</i> Ref.	6,8			
45	イグサ科	クサイ	<i>Juncus tenuis</i> Willden.	6	6	7	7
46	イグサ科	スズメノヤリ	<i>Luzula capitata</i> (Miq.) Miq.		4		4
47	ユリ科	ノビル	<i>Allium grayi</i> Regel	10			
48	ユリ科	ハマタマボウキ	<i>Asparagus kiusianus</i> Makino	5	5	5	
49	ユリ科	ウバユリ	<i>Cardiocrinum cordatum</i> (Thunb.) Makino	7	7	7	7
50	ユリ科	ユウスゲ	<i>Hemerocallis citrina</i> Baroni var. <i>vespertina</i> (Hara) M. Hotta	7	7	7	
51	*ユリ科	ハナニラ	<i>Ipheion uniflorum</i> Raf.	4			
52	ユリ科	コオニユリ	<i>Lilium leichtlinii</i> Hook. fil. var. <i>maximowiczii</i> (Regel) Baker	7	7	7	
53	*ユリ科	タカサゴユリ	<i>Lilium formosanum</i> Wall.	8,11			
54	ユリ科	ヤブラン	<i>Liriope platyphylla</i> Wang et Tang.	8-9	8-9	8-9	8-10
55	ユリ科	ジャノヒゲ	<i>Ophiopogon japonicus</i> (L. fil.) Ker-Gawl.			7	
56	ユリ科	ノシラン	<i>Ophiopogon jaburan</i> (Kunth) Lodd.			8	
57	ユリ科	オオナルコユリ	<i>Polygonatum macranthum</i> (Maxim.) Koidz.	5			5
58	ユリ科	ナルコユリ	<i>Polygonatum falcatum</i> A. Gray	5	5	5	5
59	ユリ科	サルトリイバラ	<i>Smilax china</i> L.	4	4		
60	*ヒガンバナ科	スイセン	<i>Narcissus tazetta</i> L. var. <i>chinensis</i> Roemer	12-3		2	12-2
61	*ヤマノイモ科	ナガイモ	<i>Dioscorea batatas</i> Decne.		8		
62	ヤマノイモ科	ヤマノイモ	<i>Dioscorea japonica</i> Thunb.	8	8	8	8

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
63	ヤマノイモ科	カエデドコロ	<i>Dioscorea quinqueloba</i> Thunb.	7・9	8・9	8・9	8
64	ヤマノイモ科	オニトコロ	<i>Dioscorea tokoro</i> Makino	7・8	7・8	7・8	8
65	* アヤメ科	ニワゼキショウ	<i>Sisyrinchium atlanticum</i> Bicknell	5・6	5・6	5・6	5
66	* アヤメ科	オオニワゼキショウ	<i>Sisyrinchium sp.</i>	5・7	5・6	5・6	
67	* アヤメ科	ヒメヒオウギズイセン	<i>Tritonia crocosmaeflora</i> Lemoine	7	7	7	7
68	ラン科	サイハイラン	<i>Cremastra appendiculata</i> (D. Don) Makino		6	6	
69	ラン科	ミヤマウズラ	<i>Goodyera schlechtendaliana</i> Reichb. fil.		9		
70	ドクダミ科	ドクダミ	<i>Houttuynia cordata</i> Thunb.	6	6		
71	コショウ科	フウトウカズラ	<i>Piper kadzura</i> (Chois.) Ohwi	6	6	6	
72	センリョウ科	ヒトリシズカ	<i>Chloranthus japonicus</i> Sieb.	4			
73	カバノキ科	オオバヤシャブシ	<i>Alnus sieboldiana</i> Matsum.	3		3	3
74	ブナ科	シイノキ	<i>Castanopsis sp.</i>		5		
75	ニレ科	エノキ	<i>Celtis sinensis</i> Pers. var. <i>japonica</i> (Planch.) Nakai	4	4		
76	クワ科	ヨウゾ	<i>Broussonetia kazinoki</i> × <i>Broussonetia papyrifera</i>	4	6		
77	クワ科	カジノキ	<i>Broussonetia papyrifera</i> (L.) Vent.	4			
78	クワ科	カナムグラ	<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	9・10	9・10	9・10	9・10
79	イラクサ科	オニヤブマオ	<i>Boehmeria holosericea</i> Blume	7・9	8・9		
80	イラクサ科	カラムシ	<i>Boehmeria nippononea</i> Koidz.	8・9	9	9	9
81	イラクサ科	メヤブマオ	<i>Boehmeria platanifolia</i> Franch. et Savat.	8			
82	イラクサ科	ミヤコミズ	<i>Pilea kiotensis</i> Ohwi			9・10	
83	イラクサ科	イラクサ	<i>Urtica thunbergiana</i> Sieb. et Zucc.		7		9・10
84	タデ科	ミズヒキ	<i>Antennorion filiforme</i> (Thunb.) et Vautier	8・10	8・10	7・11	8・10
85	タデ科	オオイヌタデ	<i>Persicaria lapathifolia</i> (L.) S. F. Gray	9・10	9		
86	タデ科	イヌタデ	<i>Persicaria longisetosa</i> (De Bruyn) Kitag.	6・9・12	9・11	10・11	
87	タデ科	イシミカワ	<i>Persicaria perfoliata</i> (L.) H. Gross	8・9			
88	タデ科	ママコノシリヌグイ	<i>Persicaria senticosa</i> (Franch. et Savat.) H. Gross	6・11	6・10	7・10	
89	* タデ科	ツルドクダミ	<i>Pleuropteris multiflorus</i> Turcz.	10			
90	タデ科	ミチャナギ	<i>Polygonum aviculare</i> L.	9・10			
91	タデ科	アキノミチャナギ	<i>Polygonum polyneuron</i> Franch. et Savat.	8	8	8	
92	タデ科	スイバ	<i>Rumex acetosa</i> L.	4・5	5	5	5
93	* タデ科	ヒメスイバ	<i>Rumex acetosella</i> L.	6			
94	* タデ科	アレチギシギン	<i>Rumex conglomerates</i> Murr.	6			

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
95	タデ科	ギシギシ	<i>Rumex japonicus</i> Houtt.	5-6	5-6	5-6	4
96	アカザ科	ホソバノハマアカザ	<i>Atriplex gmelinii</i> C. A. Meyer	6	6,9-10		
97	* アカザ科	ホコガタアカザ	<i>Atriplex hastata</i> L.	7	7-8		
98	* アカザ科	アカザ	<i>Chenopodium album</i> L. var. <i>centrorubrum</i> Makino	10			
99	* アカザ科	ケアリタソウ	<i>Chenopodium ambrosioides</i> L.	10	10		
100	ヒユ科	ヒカゲイノコズチ	<i>Achyranthes bidentata</i> Blume var. <i>japonica</i> Miq.	9-10	10	9-10	10
101	ヒユ科	ヒナタイノコズチ	<i>Achyranthes bidentata</i> Blume var. <i>tomentosa</i> (Honda) Hara	9-10	9		
102	* オシロイバナ科	オシロイバナ	<i>Mirabilis jalapa</i> L.	7-9,11			
103	* ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ	<i>Phytolacca Americana</i> L.	6-9	6-9	7-8	8
104	ツルナ科	ツルナ	<i>Tetragonia tetragonoides</i> (Pall.) O. Kuntze	6-9	8,10,3	7	
105	スペリヒユ科	スペリヒユ	<i>Portulaca oleracea</i> L.	8			
106	* ナデシコ科	オランダミミナグサ	<i>Cerastium glomeratum</i> Thuill.	4-5,3	4-5,3	4-5,2-3	4-5,2-3
107	ナデシコ科	ハマナデシコ	<i>Dianthus japonicus</i> Thunb.	7-12			
108	ナデシコ科	カワラナデシコ	<i>Dianthus superbus</i> L. var. <i>longicalycinus</i> (Maxim.) Williams	4,7-8,10-12,2	7-8,11-12	8,11	12
109	ナデシコ科	ウシハコベ	<i>Myosoton aquaticum</i> (L.) Moench	4-6,2-3	5,3	5-6,11,2	5-6
110	ナデシコ科	ツメクサ	<i>Sagina japonica</i> (Sw.) Ohwi	6			
111	ナデシコ科	ハマツメクサ	<i>Sagina maxima</i> A. Gray	4-6	4-7	5	
112	ナデシコ科	マンテマ	<i>Silene gallica</i> L. var. <i>quinquevulnera</i> (L.) Rohrb.	6			
113	* ナデシコ科	コハコベ	<i>Stellaria media</i> Villars	3	3	1-3	1-3
114	ナデシコ科	ミドリハコベ	<i>Stellaria neglecta</i> Weihe	2-3	3		
115	ナデシコ科	ハコベ	<i>Stellaria sp.</i>	4-5	4-7	4-7	4-5
116	キンポウゲ科	ボタンヅル	<i>Clematis apiifolia</i> DC.	8-9		8	
117	キンポウゲ科	センニンソウ	<i>Clematis terniflora</i> DC.	8-10	8-10	8-9	8
118	キンポウゲ科	ウマノアシガタ	<i>Ranunculus japonicus</i> Thunb.		5		
119	* キンポウゲ科	トゲミノキツネノボタン	<i>Ranunculus muricatus</i> L.	4-6			
120	キンポウゲ科	キツネノボタン	<i>Ranunculus silerifolius</i> Lev.	5,7	5,7		
121	キンポウゲ科	ヒメウズ	<i>Semiaquilegia adoxoides</i> (DC.) Makino	4,3	4-5	2-3	1-3
122	キンポウゲ科	アキカラマツ	<i>Thalictrum minus</i> L. var. <i>hypoleucum</i> (Sieb. et Zucc.) Miq.				9-11
123	アケビ科	アケビ	<i>Akebia quinata</i> (Thunb.) Decaisne	4	4	4	
124	メギ科	ナンテン	<i>Nandina domestica</i> Thunb.	6			
125	ツヅラフジ科	アオツヅラフジ	<i>Cocculus trilobus</i> (Thunb.) DC.	7,8	7-8	8	
126	ツヅラフジ科	オオツヅラフジ	<i>Sinomenium acutum</i> (Thunb.) Reld. et Wils.	7-8	8		
127	ツヅラフジ科	ハスノハカズラ	<i>Stephania japonica</i> (Thunb.) Miers	7-8	7-8	8	8

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
128	クスノキ科	ヤブニッケイ	<i>Cinnamomum japonicum</i> Sieb. ex Nakai	6	6	6	
129	クスノキ科	ハマビワ	<i>Litsea japonica</i> (Thunb.) Juss.	9			
130	ケシ科	ツクシキケマン	<i>Corydalis heterocarpa</i> Sieb. et Zucc.	4·6	4·7	5·6	
131	ケシ科	ムラサキケマン	<i>Corydalis incisa</i> (Thunb.) Pers.	4	4·5	4·5	4·5
132	アブラナ科	ハマハタザオ	<i>Arabis stellaris</i> DC. var. <i>japonica</i> (A. Gray) Fr. Schm.	4·5	4·5		
133	* アブラナ科	カラシナ	<i>Brassica juncea</i> Czern.	4·5	4		4
134	アブラナ科	ナズナ	<i>Capsella bursa-pastoris</i> Medicus			4·5	5
135	アブラナ科	タネツケバナ	<i>Cardamine flexuosa</i> With.	4·3	4·3	4·2·3	1·3
136	* アブラナ科	ミチタネツケバナ	<i>Cardamine hirsute</i> L.	3	2·3	3	
137	アブラナ科	ジャニンジン	<i>Cardamine impatiens</i> L.	4·5	4·5	5	
138	* アブラナ科	マメグンバイナズナ	<i>Lepidium virginicum</i> L.	5·7·9·10	5·7·9·10		
139	アブラナ科	ハマダイコン	<i>Raphanus sativus</i> L. var. <i>raphanistrooides</i> Makino	4·7	4·6·3		
140	アブラナ科	イヌガラシ	<i>Rorippa indica</i> (L.) Hiern			5·10	
141	ベンケイソウ科	コモチマンネングサ	<i>Sedum bulbiferum</i> Makino	6	6		
142	ベンケイソウ科	マルバマンネングサ	<i>Sedum makinoi</i> Maxim.	6·7	6·7	6	
143	ベンケイソウ科	タイトゴメ	<i>Sedum uniflorum</i> Hook. et Arnott subsp. <i>Oryzifolium</i> (Makino) H. Ohba	5·6	5·7	6	
144	ベンケイソウ科	メノマンネングサ	<i>Sedum uniflorum</i> Hook. et Arnott subsp. <i>Japonicum</i> (Sieb. ex Miq.) H. Ohba	6			
145	ユキノシタ科	ネコノメソウ	<i>Chrysosplenium grayanum</i> Maxim.		3	4·3	
146	ユキノシタ科	ヤマネコノメソウ	<i>Chrysosplenium japonicum</i> (Maxim.) Makino		4·5	5	
147	ユキノシタ科	ウツギ	<i>Deutzia crenata</i> Sieb. et Zucc.	6	6		
148	ユキノシタ科	ヤブサンザシ	<i>Ribes fasciculatum</i> Sieb. et Zucc.	4	4		
149	トベラ科	トベラ	<i>Pittosporum tobira</i> (Thunb. ex Murray) Aiton	5	5	5	
150	バラ科	キンミズヒキ	<i>Agrimonias pilosa</i> Ledeb. var. <i>japonica</i> (Miq.) Nakai	7·10	7·10	8·10	
151	バラ科	ヘビイチゴ	<i>Duchesnea chrysanthia</i> (Zoll. et Mor.) Miq.	4·5	4	5·3	
152	バラ科	ダイコンソウ	<i>Geum japonicum</i> Thunb.		8·12	8·12	11·12
153	バラ科	カマツカ	<i>Pourthiae villosa</i> (Thunb.) Decne. var. <i>laevis</i> (Thunb.) Stapf.		5		
154	バラ科	オヘビイチゴ	<i>Potentilla sundaeica</i> (Bl.) O. Kuntze var. <i>robusta</i> (Franch. et Savat.) Kitag.	5·6	5·7	5	
155	バラ科	ヤマザクラ	<i>Prunus jamasakura</i> Sieb. ex Koidz.	4	4		
156	バラ科	シャリンバイ	<i>Rhaphiolepis indica</i> (L.) Lindl. ex Ker var. <i>umbellata</i> (Thunb. ex Murry) Ohashi		5		
157	バラ科	ノイバラ	<i>Rosa multiflora</i> Thunb.	5	5	5	5
158	バラ科	テリハノイバラ	<i>Rosa wichuriana</i> Crepin	6	6		
159	バラ科	フユイチゴ	<i>Rubus buergeri</i> Miq.	8			
160	バラ科	クサイチゴ	<i>Rubus hirsutus</i> Thunb.	4·3	4		4

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
161	バラ科	ナワシロイチゴ	<i>Rubus parvifolius</i> L.	5,10	5-6	5	
162	マメ科	ネムノキ	<i>Albizia julibrissin</i> Durazz.	7			
163	マメ科	ヤブマメ	<i>Amphicarpaea bracteata</i> (L.) Fernald subsp. <i>Edgeworthii</i> (Benth.) Ohashi		10		
164	* マメ科	ゲンゲ	<i>Astragalus sinicus</i> L.	4			
165	マメ科	ジャケツイバラ	<i>Caesalpinia decapetala</i> (Roth) Alst. var. <i>japonica</i> (Sieb. et Zucc.) Ohashi		5		
166	マメ科	ハマナタマメ	<i>Canavalia lineata</i> (Thunb.) DC.	7-9	7-8	7-8	
167	マメ科	ヌスピトハギ	<i>Desmodium podocarpum</i> DC. subsp. <i>Oxyphyllum</i> (DC.) Ohashi	9-10	8-9		
168	マメ科	ケヤブハギ	<i>Desmodium podocarpum</i> DC. subsp. <i>Fallax</i> (Schindl.) Ohashi	9			
169	マメ科	ツルマメ	<i>Glycine max</i> (L.) Merr. subsp. <i>Soja</i> (Sieb. et Zucc.) Ohashi	9			
170	マメ科	コマツナギ	<i>Indigofera pseudo-tinctoria</i> Matsum.	8-9			
171	マメ科	ハマエンドウ	<i>Lathyrus japonicus</i> Willd. subsp. <i>japonicus</i>	4-6	5-6	5	
172	マメ科	マルバハギ	<i>Lespedeza cyrtobotrya</i> Miq.				10
173	マメ科	メドハギ	<i>Lespedeza juncea</i> (L. fil.) Pers. var. <i>subsessilis</i> Miq.	9			
174	マメ科	ネコハギ	<i>Lespedeza pilosa</i> (Thunb.) Sieb. et Zucc.	9	9		
175	マメ科	ヤハズソウ	<i>Lespedeza stipulacea</i> Maxim.	9	9	9	
176	* マメ科	ウマゴヤシ	<i>Medicago polymorpha</i> L.	5	4		
177	マメ科	クズ	<i>Pueraria lobata</i> (Willd.) Ohwi	8-9	9	8-9	9
178	マメ科	タンキリマメ	<i>Rhynchosia volubilis</i> Lour.	7-10	7-10		
179	* マメ科	コメツブツメクサ	<i>Trifolium dubium</i> Sibth.	4-6	4-5		
180	* マメ科	シロツメクサ	<i>Trifolium repens</i> L.	5-7	5-6	5-6	
181	マメ科	カラスノエンドウ	<i>Vicia angustifolia</i> L.	4-5	4-5	4-5	4-5
182	マメ科	スズメノエンドウ	<i>Vicia hirsute</i> (L.) S. F. Gray		4		4
183	マメ科	カスマグサ	<i>Vicia tetrasperma</i> (L.) Schreb.				4
184	* フウロソウ科	アメリカフウロ	<i>Geranium carolinianum</i> L.	6			
185	フウロソウ科	ゲンノショウコ	<i>Geranium nepalense</i> Sweet subsp. <i>Thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) Hara	8-11		9	
186	* カタバミ科	ハナカタバミ	<i>Oxalis bowieana</i> Lodd.	10			4,12,2-3
187	カタバミ科	カタバミ	<i>Oxalis corniculata</i> L.	4-7,9-11	4-7,9-11	5-6,10	4,10
188	* カタバミ科	ムラサキカタバミ	<i>Oxalis corymbosa</i> DC.	5-7	6	5-6	5-6
189	ミカン科	ハマセンダン	<i>Euodia meliifolia</i> (Hance) Benth.	9	8-9	9	
190	ミカン科	カラスザンショウ	<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Sieb. et Zucc.	7-8			
191	ミカン科	フユザンショウ	<i>Zanthoxylum armatum</i> DC. var. <i>subtrifoliatum</i> (Franch.) Kitam.	8			
192	センダン科	センダン	<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	6		6	
193	トウダイグサ科	エノキグサ	<i>Acalypha australis</i> L.	9	8,10		

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
194	トウダイグサ科	イワタイグキ	<i>Euphorbia jolkinii</i> Boiss.	5	4-5	5	
195 *	トウダイグサ科	オオニシキソウ	<i>Euphorbia maculata</i> L.	8-9			
196 *	トウダイグサ科	コニシキソウ	<i>Euphorbia supine</i> Rafin.	8-9	8-9	8	
197	トウダイグサ科	アカメガシワ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb. ex Murray) Muell.	6-9	6-7		
198	トウダイグサ科	コミカンソウ	<i>Phyllanthus vrinaria</i> L.		9		
199	ウルシ科	ヌルデ	<i>Rhus javanica</i> L. var. <i>roxburghii</i> (DC.) Rehder et Wils.	9-10	9		
200	ウルシ科	ハゼノキ	<i>Rhus succedanea</i> L.	6			
201	ニシキギ科	マサキ	<i>Euonymus japonicus</i> Thunb.	7			
202	カエデ科	ウリハダカエデ	<i>Acer rufinerve</i> Sieb. et Zucc.	4			
203	ブドウ科	ノブドウ	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> (Maxim.) Trautv. var. <i>heterophylla</i> (Thunb.) Hara	7-9	7-9	8-9	8
204	ブドウ科	ヤブガラシ	<i>Cayratia japonica</i> (Thunb.) Gagn.	7-9		8	
205	ブドウ科	ツタ	<i>Parthenocissus tricuspidata</i> (Sieb. et Zucc.)	7			
206	ブドウ科	エビヅル	<i>Vitis thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	7-9	8	8	
207	ツバキ科	ヤブツバキ	<i>Camellia japonica</i> L.	4,11-3	11-3	11-3	
208	ツバキ科	ヒサカキ	<i>Eurya emarginata</i> (Thunb.) Makino	3			
209	ツバキ科	ハマヒサカキ	<i>Eurya japonica</i> Thunb.		11		
210	オトギリソウ科	オトギリソウ	<i>Hypericum erectum</i> Thunb.	7-8			
211	スミレ科	スミレ	<i>Viola mandshurica</i> W. Becker	4	4-6,10		
212	スミレ科	ナガバノタチツボスミレ	<i>Viola ovato-oblonga</i> (Miq.) Makino	4-5,2-3	4-5		4
213	グミ科	ナワシログミ	<i>Elaeagnus pungens</i> Thunb.	10	10		10
214	グミ科	アキグミ	<i>Elaeagnus umbellata</i> Thunb.	5	5		
215	アカバナ科	ミズタマソウ	<i>Circaeaa mollis</i> Sieb. et Zucc.		10	10	
216 *	アカバナ科	メマツヨイグサ	<i>Oenothera biennis</i> L.		10		
217 *	アカバナ科	アレチマツヨイグサ	<i>Oenothera parviflora</i> L.	6-9,11-12	8-9,11	8-9	
218 *	アカバナ科	マツヨイグサ	<i>Oenothera stricta</i> Ledeb. ex Link	4,6,8,10-12,2			
219	ウコギ科	タラノキ	<i>Aralis elata</i> (Miq.) Seemann		8		
220	ウコギ科	ヤツデ	<i>Fatsia japonica</i> (Thunb.) Decne. et Planch.	11			
221	ウコギ科	キヅタ	<i>Hedera rhombea</i> (Miq.) Bean	11		11	11
222	セリ科	ハマウド	<i>Angelica japonica</i> A. Gray	6	6		
223	セリ科	ハマゼリ	<i>Cnidium japonicum</i> Miq.	8-10	7-10		
224	セリ科	ミツバ	<i>Cryptotaenia japonica</i> Hassk.		7	7	7
225	セリ科	ヤブニンジン	<i>Osmorrhiza aristata</i> (Thunb.) Rydb.	4	4-5	4-5	
226	セリ科	ヤブジラミ	<i>Torilis japonica</i> (Houtt.) DC.	5-6	5-6	5	5

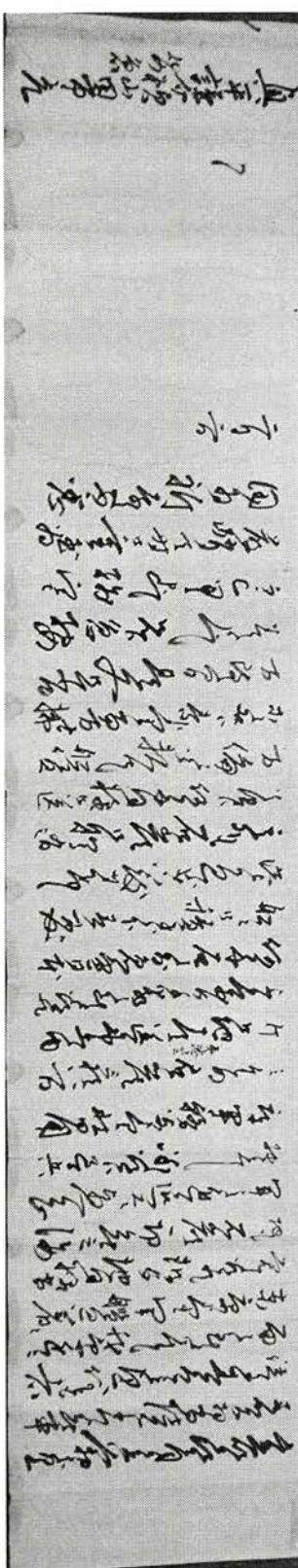
	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
227	セリ科	オヤブジラミ	<i>Torilis scabra</i> (Thunb.) DC.	7	7		
228	ミズキ科	アオキ	<i>Aucuba japonica</i> Thunb.		4	3	
229	ミズキ科	ミズキ	<i>Swida controversa</i> (Hemsl.) Sojak	6	6		
230	サクラソウ科	コナスピ	<i>Lysimachia japonica</i> Thunb.	6	6	5-6	
231	サクラソウ科	ハマボッス	<i>Lysimachia mauritiana</i> Lam.	5-7,10	5-7,10	5-7,10	
232	モクセイ科	ネズミモチ	<i>Ligustrum japonicum</i> Thumb.	6	6	6	
233	リンドウ科	フデリンドウ	<i>Gentiana zollingeri</i> Fawcett		4		
234	キヨウチクトウ科	ティカカズラ	<i>Trachelospermum asiaticum</i> (Sieb. et Zucc.) Nakai	5-6	6	6	
235	*キヨウチクトウ科	ツルニチニチソウ	<i>Vinca major</i> L.	12,2-3	12-1		
236	ガガイモ科	コイケマ	<i>Cynanchum wilfordii</i> (Maxim.) Hemsl.		6		
237	ガガイモ科	ガガイモ	<i>Metaplexis japonica</i> (Thunb.) Makino	8-9			
238	ヒルガオ科	ヒルガオ	<i>Calystegia japonica</i> Choisy	6-8			
239	ヒルガオ科	ハマヒルガオ	<i>Calystegia soldanella</i> (L.) Roem. et Schult.	5-6	5-6	5	
240	ヒルガオ科	ネナシカズラ	<i>Cuscuta japonica</i> Choisy	10			
241	*ヒルガオ科	アメリカナシカズラ	<i>Cuscuta pentagona</i> Engelm.	8-10	8-9	8-9	
242	*ヒルガオ科	マルバルコウ	<i>Ipomoea coccinea</i> L.	9,11			8,11
243	ムラサキ科	ホタルカズラ	<i>Lithospermum zollingeri</i> DC.				5
244	ムラサキ科	スナビキソウ	<i>Messerschmidia sibirica</i> L.		6		
245	ムラサキ科	キュウリグサ	<i>Trigonotis peduncularis</i> (Trevir.) Benth.	4-6,3	4-5	4-5,3	4-5,3
246	クマツヅラ科	クサギ	<i>Clerodendrum trichotomum</i> Thunb.	8-9,11	8,11	8	8-9
247	クマツヅラ科	ハマクサギ	<i>Premna microphylla</i> Turcz.		6	6	
248	クマツヅラ科	ハマゴウ	<i>Vitex rotundifolia</i> L. fil.	7-9	7-9	7-9	
249	シソ科	カワミドリ	<i>Agastache rugosa</i> (Fisch. et Mey.) O. Kuntze	8-11	8-11		
250	シソ科	キランソウ	<i>Ajuga decumbens</i> Thunb.	4		4-5	4-5
251	シソ科	トウバナ	<i>Clinopodium gracile</i> (Benth.) O. Kuntze		9-10	5-6,9-10	5
252	シソ科	カキドオシ	<i>Glechoma hederacea</i> L. subsp. <i>Grandis</i> (A. Gray) Hara	4-5	4	4-5	
253	シソ科	オドリコソウ	<i>Lamium album</i> L. var. <i>barbatum</i> (Sieb. et Zucc.) Franch. et Savat.	4	4-5		
254	シソ科	ホトケノザ	<i>Lamium amplexicaule</i> L.	4,3		5,2	2-3
255	*シソ科	ヒメオドリコソウ	<i>Lamium purpureum</i> L.	4,2-3	4-5,3	4-5,1-3	5,1-3
256	シソ科	メハジキ	<i>Leonurus sibiricus</i> L.	9-10			
257	シソ科	イヌコウジュ	<i>Mosla punctulata</i> (J. F. Gmel.) Nakai	9-10	10		
258	シソ科	レモンエゴマ	<i>Perilla frutescens</i> (L.) Britton var. <i>citriodora</i> (Makino) Ohwi	10			
259	シソ科	ヤマハッカ	<i>Rabdosia inflexa</i> (Thunb.) Hara	10			10

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
260	ナス科	クコ	<i>Lycium chinense</i> Miller	7	9-10	10	10
261	ナス科	ヒヨドリジヨウゴ	<i>Solanum lyratum</i> Thunb.	9	8-9		
262	* ナス科	イヌホオズキ	<i>Solanum nigrum</i> L.	6,9-11	9-10	9-10	
263	* ゴマノハグサ科	マツバウンラン	<i>Linaria Canadensis</i> Dum.	5		5	
264	ゴマノハグサ科	(ムラサキ)サギゴケ	<i>Mazus miquelianus</i> Makino	6			
265	ゴマノハグサ科	トキワハゼ	<i>Mazus pumilus</i> (Burm. fil.) van Steenis	7,12	6-7,12	6-7,12	
266	* ゴマノハグサ科	タチイヌノフグリ	<i>Veronica arvensis</i> L.	5	4-5	5	4
267	* ゴマノハグサ科	フラサバソウ	<i>Veronica hederifolia</i> L.	4,3	4	4,3	3
268	* ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ	<i>Veronica persica</i> Poir.	4-6,1-3	4-5,3	4-5,2-3	5,2-3
269	キツネノマゴ科	キツネノマゴ	<i>Justicia procumbens</i> L.	9-11		9-11	10
270	オオバコ科	オオバコ	<i>Plantago asiatica</i> L.	5-7,9-10	5,9-10	10	
271	* オオバコ科	ツボミオオバコ	<i>Plantago virginica</i> L.		5-6	5-6	
272	アカネ科	キクムグラ	<i>Galium kikumugura</i> Ohwi	7	5,7	7	
273	アカネ科	ヤマムグラ	<i>Galium pogonanthum</i> Franch. et Savat.		5-6		
274	アカネ科	ヤエムグラ	<i>Galium spurium</i> L. var. <i>echinospermon</i> (Wallr.) Hayek	4-5	5	5	5
275	アカネ科	ヨツバムグラ	<i>Galium trachyspermum</i> A. Gray				5
276	アカネ科	ソナレムグラ	<i>Hedysotis biflora</i> (L.) Lam. var. <i>parvifolia</i> Hook. et Arn.		8		
277	アカネ科	ヘクソカズラ	<i>Paederia scandens</i> (Lour.) Merrill	7-9	7-9	8	8
278	アカネ科	アカネ	<i>Rubia argyi</i> (Lev.) Hara			9-10	10
279	アカネ科	クルマバアカネ	<i>Rubia cordifolia</i> L. var. <i>pratensis</i> Maxim.	9-10	9-10	9-10	10
280	スイカズラ科	スイカズラ	<i>Lonicera japonica</i> Thunb.	6	6	6	
281	スイカズラ科	キンギンボク	<i>Lonicera morrowii</i> A. Gray		5		
282	スイカズラ科	サンゴジュ	<i>Viburnum odoratissimum</i> Ker-Gawler var. <i>awabuki</i> (K. Koch) Zabel	6	6		
283	オミナエシ科	オトコエシ	<i>Patrinia villosa</i> (Thunb.) Juss.	9-10			
284	オミナエシ科	ツルカノコソウ	<i>Valeriana flaccidissima</i> Maxim.		4-6	4-5	
285	* オミナエシ科	ノジシャ	<i>Valerianella olitoria</i> Poll.	4			
286	ウリ科	カラスウリ	<i>Trichosanthes cucumeroides</i> (Ser.) Maxim.	8	8	8	8
287	キキョウ科	ホタルブクロ	<i>Campanula punctata</i> Lam.	6			
288	* キキョウ科	キキョウソウ	<i>Triodanis perfoliata</i> Nieuwl.	6			
289	キキョウ科	ヒナギキョウ	<i>Wahlenbergia marginata</i> (Thunb.) A. DC.	5,10	5-7,10	5-6,10	
290	* キク科	ブタクサ	<i>Ambrosia artemisiifolia</i> L. var. <i>elatior</i> Desc.		9		
291	キク科	ヨモギ	<i>Artemisia princeps</i> Pamp.	10	10		10
292	キク科	シロヨメナ	<i>Aster ageratoides</i> Turcz. subsp. <i>Leiophyllum</i> (Franch. et Savat.) Kitam.		7		
293	キク科	ヤマシロギク	<i>Aster ageratoides</i> Turcz. subsp. <i>amplexifolius</i> (Sieb. et Zucc.) Kitam.	10-12	10-11	10-11	10-11

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
294	キク科	シラヤマギク	<i>Aster scaber</i> Thunb.	10	10	10	
295	キク科	ダルマギク	<i>Aster spathulifolius</i> Maxim.		9-12		
296	* キク科	ホウキギク	<i>Aster subulatus</i> Michx.	9	9-10		
297	キク科	センダングサ	<i>Bidens biternata</i> (Lour.) Merr. et Sherff	9-12	8-10	10	4
298	* キク科	アメリカセンダングサ	<i>Bidens frondosa</i> L.	9-12	9-10	10	
299	* キク科	コセンダングサ	<i>Bidens pilosa</i> L.	10-12	10-12	10,12	11-12
300	* キク科	シロバナセンダングサ	<i>Bidens pilosa</i> L. var. <i>minor</i> Sherff	10-12			
301	キク科	ノアザミ	<i>Cirsium japonicum</i> DC.	5-6,8	5-7	5	4
302	* キク科	アレチノギク	<i>Conyza bonariensis</i> Retz.	8-10	6,8-10	9-10	
303	* キク科	オオアレチノギク	<i>Conyza sumatrensis</i> Walker	8-10	9	9	
304	* キク科	ベニバナボロギク	<i>Crassocephalum crepidioides</i> (Bentham) S. Moore	8-12	7-8,11-12	8,10-12	
305	キク科	シマカンギク	<i>Dentranthema indicum</i> (L.) Des Moulins	11-1	11-12	11-12,2	11-1
306	* キク科	タカサブロウ	<i>Eclipta thermalis</i> Bunge	9			
307	* キク科	ダンドボロギク	<i>Erechtites hieracifolia</i> (L.) Raf.	9-11			
308	* キク科	ヒメジョオン	<i>Erigeron annuus</i> Pers.	5-12,3	5-11	5-9,11	7
309	* キク科	ヒメムカシヨモギ	<i>Erigeron Canadensis</i> L.	8-10	5,8-10		
310	キク科	ヒヨドリバナ	<i>Eupatorium chinense</i> L.	9	8-9	8	
311	キク科	ツワブキ	<i>Farfugium japonicum</i> (L. fil.) Kitam.	10-12	10-12	11-12	11
312	* キク科	ハキダメギク	<i>Galinsoga quadriradiata</i> Ruiz et Pav.	6,12	12	12	
313	キク科	チコグサ	<i>Gnaphalium japonicum</i> Thunb.	6	5-6,9-10	6	
314	* キク科	チコグサモドキ	<i>Gnaphalium pensylvanicum</i> Willd.	6	6-7	6-7	
315	* キク科	ウラジロチコグサ	<i>Gnaphalium spicatum</i> Lam.		5-6		
316	キク科	オオジシバリ	<i>Ixeris debilis</i> A. Gray	5	5	5	4-5
317	キク科	ニガナ	<i>Ixeris dentate</i> (Thunb.) Nakai	7-8,11	7-8,11-12	7,12	8
318	キク科	ジンバリ	<i>Ixeris stolonifera</i> A. Gray	5-6	4-5		4
319	キク科	オオユウガギク	<i>Kalimeris incisa</i> (Fisch.) DC.				11
320	キク科	ヨメナ	<i>Kalimeris yomena</i> Kitam.	7,10-12		11	9-12
321	キク科	アキノノゲシ	<i>Lactuca indica</i> L.	9-12	9-11	9-10	10
322	キク科	フキ	<i>Petasites japonicus</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.				3
323	キク科	コウゾリナ	<i>Picris hieracioides</i> L. subsp. <i>japonica</i> (Thunb.) Krylov	4-6	5-6	5-6	4-5
324	* キク科	ノボロギク	<i>Senecio vulgaris</i> L.	4,6	4,3		
325	キク科	ツクシメナモミ	<i>Siegesbeckia orientalis</i> L.	10			
326	* キク科	セイタカアワダチソウ	<i>Solidago altissima</i> L.	10-12	10-11	10-11	

	科名	種名	学名	A)南西	B)北東	C)中央	D)山頂
327	* キク科	オニノゲシ	<i>Sonchus asper</i> Hill	7·8			
328	キク科	ノゲシ	<i>Sonchus oleraceus</i> L.	4·6·8·12·2·3	4·6·8·3	5·8	5
329	キク科	シロバナタンポポ	<i>Taraxacum albidum</i> Dahlst.	4·6·1·3	5·10·3	4·5·3	4·3
330	* キク科	アカミタンポポ	<i>Taraxacum laevigatum</i> DC.		5·7·10·11·3		
331	* キク科	セイヨウタンポポ	<i>Taraxacum officinale</i> Webb.	4·8·10	4·7·11	4·7	4
332	キク科	ネコノシタ	<i>Wedelia prostrata</i> (Hook. et Arn.) Hemsl.		7·12		
333	* キク科	オオオナモミ	<i>Xanthium occidentale</i> Bertoloni	10			
334	キク科	ヤクシソウ	<i>Youngia denticulata</i> (Houttuyn) Kitam.	11	-		
335	キク科	オニタビラコ	<i>Youngia japonica</i> (L.) DC.	4·7·9·11·3	4·6·9·11	4·6·10·11	4·5·10·11·3
			帰化種(*)数	78 種	71 種	45 種	33 種
			出現種数	335 種	279 種	228 種	161 種
							101 種





山田顥義書簡 奥平謙輔宛（萩市郷土博物館蔵）

る報告によつて明らかにしている。

(11) 「山田顕義伝」三六三、三六四頁。この書簡が山口の藩厅に届いたのは、翌明治

二年二月十三日であつたといふ。なお、「修訂防長回天史」一二(九五、九六頁)

にも同じ書簡が収録されているが、「(前略) 其後至今日日々、賊ノ傲慢ヲ憤許ニテ軍艦一艘モ無之、致方更ニ無之、生來之苦痛此事ニ御座候、東京ヨリ軍艦御仕向ニ相成候モ、何其年内ニハ相運申間敷ト被相考候付、來夏迄ト安心罷在候、就而ハ当冬ハ非常之寒地ニシテ兵隊モ余程難渋罷在候事故、金子御仕送之事万事可然御手配被下度奉希候(後略)」と若干異なる部分がある。しからずれにせよ原典は示されていない。

(12) 「山田顕義伝」三六六頁。「修訂防長回天史」一二、七五頁。

(13) 「戊辰戦争論」三二一、三二三頁。

(14) 「山田顕義伝」三六九頁、同三七三、三七四頁。「修訂防長回天史」一二、九七、一〇〇頁。

(15) 「戊辰戦争論」三一五、三三二頁。

(16) このことに関する論考としては、安井久善「山田顕義の兵学実践」(『山田顕義一人と思想』日本大学総合科学研究所、一九九一年)、三毛守常「山田顕義と兵学教育」(同書所収)等がある。

(17) 「新潟県史 通史編6 近代」(一九八七年) 一三三頁。

(18) 奥平家文書八。

(19) 「佐渡維新日記」(山本修之助編「佐渡叢書」六、佐渡叢書刊行会、一九七五年)一四二、一四八頁、及び同書所収解題三一、二六頁。同日記は、佐渡奉行所地役人を務めた矢ヶ崎与十郎の「松ヶ崎在勤中日記」(文久三年十一月十九日)、同三年七月三日)、「小木湊在勤中日記」(慶応四年五月一日)、明治二年正月一日)、「本府在勤日誌」(明治二年七月一日)同年十二月二十四日)を翻刻したものである。なお同日記には、同役人水田嘉六が夷番所在勤中に集録した「外國方御用状往復留」も付録として収められている。

(20) 前掲「新潟県史」二三三、一三五頁。なお、山本修之助「佐渡の百年」(佐渡郷土文化の会、一九七二年、六一、六二頁)は、役所移転を明治元年十一月二十日としている。

(21) 奥平家文書九、一三〇。『佐渡の百年』五九頁。

(付記) 山田顕義書簡の解説に際し、急のお願いにもかかわらず、武藤滋子氏(東京

都)にご指導を頂きました。ここに記して謝意を表します。

日、奥平の先発として北辰隊が三隊に分かれて小木へ上陸した。奥平自身は同月十三日に蒸気船で小木港へ到着し、その夜は小木町阿弥陀院に宿泊した。翌十四日奥平は相川（佐渡郡相川町）へ向けて小木を出発、河原田（佐渡郡佐和田町）において旧佐渡奉行所組頭中山修輔と面会し、平稳裡に佐渡の支配を引きついだ。そして同月十五日前後には相川に到着したようである。

奥平は着任早々の同月十七日以降、北辰隊の幹部を中枢に登用して、佐渡の行政改革に着手した。そしてまもなく相川に置かれていた役所を石田村（佐和田町）に移したのだが、これにより佐渡の中心地は、佐渡奉行の陣屋が置かれていた相川から石田村へと移つたのである。⁽²⁰⁾その後奥平は、明治二年三月参謀職を解かれたが、同月徵士越後府権判事に任命され、引続き佐渡在勤を命ぜられている（明治二年一月八日、越後府再置）。しかしながらその約五カ月後の同年八月、奥平はこれまでの職務を免ぜられたのである。この理由はよくわからないが、その後間もなく秋へ帰つたものと思われる。

このように奥平は、明治元年十一月に佐渡に赴き、翌年八月までの約十ヵ月間佐渡に滞在していたということになるので、このことからも山田の書簡が明治二年一月一日に書かれたということは明らかである。

以上、今回は山田顯義の書簡を紹介し、年代推定のために一、三の角度から考察した。言い足りぬ点も多いが、とくに佐渡において「鬼參謀」と呼ばれたという奥平謙輔については、また機会を改めて述べたい。

注

- (1) 村井益男「山田顯義の書簡 井上馨宛」（日本大学精神文化研究所紀要）二七、一九九六年。同報告は、国立国会図書館憲政資料室所蔵「井上馨文書」に含まれる山田顯義の井上馨宛書簡計七通を翻刻・紹介したものである（うち三通は井上以外宛てたもの）。村井氏によれば、山田顯義の発した書簡は、伊藤博文関係文書研究会編「伊藤博文関係文書」に一二三通、大東文化大学東洋研究所編刊「松方正義関係文書」に四三通収められているという。なおこれらの外に、「山田伯爵家文書」（全七冊、付総目録、日本大学編集発行、一九九一～九二年）にも多くの山田書簡が収録されている。

- (2) 当館所蔵の山田顯義書簡としては、現在、本稿で紹介するもの以外に五通を確認している。内訳は、後藤新平宛一通（歴史一般資料六五）、楫取素彦宛一通（杉家寄贈資料一三二三六）、杉民治宛三通（同一一三二三七）、頓野馬彥宛一通（同一一三二六一七六）である。

- (3) 奥平家文書五〇。縦一九・五×横一〇〇・五cm、和紙一枚が継いであり、未装の状態である（小稿末尾の写真参照）。奥平家文書は、平成十一年（一九九九）九月、静岡県の奥平正和氏より当館へ寄贈された。現在、同文書は一応の整理を終えて仮目録を作成した状態にあるので、事前に連絡をいただければ、仮目録・史料とともに閲覧可能である。

- (4) 日本大学編「山田顯義伝」（日本大学、一九六三年）九九二二頁。

- (5) 同右九九〇～九九一頁。

- (6) 同右三五二～三五三頁。この時長州藩兵は全軍を二軍に分かち、第一軍四百五十名は整隊長品川弥二郎が率いて十月二十五日に秋田を出発、第二軍四百一十三名は総隊長山田が率いて翌二十六日に同地を出発、第一軍は十一月四日、第二軍は翌五日それぞれ青森に到着している。そして同月八日までに、輪重、軍夫等の後続部隊が相当数入つたようである。なおこの間の動向については、末松謙澄「修訂防長回天史」一一（復刻版、マツノ書店、一九九一年、五六六～五六七頁）に詳しい。

- (7) 「山田顯義伝」三六一頁。「修訂防長回天史」一一、六五八頁。

- (8) 石井孝「戊辰戦争論」（吉川弘文館、一九八四年）二七七、二八一頁。

- (9) 「山田顯義伝」三六一～三五八頁。「修訂防長回天史」一一、六六〇～六六一頁。

- (10) 「戊辰戦争論」三二〇～三二一頁。石井氏は、旧幕府軍が弾薬や金銭、食料等に欠乏している状況を、イギリス公使パーカスや同国公使館書記官アダムズらよ

非常の寒地にして、兵隊も余程難波罷り在る事故、金子御仕送りの事万
事然るべく、御手配下され度、希い奉り候（後略）⁽¹⁾と軍艦が不足して
いることについて苦言を呈し、金錢の仕送りを依頼している。ところが
実際は、大総督府においては青森駐屯軍の渡洋作戦に応じて、新政府お
よび各藩所有の優秀艦船に対しても明治二年二月中旬までに江戸湾集中を
命じた。⁽¹²⁾これにより翌三月九日、甲鉄（ストーンウォール号、アメリカ
製）をはじめ春日・丁卯の軍艦三隻、ならびに飛龍・豊安・戊辰・晨風
の運送船四隻が品川沖を出発、さらに浦賀で軍艦陽春を加え、計八隻の
艦船が三月二十六日青森に入港したのである。⁽¹³⁾

こうしてみてみると、今回紹介した山田の奥平謙輔宛書簡は、やはり
明治二年二月一日に書かれたものと考えて間違ひなさそうである。すな
わち山田は、明治元年十二月の時点では、まだ青森から箱館へ渡海する
ための手段を持っていなかつたが、翌年二月早々には何らかの形で軍艦
回航についての情報を得たので、早速それらの燃料として石炭の廻漕を
奥平に依頼したのだと推測できるだろう。管見では、実際に山田が奥平
から石炭の補給を受けたかどうかについては不明だが、この書簡は箱館
戦争の一側面を反映する史料として注目すべきものと言えるであろう。

その後山田は同年四月四日、青森口総督府から陸軍參謀兼海軍參謀に
命ぜられ、長州藩士森清蔵が副參謀となり、同月六日總勢千五百名の兵
を率いて青森湾を出港した。⁽¹⁴⁾そして同月九日江差の北四里余の乙部村に
上陸し、同月十七日松前城を攻略、さらに翌五月十一日には箱館を占領
し、同月十八日ついに五稜郭を開城させたのである。こうして山田は、

類稀なる兵学知識を駆使して旧幕府軍を破つたのであるが、その知識に
ついては大村益次郎の影響に負うところが大きいと指摘されている。⁽¹⁵⁾

以上で大体書簡の年代は推定できたが、さらに書簡の中ほどに「御地」
という語があり、その傍注として「夷港とか云」と記されているのに注
目してみよう。これは文脈から、書簡の受取人である奥平謙輔のいる場
所を指しているのは明らかであるから、奥平はこの時点で佐渡夷港（現
在の両津市）に滞在していたということになる。ここまで、奥平につい
てはほとんど触れることができなかつたが、年代推定の傍証ともなるの
で、これを機会に奥平の動向をも探つてみたい。

ところで、佐渡の支配体制は複雑に変遷しているので、奥平が赴任す
る以前の状況をあらかじめ確認しておこう。明治元年九月一日佐渡裁判
所が廃止されて佐渡県が設置されたが、県知事に任命された井上馨が赴
任しなかつたため、佐渡は従来どおり旧奉行所の役人中山修輔らの支配
下にあつた。しかし、新潟港とその補助港に指定された夷港の開港を間
近に控えた同年十一月五日、政府は越後・佐渡の統一支配を目指して佐
渡県を新潟府（旧越後府、明治元年九月二十一日改称）の管轄とし、民
政方役所を設置した。⁽¹⁶⁾

こうした状況において、奥平は明治元年十月、佐州參謀兼民政方とし
て佐渡へ赴任するよう命ぜられたのである。以降の状況について「佐渡
維新日記」を見ていくと、奥平が佐渡へ赴任することは同月三十日に佐
渡の小木番所（佐渡郡小木町）へ伝わり、翌月五日には奥平が三小隊を
率いて渡海していくという詳しい情報が伝わっている。そして同月十一

この書簡において山田は奥平へ、近々自分の所へ東京から軍艦が到着すると思われるが、越後地同様当地も石炭が底をついて海軍の進退に懸念があるので、先日兵庫軍務官から「御地」へ送られたという石炭三十万斤、その外石炭の貯蔵があれば、青森港まで廻漕してほしいと依頼している。しかしながらこの書簡には、「二月一日」としか日付が記されていないので、年代を推定する必要がある。

まず、「山田市之允」と署名されているのに注目した。山田は明治二年（一八六九）八月十九日、通称を市之允から顕義と改めているので、これに従えば、書簡はこの日以前に記されたのではないかと考えられる。しかし、顕義と改名した後にも市之允と署名した可能性がないわけではないので、これだけで明治二年八月以前とするのは不充分であろう。

そうすると書簡の内容から判断するしかないが、つぎに書簡中の「青森港」というのに注目してみると、これは文脈から見て山田がいる場所を指しているのではないかと考えられる。実際、山田の青森との関係を見いくと、やはり彼は明治元年十一月から翌二年四月まで青森に滞在しているのである。そこで以下に詳しくその経緯を追つてみよう。

山田は明治元年正月の鳥羽・伏見戦争以来、征討総督仁和寺宮嘉彰親王副参謀、軍艦丁卯丸司令、海軍参謀等を歴任して常に前線で諸隊の指揮を執り、東北・北越諸藩を攻略した。⁽⁵⁾ そしてついに山田は同年十月二十六日、箱館攻略のため部隊を率いて秋田を出発、翌十一月五日青森に到着したのである。⁽⁶⁾ 山田はさらに同月九日付で大総督府から青森口陸軍参謀に任せられ、同月二十五日正式に箱館攻略を命ぜられた。ただし

この時、軍艦がまだ不足しているため、敵の艦隊に後路を絶たれるおそれがあるので、明春を待つて完全に準備を整え、一挙に攻撃するようとの大総督府の命令が付されていたのである。⁽⁷⁾

この頃の箱館をめぐる情勢としては、明治元年八月十九日江戸湾品川沖を出帆した榎本武陽の率いる旧幕府艦隊が、同年十月二十日蝦夷地鷲ノ木に到着、同月二十五日箱館および五稜郭を奪取した。さらに翌十一月五日松前城を攻略し、同月十五日には江差をも占領した。こうして同年十二月五日、箱館に旧幕臣による「蝦夷政権」が発足したのである。⁽⁸⁾

これを受けて大総督府内では、旧幕府軍をすみやかに討伐すべしとの意見が多数出されたが、明春を待つべしとの意見を述べてそれらを抑えたのは、軍政官大村益次郎であった。大村は、青森一帯に味方を集結して進撃の勢いを示すならば、箱館方面の敵はこちらの来襲に備えて日夜警戒し、さらに慣れない厳寒の地での生活を強いられ、食糧補給の途も完全に鎖されていることから、来春に至れば必ず銳氣も衰えるだろうと述べている。⁽⁹⁾ しかし実際は、大村が予期せずとも、「蝦夷政権」は発足当初から極度に窮迫した状態にあつたようである。⁽¹⁰⁾

山田は、青森に駐屯を開始してから一ヶ月余り過ぎた明治元年十二月十八日付で、長州藩要路の杉孫七郎・山県弥八・中村誠一に宛てて戦況報告の書簡を送った。その中で彼は「（前略）其後今日に至る日々、賊の傲慢⁽¹¹⁾を憤る許りにて軍艦一隻も無之、致し方更に無之、生來之苦痛此事に御座候。東京より軍艦御仕向に相成候も、何分年内には相運び申す間敷と相考へられ候に付、来夏迄と安心罷り在り候。就而は当冬は

山田顕義の奥平謙輔宛書簡について

※道迫真吾

山田顕義がその生涯に多くの書簡をのこしたことについては、すでに村井益男氏によつて詳細な報告がなされている。山田の書簡は本館所蔵史料中にも何通か確認できるが、小稿では奥平謙輔に宛てた書簡を一通紹介し、それに少し考察を加えることとしたい。

山田顕義（一八四四～九二）は、萩藩大組士山田七兵衛顕行（一〇二石）の長男として城下東郊の中ノ倉に生まれ、市之允と称した。藩校明倫館・松下村塾に学び、尊攘・倒幕運動に奔走。維新後兵部大丞となり、岩倉使節団に参加、西南戦争鎮定の功により陸軍中将となつた。明治十八年（一八八五）伊藤博文内閣へ司法大臣として入閣、以降黒田・山県・松方の各内閣で法相を務め、近代法典の編纂に当たつた。また日本法律学校（日本大学）や國學院（國學院大學）の創立にも尽力した。

一方、奥平謙輔（一八四一～七六）は、萩藩大組士奥平清兵衛（九四五斗）の第五子として城下土原に生まれ、慶応元年（一八六五）長兄数馬の養子となつた。明倫館に学び、下関外國船砲撃や禁門の変に参加。慶応二年（一八六六）千城隊に入り四境戦争に従軍、戊辰戦争では越後・会津に転戦した。明治元年（一八六八）佐州參謀兼民政方として佐渡へ赴任したが、翌年辞職して萩に帰つた。同九年前原一誠らと萩に挙

兵したが敗走、出雲宇龍港で捕えられ、萩で斬首された。

両者を比較してみると、山田はいわゆる明治の元勲の一人に数えられるのに対し、奥平は明治初年に下野して萩の乱に倒れたというように、萩出身者同士で好対照をなしている。このように、明治初年以降はあまり接点のなさそうな両者であるが、早速書簡の内容を示してみよう。

愈以御堅固御在勤ニ被為上敬賀、扱當境にて無事徒に春而已望候、何とも赤面之至ニ御座候、我處近々東京より軍艦廻着と覺候得共、越後地同様当地も石炭一切無之、海軍之進退又々懸念罷在候、承候得ハ、過日兵庫軍務官より督用之ため石炭三拾八万斤御地奥平とかもまで送来在候由、千万御手數之至ニ候得共、何分右之分急速日本船ニ御積せ被下、青森港御廻被成下度奉希候、其外も石炭御貯有之候得ハ、何分同様御送方偏ニ御頼仕候、船貨等之儀ハ素より当方ニテ私方致候間、是又御所江差上候、先ハ急要而已奥平とかも差述候、残寒嚴峭天時御重書為因拝謝、草々不悉

二月二日

奥平謙輔

要急

山田市之允

2002年3月15日 印刷
2002年3月29日 発行

茨市郷土博物館研究報告
第12号

発行 茨市郷土博物館
茨市江向552-11
印刷(有)マシヤマ印刷
茨市大字椿3732-7

